

令和元年度

体育センター長期研修研究報告

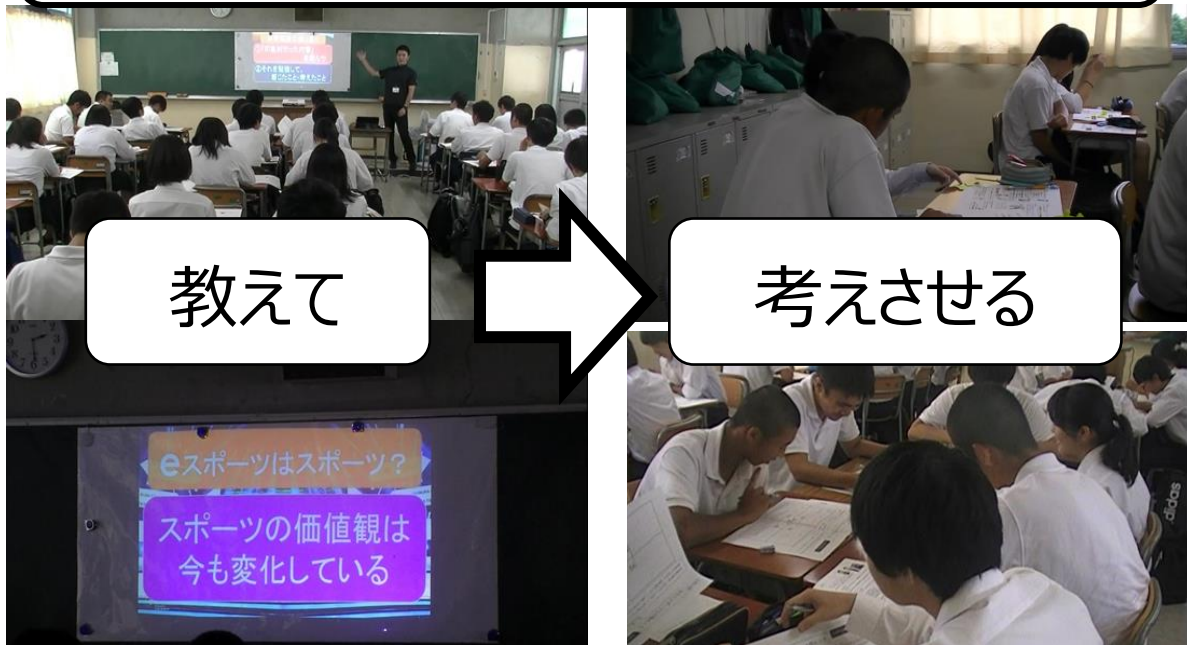
# スポーツの価値意識を高め、スポーツとの 多様な関わり方の思考を広げる体育理論

—「教えて考えさせる授業」を通して

「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材の活用—



## スポーツの価値意識・スポーツとの多様な関わり方



神奈川県立体育センター 長期研究員  
神奈川県立瀬谷高等学校 平野 太一

# 目次

## 第1章 研究を進めるにあたって

1	研究主題	1
2	主題設定の理由	1
3	研究目的	2
4	研究仮説	2
5	研究方法	2
6	研究の構想図	3

## 第2章 理論の研究

1	体育理論について	4
2	「教えて考えさせる授業」について	6
3	検証授業に係る体育理論の学習内容	7
4	スポーツの価値意識について	8
5	スポーツとの多様な関わり方について	9
6	本研究におけるスポーツの定義について	10

## 第3章 検証授業

1	検証授業	11
2	検証方法	12
3	学習指導計画	14
4	学習指導の工夫	18
5	授業の実際	36
6	実態調査の結果	42
7	検証授業の結果と考察	44

## 第4章 研究のまとめ

1	研究の成果と課題	63
2	共通教材としての検討	68
3	今後の展望	70

[引用・参考文献等]	73
------------	----

# 第1章 研究を進めるにあたって

## 1 研究主題

スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げる体育理論  
- 「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材の活用-

## 2 主題設定の理由

平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下、答申という。）には、具体的な改善事項として、「体育については、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、運動に対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、『する、みる、支える』に『知る』を加え、三つの資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図る」<sup>1)</sup>と示された。また、答申において、高等学校科目体育については、「スポーツの意義や価値等の理解につながるよう、内容等について改善を図る」<sup>2)</sup>と示された。

そして、平成30年告示高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編（以下、新解説という）には、「『する、みる、支える、知る』といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続していく資質・能力の育成に向けて、運動やスポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の学習の充実」<sup>3)</sup>が必要である旨が記載された。

しかしながら、体育理論の内容が大幅に変更され、指導内容がより明確に示された平成21年の改定以降、友添は、一般の大学生や若い人たちが「いかに体育・スポーツにかかわる知識を学んでこなかったか」<sup>4)</sup>と述べ、高校までに学んでおくべき重要な体育理論の学習内容に対しての習得状況を危惧している他、複数の研究者が、体育理論の実施状況について芳しくないことを指摘している<sup>5) 6) 7) 8) 9) 10)</sup>。

このような背景から、松田は、体育理論の授業実践の確実な定着のため、教材づくりの有効性を高めることの必要性を述べており<sup>11)</sup>、大越も、体育理論のアクティブ・ラーニングのロールモデルの提示、教材づくりが体育科教育関係者に求められていると述べている<sup>12)</sup>。

これらのことから、体育理論の教材研究は他領域と比べ進んでいないと考えられ、また、単元を通しての実践研究報告も少なく、多くの学校現場では、授業イメージを持ちにくいなど、体育理論学習の充実が図れていないと考えられる。

ところで、市川は、教師が一方的に教え込む授業や、教師が説明をしてくれないといった「わからない授業」、「教えずに考えさせる授業」に疑問を抱き、教師がていねいに教え、生徒の理解状態を把握する手立てを講じながら、知識を身に付けさせることを基調とした「教えて考えさせる授業」を提唱している<sup>13) 14) 15)</sup>。教師の説明、理解確認、理解深化、自己評価の4つの段階で授業を構成し、教師が基本的なことを教えた上で、問題解決や討論を行うという授業論であり、多くの校種や教科で「教えて考えさせる授業」による実践が行われ、成果が報告されている<sup>16) 17) 18)</sup>。

そこで、新解説の体育理論「内容の取扱い」において、「主に概念的、理念的な知識を中心に引き上げ、指導方法の工夫などにより確実に習得させるようにする」<sup>19)</sup>ことや、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて事例などを用いたディスカッションや課題学習などを各学校の実態に応じて取り入れること」<sup>19)</sup>が示されていることから、体育理論においても、知識を基礎として問題解決学習を行う「教えて考えさせる授業」による学習が効果的であると考えた。

以上のことから、「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を作成し活用すれば、生徒のスポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げることができ、体育理論の効果的な授業づくりを提案できると考え、本主題を設定した。

### 3 研究目的

「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を活用し、スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げる体育理論の授業づくりについて提案する。

### 4 研究仮説

高等学校第1学年の体育理論の単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」において、「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を活用すれば、スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げることができるであろう。

### 5 研究方法

- (1) 授業を実践するにあたり、理論研究を行い、仮説を設定する。
- (2) 理論研究を基に指導と評価の計画を立て、筆者自身が授業を実践する。
- (3) 理論研究と仮説検証の結果を基に、研究のまとめを行う。

※ 本研究では、スポーツ基本法<sup>20)</sup> や神奈川県スポーツ推進計画<sup>21)</sup> のスポーツの定義から、「運動」を「スポーツ」に含めることとした。(p. 10参照)

スポーツの価値意識が高まる  
スポーツとの多様な関わり方の思考が広がる

**教える場面** 基本的な知識の習得



教師の説明  
(教材、教具の工夫)

**考えさせる場面** 習得した知識を活用する力の育成



理解確認  
(ペア・ミーティング)



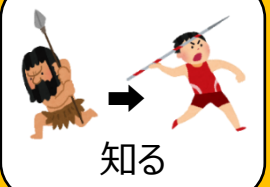
理解深化  
(問題解決活動)



自己評価  
(学習ノート)

「教えて考えさせる授業」による学習

スポーツを「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材



【問題点】 **体育理論**の効果的な授業モデルが少ない

体育（体育理論）の現状

生徒

- 体育理論の学習内容の習得状況が危惧されている
- 「体育は実技科目」という認識

教員

- 「内容が扱いづらい、教材が無い」、「運動することが重要」、「子どもの反応が良くない」
- 「『体育は実技科目』という認識」で「教員もその認識に同調」

- ・スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるよう「する、みる、支える」に「知る」を加え、学習過程を工夫し充実を図ること
- ・スポーツの意義や価値等の理解につながるよう、内容等について改善を図ること

H28中央教育審議会答申

「する、みる、支える、知る」といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続していく資質・能力の育成に向けて、運動やスポーツの価値や文化的な意義等を学ぶ体育理論の学習の充実が必要

H30学習指導要領解説保健体育編体育編

## 第2章 理論の研究

### 1 体育理論について

#### (1) 近年の学習指導要領における体育理論の扱いの変遷

体育理論は、常に学校体育指導要綱や学習指導要領に位置付けられており、授業時間数についても変遷はあるものの、1956（S31）年学習指導要領から明記されてきた。しかし、1998（H10）年学習指導要領には体育理論の具体的な授業時数が明記されなかった。野間は「授業時数について記さなかったことが、現場における体育理論の必要性についての理解を後退させた結果につながったのではないか<sup>22)</sup>」と述べ、岡出は「体育理論を独立した内容領域としつつも、実質的には実技の中で関連する知識が提供できる状況を生み出していた<sup>23)</sup>」と述べている。

そのような背景から、平成20年告示中学校学習指導要領、平成21年告示高等学校学習指導要領（以下、現行指導要領という。）において、体育理論については、中学校は各学年3単位時間以上、高等学校は各年次6単位時間以上と具体的な授業時数が明示された<sup>24)</sup> <sup>25)</sup>。また、高等学校への接続も考慮し、これまで中学校で「体育に関する知識」と示されていたが、この改訂で領域の名称が「体育理論」に変更されることとなった。<sup>26)</sup>野間は、「授業時間数が明示されたことは『体育理論』の確実な実施を目指してのことであろう<sup>27)</sup>」と述べ、岡出は、「直接運動をすることと関連づけて教える知識とそこから距離を置いて教える知識が整理されたことを示唆している<sup>23)</sup>」と述べている。

そして、平成30年告示高等学校学習指導要領（以下、新指導要領という。）において、体育理論は、主に現代におけるスポーツの意義や価値、科学的、効果的なスポーツの実践、豊かなスポーツライフの設計等に関わる内容で構成され、内容の取扱いにおいては引き続き各年次6単位時間以上を配当することと明記されている<sup>28)</sup>。新解説において、体育理論の内容は、中学校体育理論の学習成果を踏まえ、「する、みる、支える、知る」といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを卒業後にも主体的に実践できるようにするための構成と示されている<sup>29)</sup>。

#### (2) 体育理論の重要性

答申において、体育については、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、運動に対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、学習過程を工夫し、充実を図ることが示された<sup>1)</sup>。新解説において、体育の知識については「意欲、思考力、運動の技能などの源となるもの」と位置付け、定着を図る重要性が示された。さらに、「する、みる、支える、知る」といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続していく資質・能力の育成に向けて、スポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の学習の充実の必要性が示された<sup>3)</sup>。また、友添は、これからの体育は実技と知識の相互の関係を踏まえた授業が展開されていくことが求められ、その知識の核になるのは体育理論であり、体育の学習に際してこれまで以上に重視されることになったと述べている<sup>30)</sup>。スポーツを知的なレベルでとらえ、できることと同時に、スポーツの仕方や原理や法則、社会的な意味や文化的意義を理解させることが重視される体育授業が求められ、このような体育を実現していくには、何よりも体育理論が重視されなければならないと述べている<sup>31)</sup>。

さらに、大越は、高校卒業段階では、スポーツと多様に関わる能力を身に付けさせるための知識と実践の往還の必要性を述べている<sup>32)</sup>。運動領域では「する、みる、支える、知る」

の具体について体験を通して学ぶ。知識に関する領域である体育理論で様々な運動領域で学んだ関わり方の共通概念として、実生活に生せるよう、運動領域と関連させながら系統的に学ぶことが重要であると述べている<sup>32)</sup>。

以上のとおり、21世紀の知識基盤社会の中で知識の重要性が示され、体育の知識に関する領域である体育理論の充実の重要性が求められている。

### (3) 体育理論の授業実態、問題点

友添は、体育・スポーツ系学部・学科に在籍する大学生を対象とした「高校までの体育で学んでおくべきキーワードを知っているか」を問う調査の結果から、「いかに体育・スポーツにかかわる知識を学んでこなかったかは容易に推測できる」<sup>4)</sup>と述べている。また、その回答した多くの学生から「中・高校の体育の授業は実技ばかりで、体育の意義やスポーツ文化を相対化する、体育・スポーツにかかわるこういった基本的な知識や理論を教えられてこなかった」<sup>4)</sup>といった意見を耳にし、高校までの体育で学んでおくべき重要な学習内容に対しての習得状況を危惧している。

笹生らは、「高等学校における体育理論授業の実態に関する研究」において、大学生を対象に体育理論を高校の時に実施されたかどうかを問う質問の結果から、体育理論が「実施された」と答えた者が33.6%<sup>5)</sup>であり、「すべての高校において体育理論の授業が実施されているわけではなかったことが推察される」<sup>5)</sup>、「高校の保健体育科において、体育理論は必修として扱われていない可能性があることが明らか」<sup>6)</sup>と述べている。

村瀬らは、中学校保健体育科教員を対象とした質問紙による調査の結果及び考察では、「単元として実施」と回答したのが46.7%だが、「実際の実施率は1～2割程度とも推察でき、中学校現場における体育理論実施率の低さを窺うことができる」<sup>7)</sup>と述べている。

このように実施に至らない原因として、村瀬らは、「教材の扱いづらさ、生徒たちの反応の悪さ」<sup>8)</sup>と「教員の教材研究の不足」<sup>8)</sup>を挙げ、黒澤も、中学校・高等学校の教員へのインタビュー調査から「生徒にとって『体育は実技科目』という認識が非常に強いということ」と「教員もその認識に同調」<sup>9)</sup>して、実技中心のカリキュラムを構成していると述べており、「要領に示されている『体育理論』の授業実施のねらいや目標と、中学・高校の授業実践に大きな乖離が生じている」<sup>10)</sup>とも述べている。

以上のことから、体育理論の授業は現場に浸透しきれておらず、授業改善も十分に進んでいないと考えられる。

### (4) 体育理論の課題解決に向けて

大越は、21世紀を生きる子どもたちの長い生涯を見通し、そこに豊かなスポーツライフの創造を期待し、スポーツ文化の担い手として育て上げるためにも体育理論の授業観を転換していく必要があるとし、体育理論のアクティブ・ラーニングのロールモデルを提示していくことが、体育科教育関係者に求められていると述べている<sup>12)</sup>。そして、そうした授業の成立にとって決定的に重要なのが教材づくりであると述べている<sup>12)</sup>。

村瀬らは、子どもたちが体育理論に意義を認めて受講することで、生涯スポーツへと繋がる態度を育成することができるであろうと述べており、そのために教師は生徒に体育理論単元の意義を感じさせる授業を行わなければならないと述べている<sup>33)</sup>。したがって、体育理論を単元でアクティブ・ラーニングとして行うこと、教師の十分な教材研究と将来に生涯スポーツへと繋がるという信念の必要性を述べている<sup>33)</sup>。

以上のことから、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた体育理論の授業づくりを提案することが課題解決につながると考えられる。

## 2 「教えて考えさせる授業」について

### (1) 「教えて考えさせる授業」を活用するに至った背景

答申において「習得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること」<sup>34)</sup>が示された。

また、新解説において、各年次6単位時間以上としたのは、主体的・対話的で深い学びの実現に向けてディスカッションや課題学習などを取り入れることができるように配慮したためと示されており、アクティブ・ラーニングの視点を持った主体的・対話的で深い学びを実現するための授業展開が求められている<sup>19)</sup>。さらに「体育理論では、主に概念的、理念的な知識を中心に上げ、指導方法の工夫などにより確実に習得させるようにする」<sup>19)</sup>と示されており、知識の確実な習得が求められている。

以上のような課題を解決するためには、アクティブ・ラーニングの視点を持っていると考えられる市川の提唱する「教えて考えさせる授業」が有効ではないかと考えた。

### (2) 「教えて考えさせる授業」とは

市川は、教師からの一方的な教え込みによる「わからない授業」や、1990年以降の「自ら学び、自ら考える子どもを育てる」という否定しようのないスローガンの中、平成20年中央教育審議会答申に、「子どもの自主性を尊重する余り、教師が指導を躊躇する状況があったのではないかと指摘されているように、教えることを手控えるのがよい教育であるかのような誤解から生まれた「教えずに考えさせる授業」に強く疑問を抱いていた<sup>13) 14) 35) 36)</sup>。

そこで、「知識があってこそ人間はものを考えることができること」、「学習の過程とは、与えられた情報を理解して取り入れることと、それをもとに自ら推論したり発見したりしていくことの両方からなること」など認知心理学を基盤とし、2001年頃から市川が訴え始めた授業論が「教えて考えさせる授業」である<sup>36) 37)</sup>。

具体的には、まず基本事項は「教師の説明」で共通に教えた上で、小グループの生徒同士で説明や教え合いにより「理解確認」を図る。さらに「理解深化」のために、学んだ知識を活かした討論などの問題解決学習に取り組み、最後は「自己評価」活動で生徒のメタ認知を促すという進め方が基本となっている<sup>38)</sup>。場合によって「予習」を求めることもある<sup>39)</sup>。また、市川は、「教えて考えさせる授業」は、問題解決学習を否定するものと誤解されがちであるが、むしろ討論等の問題解決学習を大いに重視していると述べており、それらを導入部から行うのではなく、「教える」場面で得た知識があってこそ、より質の高い問題解決学習をより多くの生徒が行うことができる<sup>40) 41)</sup>。基本的な用語の意味が分かっていなければ話し合いにならず、授業内容がわからなければ問題解決に向かう意欲も失せてしまうと述べている<sup>42)</sup>。市川は、「教えて考えさせる授業」は、より有効な問題解決学習、より多くの生徒が参加できる討論を行うための1つの手段と考えてほしいとも述べている<sup>41)</sup>。

### (3) 「教えて考えさせる授業」の学習の進め方

市川は、「教えて考えさせる授業」の学習の進め方について、次のように述べている<sup>43) 44)</sup>。

#### ア 教える

##### (ア) 教師の説明

「教えて考えさせる授業」における「教師の説明」とは、教科書に出ているような基本事項を教師から共通に教えること、情報を伝えることを指す。この際の注意点として、教材、教具、操作活動などを工夫したわかりやすい教え方を心がけること。また、教師主導で説明するにしても、子どもたちと対話したり、ときおり発言や挙手を通じて理解



状態をモニターしたりする姿勢を持つことが大切である。

#### イ 考えさせる

##### (ア) 理解確認

「考えさせる」の第1ステップとして、教科書や教師の説明したことが理解できているかを確認するために、小グループやペアに分かれて生徒同士の説明活動や教え合い活動を取り入れる。この活動は、問題を解いているわけではないが、考えないとできない活動として重視している。「人に説明できるかどうか」を1つの理解の目安にさせる。

##### (イ) 理解深化

「考えさせる」の第2ステップとして、教えられた知識を活用した問題解決活動を取り入れる。この活動でも小グループによる協同を重視し、生徒の参加意識を高めながら、理解を深めることを目指す。ここでどんな課題を用意するかが重要であり、「子どもにとって考えがいのある課題かどうか」を考え設定することが求められる。多くの子どもが誤解していそうな問題や教えたことを使って考えさせる発展的な課題を用意する。小グループによる、協同的な問題解決により、参加意識を高め、コミュニケーションを促す。

##### (ウ) 自己評価

「考えさせる」の第3ステップとして、子どもたちに自己評価活動をさせる。ねらいは、単なる感想や「どれだけがんばったか」の段階評定ではなく、「自分がわかったことは何なのか」、「まだよくわからないことは何なのか」を記述などにより表現させることを通して、「今回学んだことを、他の場面では活かさないだろうか」と考えることができるようになるなど、より効果的な学習につながる。また、教師が、今後授業をどう展開していくかを考えることに活用することもできる。

本研究においては、以上のような学習の進め方を基本として授業を構成した。

### 3 検証授業に係る体育理論の学習内容

2018（H30）年に学習指導要領が改訂されたが、本校の評価の観点、評価規準については現行指導要領の学習内容で行うことから、本研究では現行指導要領、高等学校学習指導要領（平成21年告示）解説保健体育編体育編<sup>45)</sup>（以下、現行解説という。）の学習内容で授業を展開することを基本とした。

なお、高等学校学習指導要領の改訂に伴う移行措置により「全部又は一部について新学習指導要領によることができる」<sup>46)</sup>となっていることから、取り扱う内容については柔軟に対応することとした。今後、新指導要領に移行することも踏まえ、本研究では新指導要領の内容も一部組み込んでいる。

本研究で扱う現行指導要領において、体育理論は次のような指導内容が示されている<sup>45)</sup>。

#### H 体育理論

##### 1 スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴

(1) スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について理解できるようにする。

ア スポーツは、人類の歴史とともに始まり、その理念が時代に応じて変容してきていること。また、我が国から世界に普及し、発展しているスポーツがあること。

イ スポーツの技術や戦術、ルールは、用具の改良やメディアの発達に伴い変わり続けていること。

ウ 現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものにオリンピックムーブメントがあること。また、ドーピングは、フェアプレイ

の精神に反するなど、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせること。  
 エ 現代のスポーツは、経済的な波及効果があり、スポーツ産業が経済の中で大きな影響を及ぼしていること。

本研究において、単元の学習内容にあたる上記ア、イ、ウ、エについては友添と同様に便宜上、以下、小単元と呼ぶこととする。<sup>47)</sup>

4 スポーツの価値意識について

(1) スポーツの価値教育の重要性

答申の教育内容の改善・充実において、高等学校科目体育については、「スポーツの意義や価値等の理解につながるよう、内容等について改善を図る」<sup>2)</sup>と示された。その答申を踏まえ、新解説において、改善の具体的事項の中に「運動やスポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の学習の充実」<sup>3)</sup>が必要である旨が記載された。

また、日本アンチ・ドーピング機構も『『スポーツの価値』を基盤とした教育-スクールプロジェクト-』においては、スポーツの価値を基盤とした教育は「自分自身の人生や社会へ良い影響を与えること、世界とつながること、未来を創造していくこと」と示され、第2期スポーツ基本計画の1つのキーワードとして、「スポーツの価値」が挙げられている<sup>48) 49)</sup>。

(2) スポーツの価値意識について

木村らは、「スポーツの価値(価値観、価値意識)に関する研究が対象としてきたスポーツは『する』スポーツや一部の競技者に限定的であり、スポーツ基本法をはじめとする新たなスポーツ諸政策に謳われているスポーツの価値とは必ずしも一致していないとの問題意識から、『支える』スポーツ、『みる』スポーツの価値意識を含めたスポーツ価値意識評価尺度を開発した」と述べている<sup>50)</sup>。

以上のことを踏まえ、平成28年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Iの「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第3報-」に示された「スポーツの価値意識」は、答申、新解説が示す「運動やスポーツの価値や文化的な意義等」等の内容を包括する意識として本研究では定義した。また、本研究における「スポーツの価値意識」について、数的な検証に適したものと考え、「スポーツ価値意識評価尺度(簡易版)」<sup>51)</sup>を採用することとした。

(図1参照、詳細はプリント資料編p.32参照)

図1 スポーツ価値意識評価尺度(簡易版)

さらに、生徒の自由記述から「スポーツの価値意識」の変容を見取ることとした。その際、「スポーツ価値意識評価尺度（簡易版）」の項目名を参考にカテゴライズすることとした。見取りにあたっては、次の例のようなことを予め想定した。

(例) スポーツの価値意識の高まり

「あなたの考える『スポーツの意義や価値』とは何ですか」  
事前アンケート「1記録を出すこと」（1. プレイ欲求充足）  
→事後アンケート「1記録を出すことも大切だが、オリンピックのようにスポーツを通して2世界平和につながったり、3ドーピングをしないようなフェアな精神を学ぶこともスポーツの価値だと思う」（1. プレイ欲求充足、2. 国際的価値、3. 教育的価値）  
※カテゴライズの詳細はp. 57参照

## 5 スポーツとの多様な関わり方について

### (1) スポーツとの多様な関わり方とは

スポーツとの多様な関わり方について、新解説の保健体育科改訂の要点の3番目には次のように述べられている<sup>52)</sup>。

運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する観点から、体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を卒業後も社会で実践することができるよう、共生の視点を重視して指導内容の充実を図ること。

また、新指導要領において、科目体育の目標に「体育の見方・考え方を働かせ」<sup>53)</sup>と記載があり、新解説では、「深い学びの鍵」<sup>54)</sup>とされる「体育の見方・考え方」については次のように述べられている<sup>55)</sup>。

体育の見方・考え方については、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」

以上のことから、スポーツとの多様な関わり方とは、具体的には「する、みる、支える、知る」とまとめることができる。

### (2) 「する、みる、支える、知る」について

答申においては、次のことが示された<sup>1)</sup>。

スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、運動に対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、三つの資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図る。

以上の答申を踏まえ、新解説「H 体育理論」において、次のように示された<sup>29)</sup>。

体育理論の内容は、中学校体育理論の学習成果を踏まえ、「する、みる、支える、知る」といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを卒業後にも主体的に実践できるようにするため、主に現代におけるスポーツの意義や価値、科学的、効果的なスポーツの実践、豊かなスポーツライフの設計等に関わる内容で構成されている。

高橋は、今次の改訂においては「する、みる、支える」に「知る」を加えて示されたが、これは「知る」ことは「する、みる、支える」ことと同様に、豊かなスポーツライフの実現に向けた重要な要素の一つであると示したものであると述べている<sup>56)</sup>。加えて「する、みる、支える、知る」活動の方法や内容を「知る」ことによって、「する、みる、支える、知る」活動により一層意欲をもち、運動やスポーツと多様な関わり方が広がるとともに深まっていくことを期待するものであると述べている<sup>56)</sup>。

大越は、運動やスポーツを「する」ことはもとより、「みる、支える、知る」などの運動やスポーツとの多様な関わり方を、生涯を通じて実践できるようにすることは、生きがいを持ち健康で活力ある生活を送る上で大きな意義があると述べている。そして、「する」スポーツの関わりを中核としながら、「みる、支える、知る」といったスポーツは互いに関連し合い、豊かな文化を形成し、発展し続けているとも述べている<sup>32)</sup>。

つまり、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現には、「する」スポーツとの関わり方だけでなく、「みる、支える、知る」スポーツとの関わり方を学ぶことが「スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする」ために重要だととらえることができる。

以上のことから、本研究における「スポーツとの多様な関わり方の思考の広がりとは、「する、みる、支える、知る」の視点の思考の広がりを指すこととする。

見取りにあたっては、次の例のようなことを予め想定した。

(例) スポーツとの多様な関わり方の思考の広がり

「現在、あなたは将来スポーツとどのように関わっていきたいと考えていますか」  
事前アンケート「健康のために<sub>1</sub>適度にランニングなどをする」(1. 「する」視点)  
→事後アンケート「健康のための<sub>1</sub>ランニングをする。また、<sub>2</sub>ボランティアでサポートスタッフをしたり、テレビなどで<sub>3</sub>オリンピックを観るなどして関わろうと思う」(1. 「する」視点に加え、2. 「支える」3. 「みる」視点が身に付き、多様な関わり方の思考が広がったととらえる)  
※「する、みる、支える、知る」のカテゴリの詳細はp. 60参照

## 6 本研究におけるスポーツの定義について

スポーツ基本法<sup>20)</sup>には、「スポーツは、(中略)個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動」と示され、また、神奈川県スポーツ推進計画<sup>21)</sup>においては、スポーツを「個人又は集団で行われる運動競技、その他の身体活動のこと。ルールや決まりに基づいて活動する陸上競技や球技、武道などだけではなく、体操、ダンス、レクリエーションとして行われる身体活動や、ウォーキングなどの軽度の運動も含むもの」と示されている。よって本研究においては、「運動」を「スポーツ」に含めることとした。

## 第3章 検証授業

### 1 検証授業

#### (1) 授業期間

令和元年8月26日(月)～9月17日(火) 6時間扱い(50分授業)

#### (2) 授業場所

神奈川県立瀬谷高等学校 第1学年6組、7組教室

#### (3) 授業者と対象

授業者 神奈川県立瀬谷高等学校 保健体育科教諭 平野太一(筆者)

対象 1年6組40名、1年7組40名

#### (4) 単元名

体育 H体育理論 第1単元 スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴

#### (5) 主なデータの収集方法

ア アンケート調査

(ア) 事前アンケート 8月26日(月)

(イ) 事後アンケート 9月19日(木)

イ 教材プリント及び学習ノート(毎時)

## 2 検証方法

(研究の仮説) 高等学校第1学年の体育理論の単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」において、「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を活用すれば、スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げることができるであろう。

### (1) 生徒が授業をどのようにとらえたか

具体的な視点	手がかり	質問内容等	
ア 体育理論の授業は楽しかったか	事後アンケート	「体育理論の授業は楽しかったですか」(4件法) 「今回の体育理論の授業の感想を書いてください」(自由記述から抜粋)	
イ 体育理論の必要性の認識	事前アンケート 事後アンケート	「体育の授業において『座学で学ぶ知識(体育理論)』は必要だと思いますか」(4件法) 「それはなぜですか。理由を書いてください」(自由記述から抜粋)	
ウ 「教えて考えさせる授業」による学習をどのようにとらえたか	事後アンケート	教師の説明	(ア)「先生からの説明はわかりやすかったですか」(4件法) (イ)「授業でのICT(画像、動画、プレゼンテーションソフト)の活用により授業がわかりやすかったと思いますか」(4件法)
		理解深化	(ウ)「ペア活動によって理解を深めることができましたか」(4件法)
		自己評価	(エ)「学習ノートにより、毎授業の最後に振り返りをすることは、学習に役立ちましたか」(4件法)
エ 授業における取組姿勢等	学習ノート(毎時)	(ア) 意欲	「自ら意欲的に楽しく授業にのぞきましたか」(4件法)
		(イ) 興味関心	「『もっと知りたい』など、興味関心が湧きましたか」(4件法)
		(ウ) ペア活動の積極性	「ペア活動を積極的に行おうとしましたか」(4件法)
		(エ) ねらいへの達成感	「本時のねらいが達成できましたか」(4件法)
オ 教材をどのようにとらえたか	事後アンケート	(ア)「授業で使用した教材プリント(個人用)はわかりやすかったですか」(4件法) (イ)「授業で使用した教材プリント(ペアワーク用)はわかりやすかったですか」(4件法)	
	教材プリント(6時間目)	(ウ)「これまで5時間の体育理論の学びの中で、最も印象的だった内容を選ぶ」(多肢選択法で1つ選択)	
	学習ノート(毎時)	(エ)「本時の授業は具体的に次のどの視点について学びましたか」(「する」「みる」「支える」「知る」「どれもない」の多肢選択法で、複数選択可)	

(2) 生徒の「スポーツの価値意識」が高まったか

具体的な視点	手がかり	質問内容等
生徒の「スポーツの価値意識」が高まったか	事前アンケート 事後アンケート	「スポーツ価値意識評価尺度（簡易版） <sup>51)</sup> 」（7件法） p. 8 参照 「あなたの考える『スポーツの意義や価値』とは何ですか」（自由記述からカテゴライズ、p. 57 参照）

(3) 生徒の「スポーツとの多様な関わり方」に係る思考が広がったか

具体的な視点	手がかり	質問内容等
生徒の「スポーツとの多様な関わり方」の思考が広がったか	事前アンケート 事後アンケート	「現在、あなたは将来どのようにスポーツと関わっていきたいと考えていますか」 （自由記述からカテゴライズ、p. 60 参照）

### 3 学習指導計画

#### (1) 単元の目標

- ア スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴についての学習に自主的に取り組もうとすることができるようにする。
- イ スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができるようにする。
- ウ スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について理解することができるようにする。

#### (2) 評価規準

##### ア 単元の評価規準<sup>57)</sup>

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
①スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について、(意見を交換したり、自分の考えを発表したりするなどの)活動を通して、学習に自主的に取り組もうとしている。	①スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について、必要な情報を比較したり、分析したりしてまとめた考えを説明している。		①スポーツの歴史的発展と変容について、言ったり書き出したりしている。 ②スポーツの技術、戦術、ルールの変化について、言ったり書き出したりしている。 ③オリンピックムーブメントとドーピングについて、言ったり書き出したりしている。 ④スポーツの経済的効果とスポーツ産業について、言ったり書き出したりしている。

##### イ 学習活動に即した評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
①スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について、(意見を交換したり、自分の考えを発表したりするなどの)活動を通して、学習に自主的に取り組もうとしている。	①オリンピックとドーピングについて、必要な情報を比較したり、分析したりしてまとめた考えを説明している。 ②スポーツの経済的効果とスポーツ産業について、必要な情報を比較したり、分析したりしてまとめた考えを説明している。		①スポーツの歴史的発展と変容について、言ったり書き出したりしている。 ②スポーツの技術、戦術、ルールの変化について、言ったり書き出したりしている。 ③オリンピックムーブメントとドーピングについて、言ったり書き出したりしている。 ④スポーツの経済的効果とスポーツ産業について、言ったり書き出したりしている。



(3) ア 学習内容と評価の計画

時間	学習内容	学習活動	関心 意欲 態度	思考 判断	知識 理解								
1	オリエンテーション スポーツの歴史的発展と変容 <table border="1"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る	○			◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる ディベート風ブレインストーミング（p.30 参照） 学習ノート（p.25 参照）	①		① ●
する	みる	支える	知る										
○			◎										
2	スポーツの技術、戦術、ルール の変化 <table border="1"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る		○		◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる ディベート風ブレインストーミング（p.30 参照） 学習ノート（p.25 参照）			② ●
する	みる	支える	知る										
	○		◎										
3	オリンピックムーブメント <table border="1"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td></td> <td>◎</td> <td>○</td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る		◎	○	◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる フォトランゲージ（p.31 参照） 分類フレーム付きブレインストーミング（p.31 参照） 学習ノート（p.25 参照）			③ ●
する	みる	支える	知る										
	◎	○	◎										
4	オリンピックとドーピング <table border="1"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td>○</td> <td></td> <td>◎</td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る	○		◎	◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる 分類フレーム付きブレインストーミング（p.31 参照） 学習ノート（p.25 参照）		① ●	③ ●
する	みる	支える	知る										
○		◎	◎										
5	スポーツの経済的効果とスポーツ産業 <table border="1"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○</td> <td>◎</td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る		○	◎	◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる 分類フレーム付きブレインストーミング（p.31 参照） 学習ノート（p.25 参照）		② ●	④ ●
する	みる	支える	知る										
	○	◎	◎										
6	自分とスポーツとの関わり方 <table border="1"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td colspan="4">生徒が今までの学びを活かし思考し、判断、表現する</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る	生徒が今までの学びを活かし思考し、判断、表現する				振り返り 講義（ICTの活用） 考えさせる お見合いルーレット（p.33 参照） 簡易マンドラート（p.34 参照） 学習ノート（p.25 参照）	① ●		
する	みる	支える	知る										
生徒が今までの学びを活かし思考し、判断、表現する													

【学習内容に関する補足】◎特に重点を置き学びを促す視点 ○重点を置き学びを促す視点

【観点に関する補足】○指導の中心となる時間 ●評価の中心となる時間

(3) イ 単元の概要 (学習過程)

時間	1	2	3
内容	オリエンテーション スポーツの歴史的発展と変容	スポーツの技術、戦術、 ルールの変化	オリンピックムーブメント
解説の記載内容等	スポーツは、人類の歴史とともに始まり、その理念が時代に応じて変容してきていること。また、我が国から世界に普及し、発展しているスポーツがあること。	スポーツの技術や戦術、ルールは、用具の改良やメディアの発達に伴い変わり続けていること。	現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものにオリンピックムーブメントがあること。
0	○出席確認	○出席確認	○出席確認
5	○オリエンテーション	○本時の内容確認	○本時の内容確認
10	○本時の内容確認	<b>教える場面</b> 講義【教師の説明】 ○スポーツと用具の関係	<b>教える場面</b> 講義【教師の説明】 ○オリンピズム、オリンピックムーブメント
15	<b>教える場面</b> 講義【教師の説明】 ○民族スポーツのはじまり		
20	○近代スポーツへの変遷	○スポーツとメディアの関係	○東京オリンピック、パラリンピック
25	○国際スポーツへの変遷		
30	○日本発祥の国際スポーツ		<b>考えさせる場面</b>
35	<b>考えさせる場面</b>	<b>考えさせる場面</b>	フォトランゲージ 分類フレーム付きブレインストーミング 【理解深化】 ○次の写真から考えられる「スポーツに関わる人（こと、もの）」を挙げてみましょう。
40	ディベート風ブレインストーミング【理解深化】 ○「eスポーツ」は、スポーツか。	ディベート風ブレインストーミング【理解深化】 ○「用具を進化させて、いい記録を生み出せば良い」のか、「それは違う」のか。	
45	まとめ、振り返り【自己評価】 ○学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。	まとめ、振り返り【自己評価】 ○学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる	まとめ、振り返り【自己評価】 ○学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる
50			
生予 徒想 のさ 様れ 子	・スポーツの歴史的変容を学ぶことで多様な価値観を容認できる多様性が育まれる。	・スポーツと用具やメディアとのつながりから、スポーツの価値意識や倫理観が高まる。	・オリンピズムを学ぶことでスポーツの価値意識や倫理観がさらに高まる。 ・2020東京大会への興味関心が高まる。
関	①		
思			
知	①①	②②	③③

時間	4	5	6
内容	オリンピックとドーピング	スポーツの経済的効果と スポーツ産業	自分とスポーツとの関わり方
解説の記載内容等	ドーピングは、フェアプレイの精神に反するなど、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせること。	現代のスポーツは、経済的な波及効果があり、スポーツ産業が経済の中で大きな影響を及ぼしていること。	「する、みる、支える、知る」といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを卒業後にも主体的に実践できるようにすること。
0	○出席確認 ○本時の内容確認	○出席確認 ○本時の内容確認	○出席確認 ○本時の内容確認
5	<b>教える場面</b> 講義【教師の説明】 ○フェアプレイ、スポーツの価値とは何か	<b>教える場面</b> 講義【教師の説明】 ○スポーツと経済の関係	<b>教える場面</b> 講義【教師の説明】 ○4つの小単元（5時間）の授業で学んできたことを講義形式で復習
10			
15	○ドーピングが禁止されている理由		
20		○スポーツと産業の関係	<b>考えさせる場面</b> <b>お見合いルーレット【理解深化】</b> ○「これまで5時間の体育理論の学びの中で、最も印象的だった内容を選ぶとともに、その理由を書いてください」、 「また、そこから感じたこと、考えたこと」をまとめ、お見合いルーレット形式で発表、シェアする。
25			
30			
35	<b>考えさせる場面</b>		
40	<b>分類フレーム付きブレインストーミング【理解深化】</b> ○なぜドーピングが起こるのか。	<b>考えさせる場面</b> <b>分類フレーム付きブレインストーミング【理解深化】</b> ○スポーツ産業には、どのようなものがあるでしょうか。	<b>簡易マンドラート【理解深化】</b> ○「これからの自分とスポーツとの関わり方」を思考する。
45	まとめ、振り返り【自己評価】 ○学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。	まとめ、振り返り【自己評価】 ○学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。	まとめ、振り返り【自己評価】 ○学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。
50			
生予想の様子	・ドーピングが蔓延する理由と併せて、国民の倫理観がアスリートを支えているという視点が身に付く。	・スポーツと経済や産業など金銭的なつながりを学び、スポーツとの関わり方の思考が広がる。	・単元を通して学んだことを活かして、自分のスポーツとの多様な関わり方を思考するようになる。
関			①①
思	①①	②②	
知	③③	④④	

○指導の中心となる時間 ●評価の中心となる時間

## 4 学習指導の工夫

### (1) 「教えて考えさせる授業」を活用する上での工夫

#### ア 理解深化を合理的に行うためのペア活動

市川の「教えて考えさせる授業」では、理解深化の場面でグループ活動を行うが、今回、体育理論の4つの小単元を5時間で確実に「教える」と、「考えさせる」ことの両立を図るためには、1時間を通してペア活動を中心として行うことが合理的であると判断した。ペアで行うことで発言の回数が増え、より活動的になるのではないかと考えた。また、ペア活動で出した意見や答えを他のペアとシェアする活動を行うことで、4人グループに近い学習効果をねらった。

#### イ 理解確認について

本研究では、便宜上、ペア・ミーティングを理解確認に代わる活動として行った。(p. 29 参照)

#### ウ 単元を通じた「教えて考えさせる授業」

毎授業の中で「教えて考えさせる授業」を行うだけでなく、「単元を通じた『教えて考えさせる授業』」を計画した。

1～5時間目を現行指導要領(一部、新指導要領)に記載してある学習内容を確実に「教える」時間、6時間目にはその学んできた知識を活かして「自分はスポーツとどのように関わっていくか」というスポーツとの多様な関わり方の思考を広げるために「考えさせる」ことに重点を置いた授業を設定した。そうすることで、生徒が単元で身に付けた知識を活かしながら思考することでねらいを達成させることにつながるのではないかと考えた。

(※その際の6時間目の学習のねらいに係る教材については pp. 33-34 参照)

### (2) 「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材について

現行解説に記載されている指導内容に応じて、「する、みる、支える、知る」のうち、生徒の学習にとってより適した視点を明確にして教材を作成することで、生徒の学習効果が高まると考えられる。また、教員側も漫然と指導内容を進めていくのではなく、常に「する、みる、支える、知る」のうち、どの視点の学びを促したいのかを明確にすることで生徒が理解しやすくなると考えられる。

以上のことから、具体としては、次のような区分けで教材を作成した。

表 1 教材作成時の重点項目の早見表

時間	指導内容	「する」	「みる」	「支える」	「知る」
1	スポーツの歴史的発展と変容	○			◎
2	スポーツの技術、戦術、ルールの変化		○		◎
3	オリンピックムーブメント		◎	○	◎
4	オリンピックとドーピング	○		◎	◎
5	スポーツの経済的効果とスポーツ産業		○	◎	◎
6	自分とスポーツとの関わり方	生徒が今までの学びを活かし思考し、判断、表現する			

◎特に重点を置き学びを促す視点 ○重点を置き学びを促す視点

3、4時間目の内容は現行解説において、「オリンピックムーブメントとドーピング」という小単元として設定されているものを、効果的な学習をねらい、「オリンピックムーブメント」と「ドーピング」にそれぞれ独立させて計画した。

教材作成は、次のような手順で行った。

ア. 解説に記載されている指導内容を把握する

佐藤が述べている次の現行解説における文末表現の解釈の仕方<sup>58)</sup>により、現行解説が示す内容を理解することとした。

- 「～を理解できるようにする」＝確実に扱う内容
- △「～についても触れるようにする」＝上記に関連させて話題にする
- \*「～については、取り上げる程度とする」＝あまり深入りしないように留意する
- ×「～で扱うこととする」＝他の領域で取り上げている



イ. 素材を収集する

本研究では、素材収集のポイントとして次の3つを意識した。

- (ア) 学習内容に沿い、生徒の興味の湧く素材（エピソードやニュース）
- (イ) 可能な限り映像・画像を伴う素材
- (ウ) 対立構造（スポーツの良い部分と懸念される部分）を持つ素材



ウ. 教材を作成する

本研究では**表1**に応じて「する」、「みる」、「支える」の視点を学べる素材を選別し、教材を作成した。

なお、「知る」視点はすべての教材に係るものであり、どの教材からも学べる視点である。

今回は、特に対立構造（上記イの（ウ））を意識して素材収集、教材作成を行った。

佐藤は、高等学校の体育理論の学習内容については、批判的思考を踏まえつつ、スポーツの価値を学習するようスパイラルな内容で構成されていると述べている<sup>59)</sup>。友添は、「多くの単元がスポーツの良さと課題などの両面からの内容構成」<sup>60)</sup>と述べており、スポーツの意義と危険性など対比する内容を受け止めてスポーツの価値観を形成していくことが大切とも述べている<sup>60)</sup>。新解説にも、「高等学校では、スポーツから得られる恩恵とスポーツについての課題の双方から、多角的に思考し判断し表現する学習を通して、個人がスポーツ文化を創造する主体となっていることに気付くことを目指している」<sup>29)</sup>と示されている。

なお、素材を収集するときに参考にした書籍、ウェブサイトの一例は次のとおりである。

オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料 <sup>61)</sup> （スポーツ庁、2017年）
かながわオリンピック・パラリンピック教育学習教材 <sup>62)</sup> （神奈川県教育委員会、2017年）
オリンピック・パラリンピック学習読本高等学校編 <sup>63)</sup> （東京都教育委員会、2016年）
体育・スポーツ史概論 <sup>64)</sup> （木村吉次編著、2001年）
スポーツの歴史と文化 スポーツ史を学ぶ <sup>65)</sup> （新井博・榊原浩晃編著、2012年）
よくわかるスポーツ文化論 <sup>66)</sup> （井上俊・菊幸一編著、2012年）
笹川スポーツ財団 <sup>67)</sup> ( <a href="https://www.ssf.or.jp/history/tabid/811/Default.aspx">https://www.ssf.or.jp/history/tabid/811/Default.aspx</a> )
公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構 <sup>68)</sup> ( <a href="https://www.playtruejapan.org/">https://www.playtruejapan.org/</a> )

以上のことを踏まえ、教材化する際のポイントを**表2**に示した。

表2 体育理論について現行解説に記載されている学習内容の教材化のポイント

1 時間目「スポーツの歴史的発展と変容」

現行解説に記載されている指導内容等	教材作成による具体的なねらい	筆者が作成した教材例	学べる視点	参照
○スポーツは、世界各地で日常の遊びや労働などの生活から生まれ、次第に発展し今日に至っていること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の民族スポーツを紹介し、具体的にイメージさせる</li> <li>・その際、その発祥に係る各地の文化も取り上げ、生活や文化とスポーツのつながりを理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フィーエルヤッペン（川の多いオランダの地形から生まれたスポーツ）</li> <li>・龍船競漕（大きな河川のある中国で生まれたスポーツ）</li> </ul> ※画像で効果的に例示	◎知る	p. 28(5) イ
○歴史的な変遷を経て、現代では、競技だけでなく、体操、武道、野外運動、ダンスなど広く身体表現や身体活動を含む概念として、スポーツが用いられるようになってきていること *現代のオリンピック競技種目の多くは、19世紀にイギリスで発祥し発展してきたこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・民族スポーツから近代スポーツへの変遷の具体例を挙げ、歴史的な変遷について理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中世のフットボールからサッカーとラグビーが生まれた成り立ち</li> </ul> ※画像で効果的に例示	◎知る	p. 28(5) イ
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近代スポーツから国際スポーツへの変遷の具体例を挙げ、歴史的な変遷について理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリンピックの始まりについて（クーベルタンの功績のエピソード）</li> </ul> ※画像で効果的に例示	◎知る	p. 28(5) イ
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体例（ニュースポーツや野外活動など）を挙げ、歴史的な変遷の中でスポーツは多様な価値観でとらえられていることを理解させ、今のスポーツの定義を思考させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「e スポーツはスポーツか」というテーマでのディベート風ブレインストーミング</li> </ul>	◎知る ○する	p. 27(4) イ p. 30(6) イ
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツの定義は歴史的な変遷の中で変わってきており、今はどのようにとらえられているかを思考させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「これはスポーツか？」様々な例を示したペア・ミーティング</li> </ul>	◎知る ○する	p. 29(6) ア
○近年では、諸外国に普及、発展している日本発祥のスポーツがあること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本発祥のスポーツで国際スポーツとなっているものを挙げ、その歴史について理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本発祥のスポーツは？」という発問でのペア・ミーティング</li> <li>・嘉納治五郎の功績（柔道の創始者、オリンピック誘致）</li> </ul>	◎知る	p. 29(6) ア

## 2時間目「スポーツの技術、戦術、ルールの変化」

現行解説に記載されている 指導内容等	教材作成による 具体的なねらい	筆者が作成した 教材例	学べる 視点	参照
○スポーツの技術や戦術、ルールは、用具や用品、施設などの改良によって変わり続けていること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツの「技術」「戦術」「ルール」と用具や施設との関連について具体例を挙げ、理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・陸上競技の棒高跳びのポールの進化と技術の進化</li> <li>・バレーボールのデータ活用と戦術の関係性</li> <li>・高校野球の打球スピード向上によるルール改訂</li> </ul> ※画像で効果的に例示	◎知る ○みる	p. 28(5) イ
○現代では、テレビやインターネットなどのメディアの発達などによっても影響を受けていること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メディアがスポーツのルールに影響を及ぼした具体例を挙げ、理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バレーボールのラリーポイント制へのルール変更</li> <li>・バスケットボールのクォーター制へのルール変更</li> </ul> ※画像で効果的に例示	◎知る ○みる	p. 28(5) イ
△用具等の改良やメディアの発達は、記録の向上を促したり、人々にとってスポーツをより身近なものにしたりする反面、ルールを変えたりスポーツの商品化を促したりするとともに、時には、スポーツそのものを歪める可能性があること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツの本質に影響を及ぼす用具の進化について具体例を挙げ、そのメリットとデメリットを思考させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「オリンピック北京大会時に競泳で世界記録が続出、なぜか」</li> <li>・「用具の進化で記録を出せばよい」のか、「それはなぜか」というテーマでのディベート風ブレインストーミング</li> <li>・バレーボール、バスケットボールのルール変更による恩恵と懸念</li> </ul>	◎知る ○みる	p. 27(4) イ p. 30(6) イ

### 3時間目「オリンピックムーブメント」

現行解説に記載されている 指導内容等	教材作成による 具体的なねらい	筆者が作成した 教材例	学べる 視点	参照
○現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものにオリンピックムーブメントがあること	・オリンピック創設の歴史を理解させる	・クーベルタンの理念（オリンピズム） ※画像で効果的に例示	◎知る ◎みる	p. 28 (5) イ
	・オリンピック休戦について、具体的なエピソードを紹介し、理解させる	・朝鮮半島南北合同の入場行進 ※画像で効果的に例示		
○オリンピックムーブメントは、オリンピック競技大会を通じて、人々の友好を深め世界の平和に貢献しようとするものであること	・オリンピズム、オリンピックムーブメントについて具体例を挙げ、理解させる	・オリンピック平昌大会の小平選手と李選手の友情やフェアプレイ精神 ・東京大会の柔道・ヘーシンク選手の「待て」にまつわるエピソード ※画像で効果的に例示	◎知る ◎みる ○支える	p. 28 (5) イ
※○パラリンピック等の国際大会が、障害の有無を超えてスポーツを楽しむことができる共生社会の実現に寄与していること	・パラリンピックの歴史、意義、種目特性について理解させる	・パラリンピックの歴史や意義、競技種目の紹介 ※画像で効果的に例示	◎知る ◎みる ○支える	p. 28 (5) イ
東京オリンピック・パラリンピック競技大会がもたらす成果を次世代に引き継いでいく観点 (新解説の改善の具体的事項に記載)	・2020東京大会について理解させる ・“スポーツに関わる人、もの”を考えてみよう」から「する」以外に多くの人に支えられていることを理解させる	・「写真から考える“スポーツに関わる人、もの”を考えてみよう」というテーマでのフォトランゲージ ・具体的な開催種目(初の種目や復活種目の理由)、開催場所(神奈川県でも行われる競技種目)などのクイズ形式による発問 ・様々な形で選手や東京大会を支えている人の紹介(テレビの五輪応援番組などから引用) ・招致にまつわるエピソード(太田雄貴選手の涙の理由、佐藤真海選手の伝説のプレゼンスピーチ)	◎知る ◎みる ○支える	p. 28 (4) ウ p. 31 (6) エ



#### 4時間目「オリンピックとドーピング」

現行解説に記載されている指導内容等	教材作成による具体的なねらい	筆者が作成した教材例	学べる視点	参照
○競技会での勝利によって賞金などの報酬が得られるようになるとドーピング（禁止薬物使用等）が起こるようになったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツがビッグビジネスや国力の象徴になってしまったことからオリンピズムが失われかけていることを理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「なぜドーピングが起こるのか」というテーマでのフレーム付きブレインストーミング</li> <li>・旧東ドイツ、ロシアの国ぐるみのドーピングについて</li> <li>・タイラー・ハミルトン選手の告白</li> </ul>	◎知る ○する	p. 28(4)ウ p. 31(6)ウ
○ドーピングは不当に勝利を得ようとするフェアプレイの精神に反する不正な行為であり、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせる行為であること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドーピングはスポーツの価値を失わせるものであると理解させる</li> <li>・スポーツの素晴らしさを再認識させる</li> <li>・そこから「もし、その選手がドーピングをしていたら？」と思考させることでスポーツの価値そのものを冒涇する行為であることを実感させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「浅田真央選手の諦めない演技、リオ大会のフェアプレー賞から“スポーツの価値”を考えよう」という発問</li> <li>・「もし、その選手がドーピングをしていたら？」という発問</li> <li>※画像で効果的に例示</li> </ul>	◎知る ◎支える	P28(5)イ
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どうしたらドーピングは抑止できるのかを理解させる</li> <li>・日本人の倫理観がアスリートを支えていることを理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「なぜ日本は世界で最もドーピングの少ない国なのか」という発問</li> <li>※画像で効果的に例示</li> </ul>		
△ドーピングが重大な健康被害を及ぼすこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドーピングの健康被害の怖さを理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイディ・クリーガー選手の男性ホルモン投与による心身の崩壊、性転換手術のエピソードの紹介</li> <li>※画像で効果的に例示</li> </ul>	◎知る ○する	p. 28(5)イ

### 5 時間目 「スポーツの経済的効果とスポーツ産業」

現行解説に記載されている 指導内容等	教材作成による 具体的なねらい	筆者が作成した 教材例	学べる 視点	参照
<p>○現代におけるスポーツの発展は、例えば、スポーツ用品、スポーツに関する情報やサービス、スポーツ施設などの広範な業種から構成されるスポーツ産業を発達させたこと</p> <p>※スポーツを「する、みる、支える、知る」視点から取り上げ、スポーツと関わる経済活動に求められるスポーツの価値の遵守について自己の考えを深めること</p>	<p>・オリンピックの経済的な影響について具体例を挙げ、理解させる</p>	<p>・モントリオール大会とロサンゼルス大会の運営方法の違い（運営を公的なものから民営化に移行させ、商業化したこと） ※画像で効果的に例示</p>	<p>◎知る ◎支える ○みる</p>	p. 28 (5) イ
	<p>・スポーツと産業のつながりについて具体例を挙げ、理解させる</p>	<p>・高校野球の甲子園大会が新聞社主催の理由 ・「スポーツ産業にはどのようなものがあるか」スポーツ産業3分類から思考させるフレーム付きブレインストーミング ・「なぜこの外国の選手と契約するのか」という発問（スポーツツーリズムのビジネス面からのメリット）</p>		p. 28 (4) ウ p. 31 (6) ウ
<p>○現代のスポーツ産業は経済活動に大きな影響を及ぼしていること</p> <p>△スポーツに関連した様々な職業があること</p>	<p>・スポーツの経済効果について具体例を挙げ、理解させる ・選手やコーチ、トレーナー以外にも企業、ビジネス的な側面からのスポーツとの関わりがあることを理解させる</p>	<p>・東京大会やプロチームが及ぼす直接効果、波及効果について ・企業とアスリートの相互関係（スポンサー契約） ※画像で効果的に例示</p>	<p>◎知る ◎支える ○みる</p>	p. 28 (5) イ

### 6 時間目 「自分とスポーツとの関わり方」

現行解説に記載されている 指導内容等	教材作成による 具体的なねらい	筆者が作成した 教材例	学べる 視点	参照
<p>単に運動やスポーツを受動的に楽しむだけでなく、スポーツはどのような発展や変化をしてきたのか、どのような役割を果たしているのかといったスポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツ</p>	<p>・1～5時間目までの学習内容の総復習し、思考の整理をさせる</p>	<p>・1～5時間目のスライドにBGMを付けて回想ムービー（約10分） ・「最も印象に残った内容」について理由も付けてのスピー</p>	<p>※生徒が今までの学びを活かし思考し判断、表現する</p>	p. 33 (6) オ p. 33 (6) カ

の特徴などについて理解できるようにする。 (現行解説のH体育理論に記載)	・単元を通して学んできたことを活かして「考える」	チ (お見合いルールット) ・「自分がこれからどのようにスポーツと関わっていくか(「する、みる、支える、知る」視点)」というテーマでの簡易マンダラート	p. 34(6)キ
---	--------------------------	--	-----------

注：「現行解説に記載されている指導内容等」の○△\*は p. 19 のとおり

注：「現行解説に記載されている指導内容等」の※印の部分は新解説の内容

注：「学べる視点」○は表 1 (p. 18) のとおり

### (3) 学習ノートの活用と工夫

新指導要領には、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善にあたり、配慮する事項が示されており、その4番目に、「生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫すること」<sup>69)</sup>と記載されている。そこで、本研究では、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、学習ノートを作成し、生徒が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動に活用することにした。(図 2 参照)



図 2-1 学習ノート



図 2-2 学習ノートの記載例

授業ノートは、毎時の授業の始めと終わりに活用する。授業の始めでは、「本時のねらい」の確認と「授業の見通し」をもたせること、授業の終わりでは、「ねらいに対する学習の振り返り」を目的とし、学習効果を高めるものとして活用する。また、この学習ノートを活用した振り返りは、「教えて考えさせる授業」の「自己評価」にあたる学習活動でもある。

「具体的にどの視点について学びましたか」という問いは、「する、みる、支える、知る」の視点を常に意識させるためであり、また授業者が教えた視点や伝わっているかどうかの確認にもなる。「本時の授業を通して、どのようなことを学び、考えましたか」という問いは「学んだこと(本時のねらい1)」と「そこから考えたこと、感じたこと(本時のねらい2)」の2つの項目に分かれている。(各時間のねらいについては表 3 参照)

この2つの項目のそれぞれの役割は次に示す。

	「学んだこと(本時のねらい1)」	「そこから考えたこと、感じたこと(本時のねらい2)」
生徒	当該授業の学習内容を振り返ることができる	学んだことを活かし改めて考え、思考を整理することができる
教員	生徒の理解度を把握できる	生徒の思考を把握できる

この項目では、ねらい1には答えが限られるもの(クローズドアンサー)、ねらい2には答えが複数考えられるもの(オープンアンサー)を記入することで、「基礎基本的な知識の習得」と「自ら考える力」の二項の力の向上を目指した学習活動である。

また、この学習ノートは、毎時間提出させ、生徒の記述内容を確認し、コメントを付けて返却した。そうすることでねらいに対する生徒の理解度や思考の深まりを確認することができ、学習内容に応じて教員がその都度、授業改善を行うことができる。さらに、毎回教員のコメントが付いて返却されるので、生徒の授業へのモチベーションが上がると考えられる。なお、教員から生徒へコメントを書く際、次の3点を意識して行った。

ア	生徒の考え方や気付き、前時からの進歩や変化に対して肯定的なコメントを書くこと ➡モチベーションの向上、主体的な姿勢の涵養につなげるため
イ	抽象的な内容に対しては論理的思考に導くような問いかけを書くこと ➡論理的思考力の向上につなげるため
ウ	教員(筆者)の考えも書くこと(オープンアンサーの部分) ➡新しい気付きへの導き、客観的思考力の涵養につなげるため

表3 各学習内容における学習のねらい

時間	学習内容	生徒に示した学習のねらい
1	スポーツの歴史的発展と変容	①スポーツの歴史的変遷と日本発祥のスポーツについて理解し、説明できるようにすること。 ②歴史的背景からスポーツの定義を思考し、自らの生活に適したスポーツのとらえ方ができるようにすること。
2	スポーツの技術、戦術、ルールの変化	①スポーツの技術や戦術、ルールは用具や施設などの改良、メディアの発達によって変わり続けていることを理解し、説明できるようにすること。 ②用具やメディアの発達のメリット、デメリットについて理解し、自分の考えを述べるようにすること。
3	オリンピックムーブメント	①オリンピック、オリンピックムーブメントとは何か説明できるようにすること。 ②東京オリンピック・パラリンピックの価値について、自分の考えを述べるようにすること。
4	オリンピックとドーピング	①ドーピング禁止の理由を説明できるようにすること。 ②スポーツ倫理を学び、スポーツの価値について自分の考えを述べるようにすること。
5	スポーツの経済効果とスポーツ産業	①スポーツと経済、産業のつながりを理解し、説明できるようにすること。 ②スポーツ経済・産業がスポーツそのものの価値をおとしめる可能性があることを理解し、自分の考えを述べるようにすること。
6	自分とスポーツとの関わり方	①単元を通して学んできたことを活かし、「スポーツの意義や価値」について自分の考えを述べるようにすること。 ②自己に応じた「スポーツとの多様な関わり方」について自分の考えを述べるようにすること。

※なお、6時間目は学習内容の性質上、学習のねらい①②ともに各自の思考によって答えが複数あるもの(オープンアンサー)にしている。

#### (4) 教材プリントの活用

本研究では、研究の目的、また学習のねらいを達成するために次のア～ウの3種類のプリントを作成し、活用した。(図3、図4、図5参照)

##### ア 個人用

「教える」場面の講義の内容をまとめたプリントである。

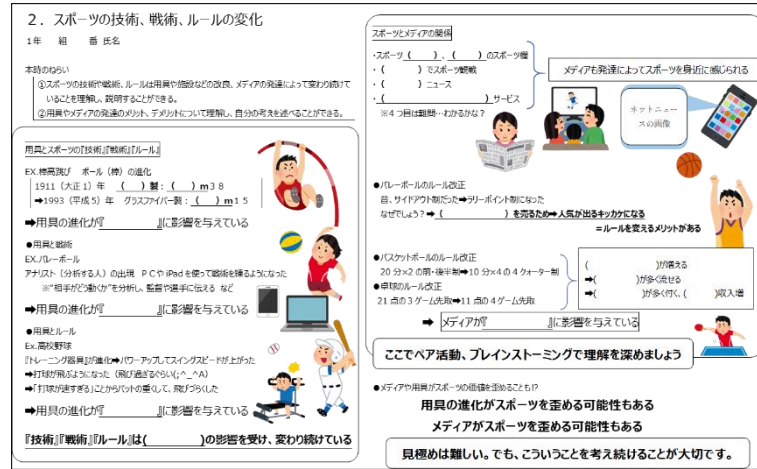


図3 教材プリント(個人用)

工夫1 できる限り書く作業を減らし、教員の説明やペアとの話し合いに集中しやすくした。

工夫2 重要な箇所に画像を入れ、イメージしやすく、印象に残るようにした。

##### イ ペアワーク用(ディベート風ブレインストーミング)

「理解深化」の場面で使用するペア活動用の教材プリントの1つである。(ディベート風ブレインストーミングについて詳細はp.30参照)

ブレインストーミングを行いやすいよう、ふせんを貼るスペースやまとめを記述するスペースを具体的に示し、活動しやすいように工夫した。

例:『「用具を進化させてどんどんいい記録を生み出せば良い」のか、「それは違う」のか?』という発問の際に使用する「ディベート風ブレインストーミング」の教材プリント(ペアワーク用)

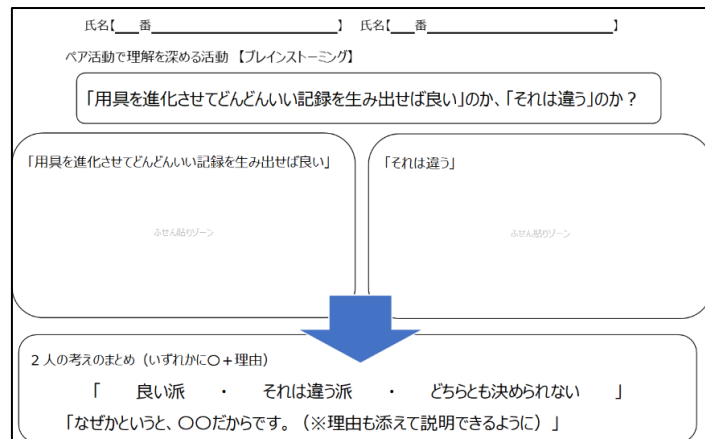


図4 教材プリント(ペアワーク用)

ウ ペアワーク用（分類フレーム付きブレインストーミング）

「理解深化」の場面で使用するペア活動用の教材プリントの1つである。（分類フレーム付きブレインストーミングの詳細は p. 31 参照）

「分類フレーム」をあらかじめ作っておくことで、次のようなメリットが考えられる。

（ア）ブレインストーミングをして出た意見を学習のねらいへ導きやすくなる。

（イ）生徒が思考しやすく、まとめやすいのでわかりやすい。

例：『スポーツ産業』とは、他にどのようなものがありますか？』という発問の際に使用する「分類フレーム付きブレインストーミング」の教材プリント（ペアワーク用）

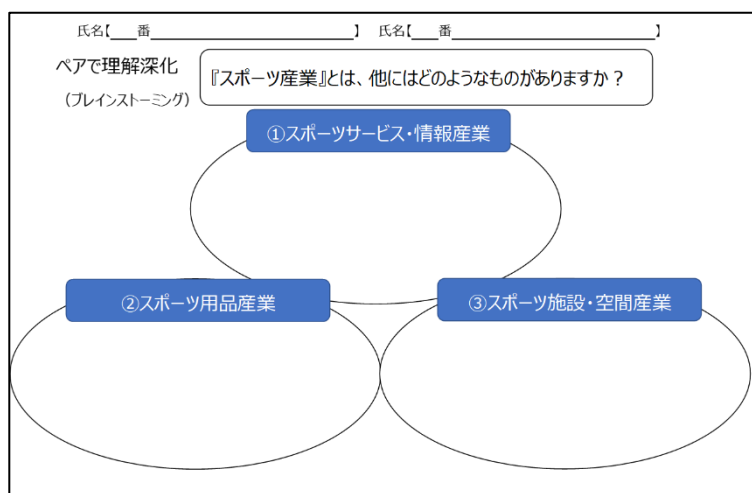


図5 教材プリント（ペアワーク用）

当該の授業の中で、自由な発想でブレインストーミングを行った後に、「分類フレーム」付きの教材プリントを使用するので、思考の偏りや自由度を狭めるものではない。

## （5）ICT及び画像、動画の活用

### ア プレゼンテーションソフトの利用

生徒に背を向けず、生徒の様子を確認しながら授業が行えるようプレゼンテーションソフトを活用することとした。板書する時間も省け、短時間で具体的に内容を説明することができ、テンポの良い授業展開が期待できる。（図6参照）

### イ 画像、動画の有効的な使用

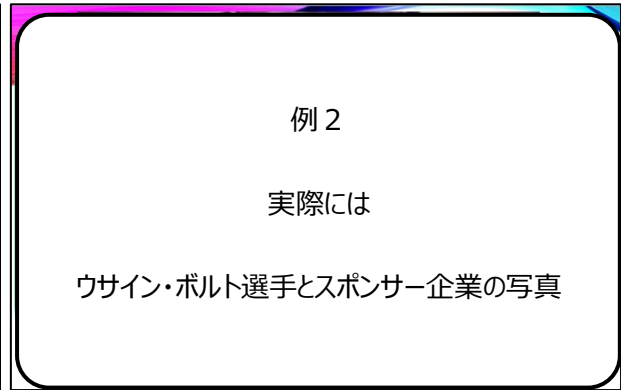
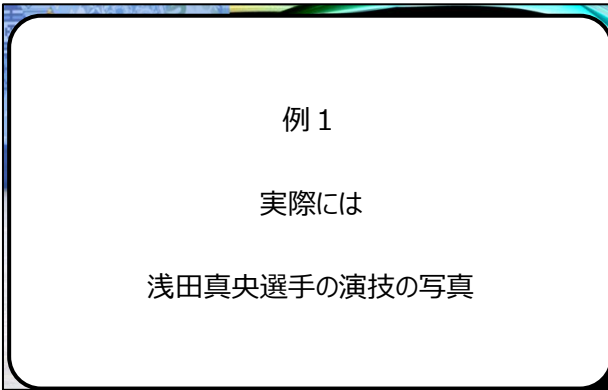
生徒が意欲的に取り組めるように、生徒の興味関心を引き付ける画像や動画を使用することとした。

プレゼンテーションソフトのスライドを作成する際、留意した点は次のとおりである。

（ア）文字数は少なくし、文字サイズを大きくする。（文字サイズは 48P 以上を心がける。）

（イ）画像を多く取り入れ、視覚的インパクトを与える。

（ウ）旬のニュースや人物を扱う。



例1：ソチ五輪での浅田真央選手の諦めない姿を示し、“スポーツの価値とは何か”を思考させる画像  
 ➡スポーツの倫理観につなげ、「支える」視点を教える教材として使用

例2：ウサイン・ボルト選手と使用している用具を示し、企業とのつながりを理解させる画像  
 ➡スポーツ産業の仕組みにつなげ、「知る」「支える」視点を教える教材として使用

図6 プレゼンテーションソフトによる画像例

**(6) 主体的・対話的で深い学びを促す学習活動（アクティブ・ラーニングの視点を含んだ学習活動）**

**ア ペア・ミーティング**

ペア・ミーティングとは、教員からの「○○について●秒でミーティングしてください」の指示でペアと話し合いを行う学習活動で、意識的に多く取り入れた。

目的は、次のとおりである。

- (ア) 短時間でテンポよく行い、対話しやすい雰囲気ペアやクラス間に生むこと
- (イ) 自分の意見を他者に伝えること
- (ウ) 他者の意見に触れること
- (エ) 他者と共に思考すること（協同学習）
- (オ) ペアで学びを確認し合ったり、教え合ったりすること

なお、この活動は、「教えて考えさせる授業」における「理解確認」の活動に代わるものとして行った。※上記（オ）に該当

時間は発問内容に応じて10～30秒程度設ける。

知識を習得させるための発問(答えが限られる発問、クローズドアンサー)	10秒程度
例:「2020年オリンピック招致レースを展開した3カ国はどこでしょう」	
思考させるための発問(答えが複数考えられる発問、オープンアンサー)	30秒程度
例:「なぜ周囲のスタッフまでもドーピングの手助けをするのでしょうか」	

## イ ディベート風ブレインストーミング

ディベートが有効と考えられる学習内容において、ディベートが不慣れなことや苦手な生徒が多いことが事前の調査で分かった。よって、口頭によるディベートをせず、ディベートに近い効果を狙ったブレインストーミングを試みることにした。

学習活動例は、次のとおりである。(図7参照)

氏名【\_\_番\_\_】 氏名【\_\_番\_\_】

ペア活動で理解を深める活動【ブレインストーミング】

「eスポーツは、スポーツか？」

「スポーツだ！」

「スポーツではない！」

↓

2人の考えのまとめ(いずれかに○+理由)

「eスポーツは(    スポーツだ    ・    スポーツではない    ・    決められない    )」

「なぜかという、○だからです。(※理由も添えて説明できるように)」

図7 ディベート風ブレインストーミング用の教材プリント

例:「eスポーツは、スポーツか？」

- (ア) 2人とも「肯定派」の立場で、「肯定の理由」をブレインストーミング(1分)する。
- (イ) 2人とも「否定派」の立場で、「否定の理由」をブレインストーミング(1分)する。
- (ウ) 両方の意見が出てきたところで、教材プリント(ペアワーク用)の「肯定派」「否定派」のフレームに、1つずつ意見を説明しながらふせんを貼っていく。(3分)
- (エ) 貼り終えたところで、「肯定の理由」「否定の理由」の全体を2人で俯瞰し、お互いの意見をまとめる。(3分)
- (オ) 近くのペアとプリントを交換し、シェアする。(1分)

➡現行解説「歴史的な変遷を経て、現代では、競技だけでなく、体操、武道、野外運動、ダンスなど広く身体表現や身体活動を含む概念として、スポーツが用いられるようになってきていること」を教えるために、生徒に馴染みのある話題を教材化した。スポーツの本質は「することが楽しいこと」を踏まえつつ、「では楽しければすべてスポーツなのか」とも思考させる。その際、スポーツ基本法などにおけるスポーツの定義なども提示するとより知識を得て、論理的に物事を思考することができるようになる。

※「する」「知る」視点の学習をねらった教材

こうすることで、口頭によるディベートをせずとも対立した2つの考え方から思考できる学習活動である。生徒の傾向として、相手とディベートすることが苦手な場合もあり、その際の代替手法として有効ではないかと考える。



### ウ 分類フレーム付きブレインストーミング

学習内容として、導きたい方向性を絞りたい場合のブレインストーミングの工夫として、「教材プリント（ペアワーク用）」にあらかじめ「分類フレーム」を加えた。そうすることで、生徒を学習のねらいの達成へ導きやすくなると考えた。

学習活動例は、次のとおりである。（**図8**参照）

氏名【 番 】 氏名【 番 】	
ペアで理解深化 【ブレインストーミング】	
<b>なぜドーピングが起きるんだろう？</b>	
個人	周囲（チームやスタッフなど）
国	その他

**図8 分類フレーム付きブレインストーミング用の教材プリント**

例：「なぜドーピングが起きるんだろう？」

- (ア) 「個人」「周囲」「国」というフレームを示し、いずれにもメリットがあるのでドーピングはなくなるということを教え、思考しやすくする。思考を狭めず、自由な発想ができるように「その他」というフレームも作っておく。
- (イ) ブレインストーミング（1分）でふせんを使い様々な意見を出す。（1分）
- (ウ) 「分類フレーム」付きの教材プリント（ペアワーク用）を使い、出てきた意見がどのフレームに該当するのかをペアで話し合いながらふせんを貼る。（3分）
- (エ) 貼り終えた教材プリントを2人で俯瞰し、お互いの意見をまとめる。（3分）
- (オ) 近くのペアとプリントを交換し、シェアする。（1分）

➡ 現行解説「競技会での勝利によって賞金などの報酬が得られるようになるとドーピング（禁止薬物使用等）が起きるようになったこと」を教えるための教材。この活動を行う前にドーピングのデメリットをしっかりと教えておくことで、より「なぜこんなにリスクのあることを行うのか」という考えを持って取り組める。そして原因がお金や権威、国威と知り、スポーツの価値とは何かを再考するキッカケになる。また、日本は世界で最もドーピングの少ない国であることを教え、その理由として国民の正しい倫理観がアスリートを支えているということにもつなげやすい教材である。

※ 「する」「知る」視点の学びをねらった教材

### エ フォトランゲージによるブレインストーミング

フォトランゲージとは、写真やイラストから、そこに込められた意味や思いなどについてさまざまな角度から推察する学習方法である。

実際に写真には写っていない人やものを想像することでスポーツを「支えてくれている人やもの」の存在の気づきを促しやすい教材である。（**図9**参照）

例：次の写真から考えられる「スポーツに関わる人（こと、もの）」を挙げてみましょう

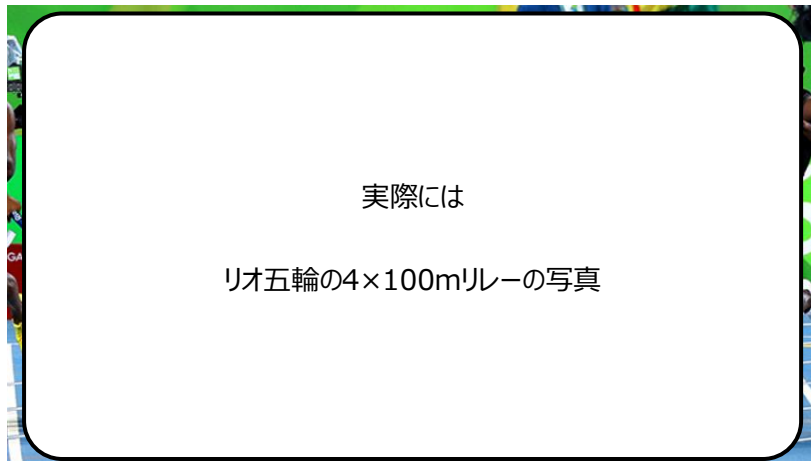


図9-1 フォトランゲージ

氏名[ 番 ] 氏名[ 番 ]	
ペアで理解深化 【ブレインストーミング】	
【フォトランゲージ】 写真から考えられる「スポーツに関わる人（こと、モノ）」を挙げてみましょう。	
する	みる
支える	知る

図9-2 フォトランゲージの教材プリント

例：リオ五輪の4×100mリレーの写真を用いたフォトランゲージによるフレーム付きブレインストーミング

「次の写真から考えられるスポーツに関わる人、モノを挙げてみましょう」

(ア) 「する」「みる」「支える」「知る」のフレームを示し、思考しやすくする。

(イ) 例を示し、フォトランゲージの説明をする。

説明例：「写っている“日本の選手”は『する』に分類されます。写っていないが関わっている人を想像してもよい。」等

(ウ) ブレインストーミングでふせんを使い様々な意見を出す。(1分)

(エ) 「分類フレーム」付きの教材プリント（ペアワーク用）を使い、出てきた意見がどのフレームに該当するのかをペアで話し合いながらふせんを貼る。(3分)

(オ) 貼り終えた教材プリントを2人で俯瞰し、お互いの意見をまとめる。(3分)

(カ) 近くのペアとプリントを交換し、シェアする。(1分)

➡スポーツは「する」「みる」「支える」「知る」といった多様な関わり方があることを学び、特に多くの「支え」によってスポーツによって成り立っていることを学ぶ。

※「みる」「支える」「知る」視点の学びをねらった教材

写真に写っている「選手」や「ユニフォーム」、「シューズ」等を答えるのが一般的である。しかし、その選手を支えている「コーチ」や「家族」、また用具を作っている「企業」、会場を作っている「工事関係者」など、写真には写っていないが、多くの人やものの「支え」があってスポーツは成り立っていることの気付きを期待する教材とした。

#### オ 回想ムービー

6時間目は、5時間目までに学んだことを活かすまとめの学習活動を行うこととした。その際、1～5時間目の学習内容を振り返る必要があり、単元をまとめた10分程度で学習内容を振り返ることのできる回想ムービーを作成し流すことで、生徒の興味を引き、集中力が高まり、かつ視聴覚的な振り返りで学習内容の整理がしやすいと考えた。

また、バックミュージックを挿入し、教員の口頭による説明を極力削り、生徒各自が、回想ムービーを観ながら自分で何を学んだか、感じたかを思い出させるような時間、空間にした。(図10参照)

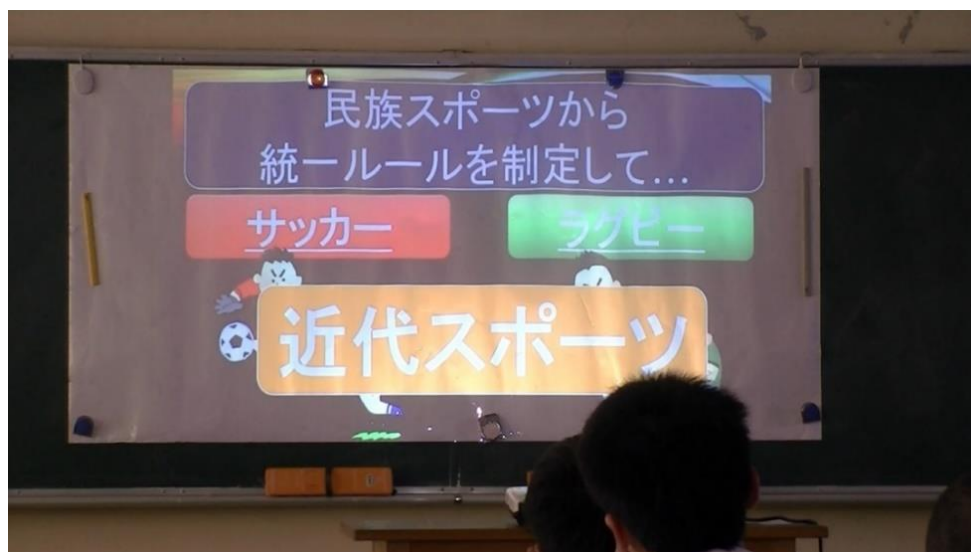


図10 回想ムービー

#### カ お見合いルーレット

お見合いルーレットとは、自分の考えをより多くの生徒に対して発表することで表現力や、自分の考えをまとめたり、より多くの生徒の発表を聞いたりすることで思考力を高め、広げることが期待できる学習方法である。

基本的には、対面して1対1で発表するので、例えば、40名クラスであれば、教室内で同時に20名が発表することになる。20名が同時に話し始めるのでクラス全体が発表しやすい環境づくりもねらいの1つである。

方法としては、たての1・3・5列目の生徒の座席は固定し、2・4・6列目の生徒は発表を終えたら、1席ずつずれてまた新たなペア同士で発表し合う、という流れである。

本研究では、「今回の体育理論の学びの中で最も印象的だったことから感じたこと、考えたこと」をテーマとして、6時間目における単元のまとめの際に活用することとした。

また、発表は1分で、10秒前に合図を出してタイムマネジメントを行った。(図11参照)



図 11-1 お見合いルーレットの様子

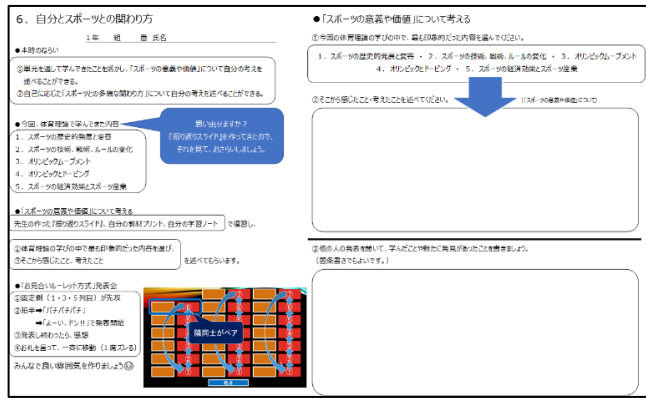


図 11-2 お見合いルーレットの教材

キ 簡易マンダラート

マンダラートとは、1つの目的を達成するための8つの具体的な行動を決め、自分の考えを具体的にアウトプットしながらまとめていく手法である。

本研究ではその手法を8つではなく、「する、みる、支える、知る」の4つの視点にアレンジしたものを簡易マンダラートと呼び、活用した。

プリントに4つの視点があらかじめ記載されており、生徒は「自分とスポーツとの関わり方」を思考する際に、具体的な行動を想起しやすいと考えた。

本研究では、単元のまとめとして、どのようにスポーツと関わっていくかを思考させ、科目体育の目標である「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる」ことにつながることを期待した。(図 12 参照)

例：「自分とスポーツとの関わり方」の簡易マンダラート

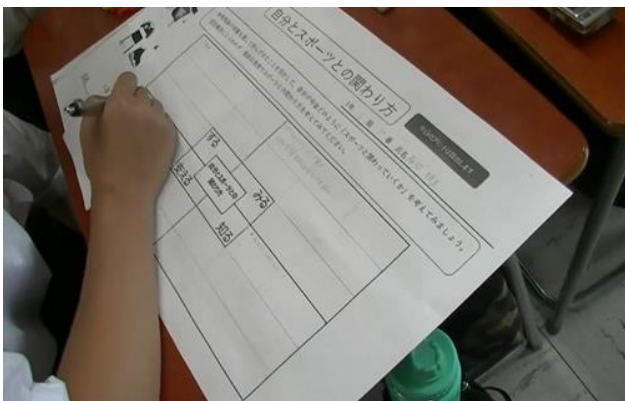


図 12-1 簡易マンダラートの様子

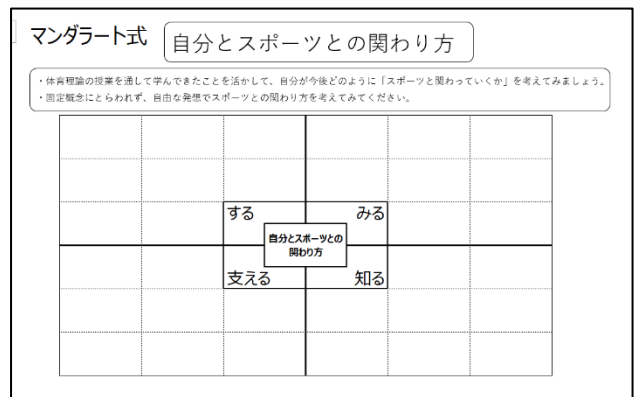


図 12-2 簡易マンダラートの教材

(7) 他の教員へのレクチャー

今回、他の4名の教員が筆者と同様の単元計画・教材を活用して授業実践を行った。そのため、単元計画・教材解釈のために筆者が他の4名に対して単元計画・教材の活用方法について直接レクチャーを行った。

レクチャーの方法については、授業の前日ないし当日の授業前の空き時間に20～30分程度で、授業の流れや時間配分、教材の解釈、指導上の留意点などを説明し、その後、質疑応答を経て、授業に臨むという流れで行った。レクチャー用プリントを準備し、授業中も時間配分などがわかりやすいように配慮した。

**(8) カリキュラム・マネジメント**

3学期制を採用している場合、2学期の始業が早まり、8月下旬という学校が増えてきている。気温は、年々上昇傾向にあり、まだ暑さの残る8月下旬から9月初めの体育の授業は、体調への配慮に大変苦慮する時期である。この時期に、エアコンの効いた教室で体育理論の授業を行うことは、カリキュラム・マネジメントの側面からも合理的であると考えられる。

(表4、表5参照)

**表4 本校の年間指導計画**

令和元年度 瀬谷高校 保健体育科 年間指導計画																																
1学期										2学期						3学期																
月	4			5				6			7		8	9				10		11		12		1			2			3		
週	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	1	2	3	1	2	3	1	2
1年 3単位	体づくり運動(12)			陸上競技1 器械運動1 水泳1 ダンス1 (21)				体育理論 (6)		ソフトボール1 バスケットボール1 バレーボール1 卓球1A (21)				サッカー1 バレーボール1 バスケットボール1 卓球1B (21)				ソフトボール1 サッカー1 バドミントン1 柔道1 (24)														

**表5 横浜市の平均気温や降水量など**

横浜 年平均気温：15.8℃ 年降水量：1688.6mm 統計期間：1981～2010

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最高気温(°C)	9.9	10.3	13.2	18.5	22.4	24.9	28.7	30.6	26.7	21.5	16.7	12.4
平均気温(°C)	5.9	6.2	9.1	14.2	18.3	21.3	25.0	26.7	23.3	18.0	13.0	8.5
最低気温(°C)	2.3	2.6	5.3	10.4	15.0	18.6	22.4	24.0	20.6	15.0	9.6	4.9
降水量(mm)	58.9	67.5	140.7	144.1	152.2	190.4	168.9	165.0	233.8	205.5	107.0	54.8

## 5 授業の実際

【本時の展開】(1/6時間目)

### (1) 本時の目標

<関心・意欲・態度①>スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について、意見を交換したり、自分の考えを発表したりするなどの活動を通して、学習に自主的に取り組もうとすることができるようにする。

<知識・理解①>スポーツの歴史的発展と変容について、言ったり書き出したりできるようにする。

### (2) 本時の評価

《知識・理解①》スポーツの歴史的発展と変容について、言ったり書き出したりしている。【観察】【学習ノート】

### (3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ 10分	1 オリエンテーション ・学習の進め方を理解し、学習の見通しを持つ 2 本時の学習内容を確認する。	・単元を通した目標、授業規律や授業の取り組み方、ペア学習についての説明をする。 ・学習ノートで体調の確認と本時のねらいを簡潔に確認させる。
	<b>【学習内容】</b> ①スポーツの歴史的変遷と日本発祥のスポーツについて理解し、説明できるようにすること。 ②歴史的背景からスポーツの定義を思考し、自らの生活に適したスポーツのとらえ方ができるようにすること。	
教える 25分	3 講義【教師の説明】  ○民族スポーツのはじまり ・世界の各文明で生まれた民族スポーツをその文明の文化から考える。  ○近代スポーツへの変遷 ・中世のフットボールからサッカーとラグビーが生まれる経緯を例に理解する。  ○国際スポーツへの変遷 ・オリンピックが国際スポーツのキッカケになったことを理解する。  ○日本発祥の国際スポーツ ・日本発祥の国際スポーツを考える。	・プレゼンテーションソフトで画像や動画を活用し、学習効果を高める。 ・スポーツは労働や遊びから生まれたということを理解させる。 ・世界各地でその土地の生活に深くかかわり発展したものが民族スポーツであることを理解させる。 ・ヨーロッパを中心に民族スポーツが秩序あるものとして整備させたものが近代スポーツであることを理解させる。また、「楽しさ」から「競技性」を重視し始めたことも理解させる。  ・ヨーロッパ中心だった近代スポーツがクーベルタンの実施したオリンピックをきっかけに世界的に広がっていったことを理解させる。 ・日本に海外からスポーツ文化が入ってきたのは明治時代ごろで、「教育」「鍛錬」という文化として入ってきている歴史的な背景を理解させる。 ・嘉納治五郎により日本発祥の柔道が国際スポーツに発展したこと、また、柔道以外の日本発祥のスポーツが国際スポーツへと発展し始めたことも理解させる。
考えさせる 15分	4 ディベート風ブレインストーミング【理解深化】 ・ブレインストーミングで、ペアとお互いの考えを共有し、思考を広げる。	・ブレインストーミングの説明をする。
	<b>【発問】『eスポーツ』は、スポーツか？</b>	
	5 まとめ、振り返り【自己評価】 ・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。	・肯定的な側面と否定的な側面と両面を考えさせ、思考させる。 ・スポーツの歴史的背景から、日本では「教育」「鍛錬」というイメージが根強いが、「楽しむ」ことがスポーツの本質であることを理解させる。また、今ではスポーツの多様な価値観が認められていることを理解させ、自己に応じたスポーツとの関わり方を考えるよう促す。 ・学習ノートの使い方を説明する。 《知識・理解①》 ・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめさせる。

【授業者としての振り返り】生徒は、体育理論とはどういう授業なのか、わからないところからのスタートであったが、楽しさを感じてくれ始めている様子が見て取れた。学習ノートに取り組む時間の確保が課題である。

【研究の視点からの振り返り】「教えて考えさせる授業」による学習過程は、生徒も授業を受けやすいように感じているようだった。「知る」視点を重視した教材もねらいどおりにとらえていた。理解深化のディベート風ブレインストーミングもペアで両面の考えから思考し、シェアすることで理解を深める学習活動として効果的であった。

【本時の展開】(2/6時間目)

(1) 本時の目標

<知識・理解②>スポーツの技術、戦術、ルールの変化について、言ったり書き出したりできるようにする。

(2) 本時の評価

《知識・理解②》スポーツの技術、戦術、ルールの変化について、言ったり書き出したりしている。【観察】【学習ノート】

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1 本時の学習内容を確認する。	・学習ノートで本時のねらいを簡潔に説明し、確認させる。
教える30分	<p>【学習内容】</p> <p>①スポーツの技術や戦術、ルールは用具や施設などの改良、メディアの発達によって変わり続けていることを理解し、説明できるようにすること。</p> <p>②用具やメディアの発達のメリット、デメリットについて理解し、自分の考えを述べるようにすること。</p>	<p>・プレゼンテーションソフトで画像や動画を活用し、学習効果を高める。</p> <p>・生徒にイメージしやすいよう、それぞれ具体例を示し、用具の進化が『記録や技術』『戦術』『ルール』に影響を及ぼしていることをリンクさせる。</p>
	<p>2 講義【教師の説明】</p> <p>○スポーツと用具の関係</p> <p>・用具の進化が『記録や技術』に影響を及ぼしていることを理解する。</p> <p>・用具の進化が『戦術』に影響を与えていることを理解する。</p> <p>・用具の進化が『ルール』に影響を与えていることを理解する。</p> <p>○スポーツとメディアの関係</p> <p>・メディアの発達によってスポーツを身近に感じられるようになったことを理解する。</p> <p>・メディアが『ルール』に影響を与えている。</p>	
考えさせる15分	<p>3 ディベート風ブレインストーミング【理解深化】</p> <p>・ブレインストーミングで、ペアとお互いの考えを共有し、思考を広げる。</p>	<p>・高速水着による世界記録続出のエピソードを説明し、用具の発達は記録の向上に繋がることをあらためて理解させつつ、用具の進化がすべて良いことなのかどうかを考えさせる。</p>
	<p>【発問】「用具を進化させて、良い記録を生み出せば良い」のか、「それは違う」のか</p> <p>・国際水泳連盟の判断から「スポーツの意義」について考える。</p> <p>・用具の進化はスポーツそのものを歪める可能性もあることを理解する。</p> <p>・メディアがスポーツを歪める可能性もあることを理解する。</p>	<p>・国際水泳連盟は、高速水着の使用を禁止したことから用具の進化が及ぼす悪影響やスポーツの意義を考えさせる。</p> <p>・「メディアのスポーツへの影響」や「用具の進化」については、考え続けることが抑止力になること、均衡が保たれるということを理解させる。</p>
	<p>4 まとめ、振り返り【自己評価】</p> <p>・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。</p>	<p>《知識・理解②》</p> <p>・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめさせる。</p>

【授業者としての振り返り】信頼関係も少しずつ築けてきて、授業が、前時よりもやりやすく感じた。学習内容も生徒の興味を引き、授業が活発であった。また、前時課題であった学習ノートの時間を前時よりは確保できた。

【研究の視点からの振り返り】「教えて考えさせる授業」による学習過程が少しずつ定着し始めた。今回の学習内容は「みる」視点を重視した教材であった。理解深化のディベート風ブレインストーミングが大変活発で、スポーツの新たな「見方・考え方」を働かせることにつながる学習内容であった。

【本時の展開】(3/6時間目)

(1) 本時の目標

<知識・理解③>オリンピックムーブメントについて、言ったり書き出したりできるようにする。

(2) 本時の評価

《知識・理解③》オリンピックムーブメントについて、言ったり書き出したりしている。【観察】【学習ノート】

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1 本時の学習内容を確認する。	・学習ノートで本時のねらいを簡潔に説明し、確認させる。
	<p>【学習内容】</p> <p>①オリンピズム、オリンピックムーブメントとは何か説明できるようにすること。</p> <p>②東京オリンピック・パラリンピックの価値について、自分の考えを述べるができるようにすること。</p>	
教える25分	2 講義【教師の説明】	・プレゼンテーションソフトで画像や動画を活用し、学習効果を高める。
	<p>○オリンピズム、オリンピックムーブメントについて</p> <p>・オリンピズム、オリンピックムーブメントについて理解する。</p> <p>○東京オリンピック・パラリンピックについて</p> <p>・東京オリンピック・パラリンピックの開催時期や実施競技について理解する。</p> <p>・神奈川県で開催される種目や会場について理解する。</p>	<p>・オリンピックの目的とはメダルを獲得すること以前に世界平和、国際親善であることを、具体例を示して理解させる。</p> <p>・オリンピック休戦のように、スポーツは戦争や内戦を休戦させるだけの影響力のあることを理解させる。</p> <p>・東京オリンピックだけでなく、パラリンピックにも興味関心が湧くような指導を心がける。</p> <p>・実施時期や実施競技を理解させる。</p> <p>・神奈川県が関係することも伝え、身近に世界的ビッグイベントが開催され、世界各国の人たちが集まってくることを実感させる。</p>
考えさせる20分	3 フォトランゲージ 分類フレーム付きブレインストーミング【理解深化】	・フォトランゲージの説明をする。 ・ブレインストーミング後、分類フレームの説明をする。
	<p>【発問】 次の写真から考えられる「スポーツに関わる人(こと、もの)」を挙げてみましょう。</p>	
	<p>・ブレインストーミングで、ペアとお互いの考えを共有し、思考を広げる。</p> <p>・『する・みる・支える・知る』の4つの視点から考える。</p> <p>・ペアとお互いの考えを『する・みる・支える・知る』の4つの視点に分類しながら共有し、思考を広げる。</p> <p>・リオオリンピックの総集編動画を観賞する。</p> <p>4 まとめ、振り返り【自己評価】</p> <p>・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。</p>	<p>・『する・みる・支える・知る』の4つの視点から考えると整理しやすいことを促す。</p> <p>・出てきたものを4つの視点に分類することで、『する・みる・支える・知る』視点を意識付けさせる。また『する』以外の『みる・支える・知る』という視点の関わり方について理解させる。</p> <p>・スポーツには多くの人が関わっており、多様な関わり方の思考を広げるキッカケになるよう促す。</p> <p>・様々な『支え方』があることも、具体例を示し、思考の広がりやキッカケを与える。</p> <p>・スポーツの感動をオリンピックの動画を見せることで、感じさせ、その感動を多くの方に味わってもらうためにアスリートたちはオリンピック誘致に力を注いでいたことを伝える。</p> <p>《知識・理解③》</p> <p>・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめさせる。</p>

【授業者としての振り返り】本時は、まさにオリンピック・パラリンピック教育と言える内容で2020東京大会に向けた意識も高まった様子であった。あらゆるタイムマネジメントがうまくいった。

【研究の視点からの振り返り】生徒が学習ノートの効果を感じ始めたようで、取り組む姿勢、文章量、内容が良くなった。毎回提出させ、コメントを付けて返却することで生徒のモチベーションの向上も見取れる。



【本時の展開】(4 / 6時間目)

(1) 本時の目標

<思考・判断①> オリンピックとドーピングについて、必要な情報を比較したり、分析したりしてまとめた考えを説明できるようにする。

<知識・理解③> オリンピックとドーピングについて、言ったり書き出したりできるようにする。

(2) 本時の評価

《思考・判断①》 オリンピックとドーピングについて、必要な情報を比較したり、分析したりしてまとめた考えを説明している。【観察】【学習ノート】

《知識・理解③》 オリンピックとドーピングについて、言ったり書き出したりしている。【観察】【学習ノート】

(3) 展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1 本時の学習内容を確認する。	・学習ノートで本時のねらいを簡潔に説明し、確認させる。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【学習内容】 ①ドーピング禁止の理由を説明できるようにすること。 ②スポーツ倫理を学び、スポーツの価値について自分の考えを述べるようにすること。</p> </div>	
教える25分	2 講義【教師の説明】 ○フェアプレイとは何か ・具体例からスポーツの倫理観、フェアプレイについて考える。 ○ドーピングが禁止されている理由 ・心身への害があることを理解する。 ・ドーピングの種類について理解する。 ・WADA や各国に反ドーピング機構が設置されていることを理解する。 ・フェアでないこともドーピング使用禁止の理由であることを理解する。 ・スポーツの価値とは何かを考え、ドーピングとはその価値をすべて否定することであると理解する。 ・青少年への悪影響を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレゼンテーションソフトで画像や動画を活用し、学習効果を高める。</li> <li>・具体例を示し、スポーツの倫理観、フェアプレイについて考えるキッカケを与え、本時の学習効果を高める。</li> <li>・ドーピングによる心身への害の具体例を示し、理解させる。</li> <li>・ドーピングの種類やメカニズムを説明し、理解させる。</li> <li>・WADA、JADA などの反ドーピング機構を説明する。</li> <li>・例示から、フェアにプレーすることで栄誉をもらう資格があることを理解させる。</li> <li>・発問でスポーツの価値を考えさせる。次に発表で、生徒全体にスポーツには多様な価値があることを理解させる。発問を重ねることで、ドーピングがスポーツの価値を否定する行為であることをより実感させる。</li> <li>・青少年への悪影響を理解させる。</li> </ul>
考えさせる20分	3 分類フレーム付きブレインストーミング【理解深化】	・ドーピングが起こる理由を考える視点をあらかじめ示し、思考を広げるキッカケを与える。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【発問】なぜドーピングが起こるの？</p> </div>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜドーピングが起こるのか、様々な視点から考える。</li> <li>・ブレインストーミングで、ペアとお互いの考えを共有し、思考を広げる。</li> <li>○ドーピング蔓延の理由について</li> <li>・メダリストやチームがお金を得るメカニズムについて理解し、不正に繋がっていることを理解する。</li> <li>・オリンピックを国の威信や国力のアピールに利用していることも不正に繋がっていることを理解する。</li> <li>・日本は、世界で最もドーピングが起こらない国であり、高い倫理観があることを理解する。</li> </ul>	<p>《思考・判断①》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人だけでなく、その周囲のチームスタッフもお金を得るために協力して不正を働いてしまうことや、国家の威信や国力のアピールのために国家ぐるみで不正を斡旋してしまっている現状を、具体例を用いて伝える。</li> <li>・ドーピングをなくすためには高い倫理観が必要であることを理解させる。</li> <li>・日本は、世界で最もドーピングの少ない国であり、その倫理観にアスリートは支えられているということ、自分もその支えの一員であることを自覚させる。</li> </ul> <p>《思考・判断①》《知識・理解③》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめさせる。</li> </ul>
	4 まとめ、振り返り【自己評価】 ・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。	

【授業者としての振り返り】本時は、単元内で最もボリュームのある学習内容で授業の展開が慌ただしく、かつ内容も難しかったため生徒にとって落ち着く暇のない授業であったと思う。6時間で収める際の苦しい部分である。

【研究の視点からの振り返り】本時は、ドーピングという「スポーツの影」を扱った内容で生徒にスポーツの価値や意義を考えさせるには絶好の学習内容であった。“スポーツ倫理”を学ぶことで正しい倫理観とは何か、高潔性の重要性を学習できたのではないか。学習ノートにも、「見方・考え方」を働かせた記述が多く見られた。

【本時の展開】（5 / 6 時間目）

（1）本時の目標

<思考・判断②>スポーツの経済的効果とスポーツ産業について、必要な情報を比較したり、分析したりしてまとめた考えを説明できるようにする。

<知識・理解④>スポーツの経済的効果とスポーツ産業について、言ったり書き出したりできるようにする。

（2）本時の評価

《思考・判断②》スポーツの経済的効果とスポーツ産業について、必要な情報を比較したり、分析したりしてまとめた考えを説明している。【観察】【学習ノート】

《知識・理解④》スポーツの経済的効果とスポーツ産業について、言ったり書き出したりしている。【観察】【学習ノート】

（3）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1 本時の学習内容を確認する。	・学習ノートで体調の確認と本時のねらいを簡潔に確認させる。
教える30分	<p>【学習内容】</p> <p>①スポーツと経済、産業のつながりを理解し、説明できるようにすること。</p> <p>②スポーツ経済・産業が、スポーツそのものの価値をおとしめる可能性があることを理解し、自分の考えを述べるようにすること。</p>	<p>・プレゼンテーションソフトで画像や動画を活用し、学習効果を高める。</p> <p>・モントリオール五輪までの公的資金運営からロサンゼルス五輪からの経営民営化の経緯を説明し、理解させる。</p> <p>・オリンピックは、経済的に豊かになるが、近年は開催後に施設の運営維持などに苦慮していることも同時に伝える。</p> <p>・直接効果、波及効果について、具体例を示し、経済効果の仕組みを説明する。</p> <p>・神奈川県にプロチームがある理由やそれがもたらす経済効果について説明する。</p> <p>・スポーツ選手と企業のスポンサー契約の具体例を示し、つながりを理解させる。</p> <p>・具体例を示し、誤った「スポーツの価値観」から、経済がスポーツそのものの価値をおとしめる可能性があることを説明する。</p> <p>・高校野球を具体例とし、スポーツ産業について説明する。</p>
	<p>2 講義【教師の説明】</p> <p>○スポーツと経済の関係</p> <p>・ロサンゼルス五輪の商業化の経緯を理解し、オリンピックは経済に影響があることを理解する。</p> <p>・東京オリンピックやワールドカップを通して、大きなスポーツイベントがもたらす経済効果を理解する。</p> <p>・神奈川県が誇るプロチームがもたらす経済効果について理解する。</p> <p>・スポーツと企業のつながりについて理解する。</p> <p>・そのお金を選手が得たいがためにドーピングが行われていることから、スポーツの価値について復習する。</p> <p>○スポーツと産業の関係</p> <p>・高校野球を例としてスポーツ産業の成り立ちを理解する。</p>	
考えさせる15分	<p>3 分類フレーム付きブレインストーミング【理解深化】</p>	<p>・高校野球を具体例とし、その他のスポーツ産業について考えさせる。</p>
	<p>【発問】スポーツ産業にはどのようなものがあるか。</p> <p>・ブレインストーミングで、ペアとお互いの考えを共有し、思考を広げる。</p> <p>・スポーツ産業の3つのサービスの分類に照らし合わせながら、考えを整理する。</p> <p>・スポーツツーリズムなど、新たなスポーツ産業について理解する。</p> <p>・スポーツ産業からスポーツの価値を考える。</p>	<p>《思考・判断②》</p> <p>・スポーツ産業の3つのサービスの分類について説明する。</p> <p>・新たなスポーツ産業は3つのサービスが重なり合って生まれていることを理解させる。</p> <p>・スポーツを経済、産業などにリンクさせることでスポーツとの多様な関わりの視点を広げさせる。</p> <p>・具体例を示し、誤った「スポーツの価値観」から、産業がスポーツそのものの価値をおとしめる可能性があることを説明する。</p>
	<p>4 まとめ、振り返り【自己評価】</p> <p>・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。</p>	<p>《思考・判断②》《知識・理解④》</p> <p>・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめさせる。</p>

【授業者としての振り返り】「教えて考えさせる授業」やペア・ミーティング、理解深化のペア活動などこちらの設定した学習過程が定着し、授業の流れが出来上がった。生徒・授業者相互で良い学習環境を作ることができた。

【研究の視点からの振り返り】本時は、スポーツと“経済”、“産業”といった社会とのつながりを学習する内容となっている。お金やビジネスとスポーツのつながりは、生徒にとって今まで結び付きをあまり考えたことがなく、とても新鮮だったようで、新たなスポーツの「見方・考え方」が働いている様子が見て取れた。

【本時の展開】（6 / 6 時間目）

（1）本時の目標

<関心・意欲・態度①> スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について、意見を交換したり、自分の考えを発表したりするなどの活動を通して、学習に自主的に取り組もうとすることができるようにする。

（2）本時の評価

《関心・意欲・態度①》 スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について、意見を交換したり、自分の考えを発表したりするなどの活動を通して、学習に自主的に取り組もうとしている。

【観察】【教材プリント（お見合いルーレット、簡易マンダラート）】

（3）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ 5分	1 本時の学習内容を確認する。	・学習ノートで体調の確認と本時のねらいを簡潔に確認させる。
振り 返り 10分	<p>【学習内容】</p> <p>①単元を通して学んできたことを活かし、「スポーツの意義や価値」について、自分の考えを述べるができるようにすること。</p> <p>②自己に応じた「スポーツとの多様な関わり方」について、自分の考えを述べるができるようにすること。</p>	<p>・プレゼンテーションソフトで画像や動画を活用し、学習効果を高める。</p> <p>・各時間の学習内容の振り返りを行う。</p>
	2 講義【教師の説明】 ○前時までの学習内容を確認する。 ・各単元を通じて学んできたことの振り返りを行う。	
考え させる 35分	3 お見合いルーレット【理解深化】	・お見合いルーレットの説明をする。
	<p>【発問】「①体育理論の学びの中で最も印象的な内容とその理由。②そこから感じたこと、考えたこと」を各自でまとめ、発表しよう。</p>	<p>《関心・意欲・態度①》</p> <p>・学習してきた5時間分の中で、最も印象に残った内容を挙げ、そこから学んだことを書き出させ、発表する準備をさせる。</p>
	<p>○今単元で学習した5時間分の中で、最も印象に残った内容を挙げ、そこから学んだことをまとめる。</p> <p>○自分の考えを「お見合いルーレット形式」で発表する。</p>	
4 簡易マンダラート【理解深化】	・マンダラートの書き方や考え方の説明をする。	
	<p>【発問】「これからの自分とスポーツとの関わり方」を簡易マンダラートで考えてみよう。</p>	
	<p>○スポーツの「する」「みる」「支える」「知る」の4つの視点と自分との関わり方について考える。</p> <p>・完成したものを同じグループのメンバーに発表する。</p> <p>・他の生徒で良いと思ったものを自分のマンダラートに加える。</p>	<p>・「する」「みる」「支える」「知る」の4つの視点と自分との関わり方について考えさせる。</p> <p>・完成したものを同じグループのメンバーに発表させる。</p> <p>・他の生徒で良いと思ったものを自分のマンダラートに加える。</p>
	5 まとめ、振り返り【自己評価】 ・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめる。	・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめさせる。

【授業者としての振り返り】 単元を通じたまとめの学習内容であった。回想ムービーが予想以上に授業の雰囲気を作り、まとめとしての効果があったと感じている。お見合いルーレットの発表活動も大変活発であった。

【研究の視点からの振り返り】 単元を通じた「教えて考えさせる授業」の「考えさせる」に重点を置いた教材であったが、1～5時間目に「教えた」知識を活かして「考えさせる」活動が効果的であったと実感している。

## 6 実態調査の結果

令和元年7月4日（木）に、本研究の対象である1学年の生徒317名に対し、体育理論に係る実態調査を行った。

### 体育理論の認知度

図13は、「体育の授業には『陸上競技』『水泳』『球技』『武道』等と並んで『体育理論』という領域があることを知っていますか」という質問に、「はい」「いいえ」で回答してもらった結果である。

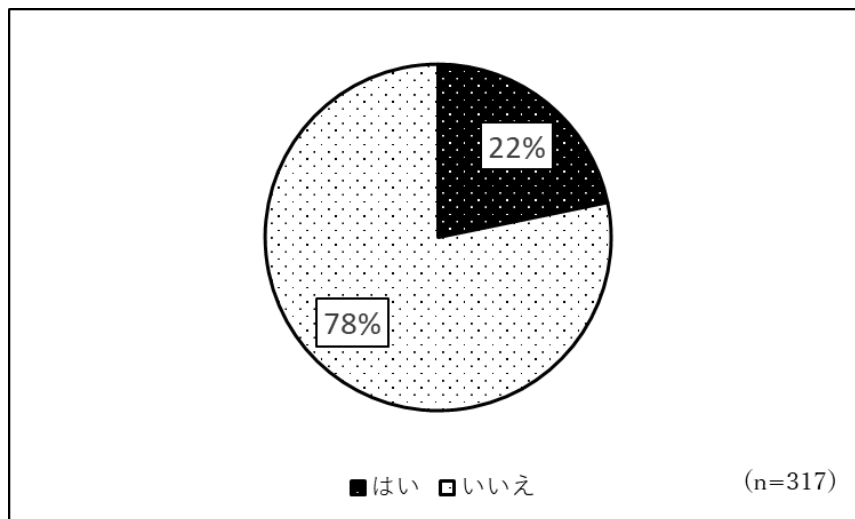


図13 「体育理論を知っていますか」に対する回答

「いいえ（知らない）」と回答した生徒が78%を占め、「はい（知っている）」と回答した生徒が22%であった。

図14は、「中学校のとき『体育理論』の授業を受けた記憶はありますか」という質問に、「はい」「いいえ」で回答してもらった結果である。

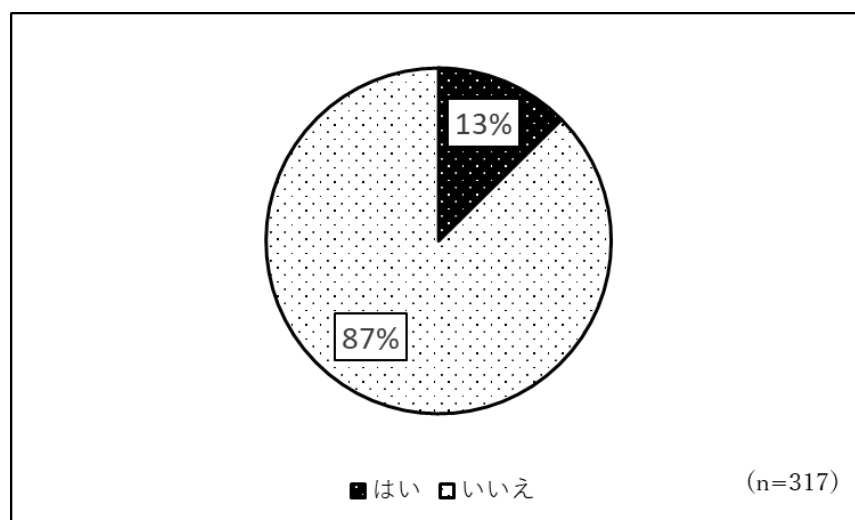


図14 「体育理論を受けた記憶はありますか」に対する回答

「いいえ（記憶がない）」と回答した生徒が87%を占め、「はい（記憶がある）」と回答した生徒が13%であった。

図14の結果は、現行の中学校学習指導要領で、体育理論は各学年で3単位時間以上の配当と示されており、おそらく他の領域に比べ授業時間数が少なく、“体育理論の授業”として記憶に残らなかった可能性があると考えられる。

### 体育理論への興味

図15は、「体育を座学（体育理論）でやることに興味はありますか」という質問に、「1（そう思う）」、「2（どちらかというと思う）」、「3（どちらでもない）」、「4（どちらかというと思う）」、「5（そう思わない）」の選択肢の中から1つ選んで回答してもらった結果である。

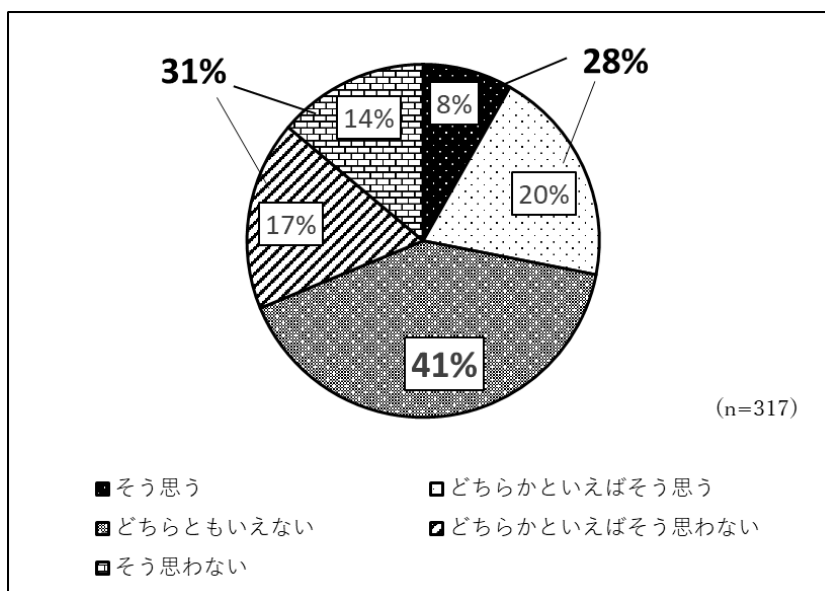


図15 「体育理論に興味はありますか」に対する回答

「そう思う」と「どちらかというと思う」の肯定的な回答が28%、「どちらでもない」が41%、「どちらかというと思う」と「そう思わない」の否定的な回答が31%であった。

この結果から、体育理論に対して、あまり肯定的にはとらえていないということが考えられる。

また、前述の図14の結果から、体育理論の授業イメージが抱けなかった生徒も多くいたことが想定され、「どちらでもない」が多くなったと考えられる。

### 実態調査の結果のまとめ

- ・ 体育理論の認知度が低い。
- ・ 体育理論を受けた記憶がある生徒の割合が低い。
- ・ 体育理論に対して肯定的な回答の割合が低い。

## 7 検証授業の結果と考察

検証授業で得られたデータを基に、検証の視点に沿って仮説を検証することとする。

検証授業の出席者数は、表6のとおりである。また、事前・事後アンケートの回収状況には、表7のとおりである。

表6 検証授業の出席者数

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
1年6組(40名)	40名	40名	40名	40名	40名	40名
1年7組(40名)	39名	39名	38名	39名	40名	40名
合計	79名	79名	78名	79名	80名	80名

表7 事前・事後アンケートの回収状況

	事前	事後
1年6組(40名)	40名	40名
1年7組(40名)	40名	40名
合計	80名	80名

本研究の対象クラスの6組と7組のデータを複数項目比較したところ、クラス間に顕著な差異が見られなかったため、クラスごとのデータとせず、1つの集団のデータとして、仮説を検証することとした。また、本研究においては、「そう思う」、「どちらかというと思う」、「どちらかというと思わない」、「そう思わない」の4件法によるアンケートの結果において、「そう思う」、「どちらかというと思う」を合わせて「そう思う群」、「どちらかというと思わない」、「そう思わない」を合わせて「そう思わない群」と表記し、グラフには数値を太枠で囲むこととする。そして、本研究において、4件法と表記する場合の選択肢は、上記選択肢を意味することとする。

なお、文中の生徒の記述については、誤字・脱字を除き、生徒が記述したままの表現で記載した。太字、下線は筆者が加筆した。

(1) 生徒が授業をどのようにとらえたか

ア 体育理論の授業は楽しかったか

図16は、事後アンケートの「体育理論の授業は楽しかったですか」という質問に、4件法で回答してもらった結果である。

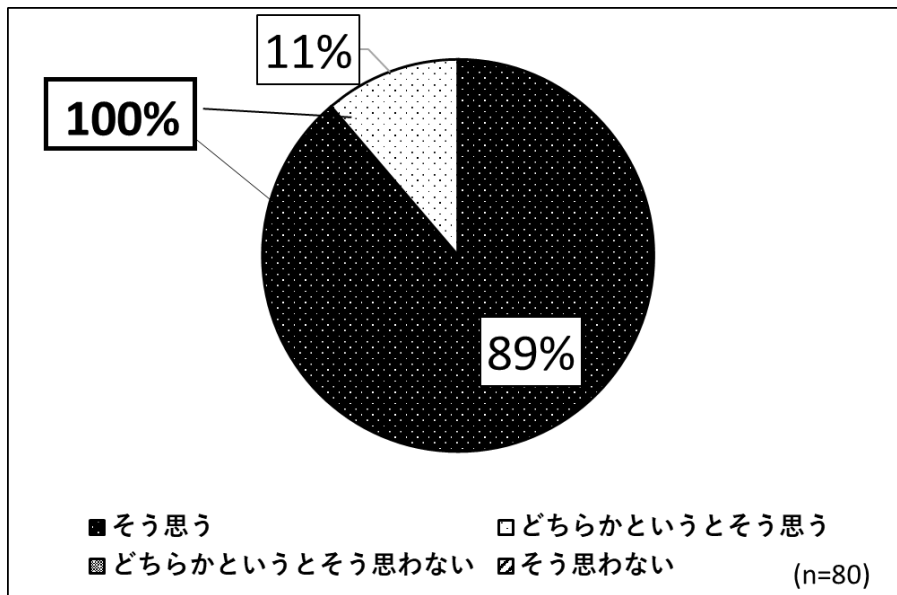


図16 「体育理論の授業は楽しかったですか」に対する回答

「そう思う」と回答した生徒が89%、「どちらかというと思う」と回答した生徒が11%であり、「そう思う群」が100%を占め、全員が、今回の体育理論の授業を楽しむことができたと考えられる。また、事後アンケートの感想等の自由記述に次のような記述があった。

「 <u>新しい知識を得られたとき</u> や <u>“なるほど”</u> と思えたときが <u>とても気持ちが良かった</u> 。どの教科よりも体育理論を勉強したいと思うようになった」
「 <u>達成感</u> があり、とても楽しかった。正直、 <u>体育でこんなに楽しい時間を過ごせたのは初めて</u> 」
「 <u>社会の見え方</u> がガラリと <u>変わった</u> 」
「今回の授業で <u>スポーツの見方</u> が変わった。本当にこの授業で <u>自分の中の何か</u> が変わった気がする」

以上のような前向きな記述が多数あることから、今まで知らなかったスポーツの側面を知ることができたり、スポーツの新たな「見方・考え方」ができるようになったりしたことが、授業が楽しかったと回答した要因だと考えられる。

イ 体育理論の必要性の認識

図17は、授業前に行った事前アンケート（以下、事前という。）と授業の後に行った事後アンケート（以下、事後という。）の「体育の授業において『座学で学ぶ知識（体育理論）』は必要だと思いますか」という質問に4件法で回答してもらった結果である。

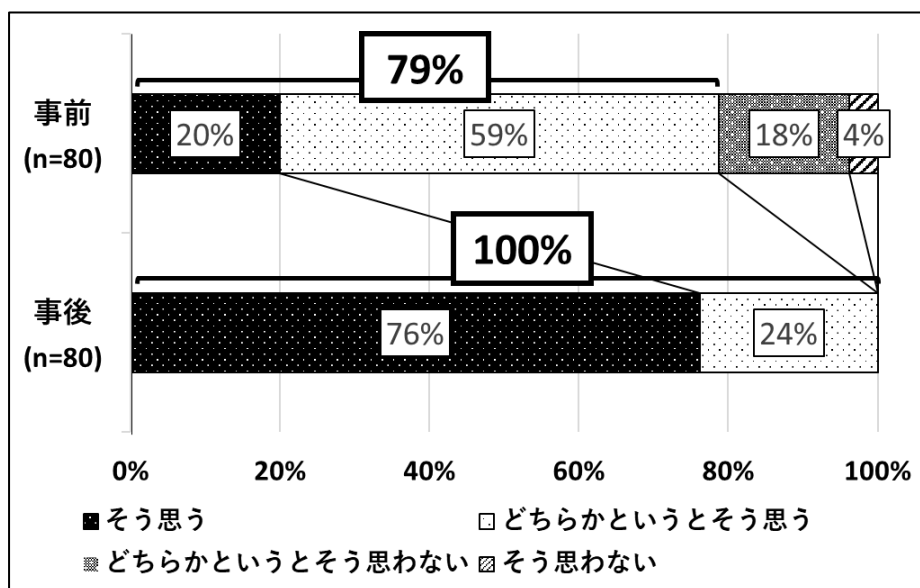


図17 「体育理論は必要だと思いますか」 事前・事後の比較

図17を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の79%から事後では100%になった。今回の体育理論の授業を通して、全員の生徒が、体育理論の必要性を認識ができたと考えられる。

表8は、同様の質問について、事前から事後の回答の推移の内訳である。

表8 「体育理論は必要だと思いますか」に対する回答の事前・事後の推移の内訳

「4（そう思う）」「3（どちらかというと思う）」「2（どちらかというと思わない）」「1（そう思わない）」

4 ➡ 4	14名 (18%)	3 ➡ 4	36名 (45%)	2 ➡ 4	9名 (11%)	1 ➡ 4	2名 (3%)
4 ➡ 3	2名 (3%)	3 ➡ 3	11名 (14%)	2 ➡ 3	5名 (6%)	1 ➡ 3	1名 (1%)
4 ➡ 2	0名	3 ➡ 2	0名	2 ➡ 2	0名	1 ➡ 2	0名
4 ➡ 1	0名	3 ➡ 1	0名	2 ➡ 1	0名	1 ➡ 1	0名

(n=80)

表8を見ると、「どちらかというと思う」から「そう思う」に推移した人数が36名（全体の45%）と最も多かったことがわかる。

表9は、「体育の授業において『座学で学ぶ知識（体育理論）』は必要だと思いますか」という質問の回答について、「それはなぜですか。理由を書いてください」という質問の回答の中で、人数が最も多かった「3（どちらかというと思う）」から「4（そう思う）」と回答が推移した生徒の自由記述に推移した生徒の記述からの回答の抜粋である。



表9 「どちらかというと思う」から「そう思う」に回答が推移した生徒の回答理由（抜粋）

<p><b>生徒A</b></p> <p>（事前）今ある知識よりさらに新しいスポーツの知識を得ることは良いことだと思ったから。</p> <p>➡（事後）最初は体育理論なんてやらなくてもいいと正直思っていた。けれど、学んでみると自分の知らなかった<u>オリンピックでのエピソード、オリンピックの目的、裏で回っている経済について</u>など、新しい知識を知ることができた。オリンピックの知識が知れたことで、<u>オリンピックを絶対見ようと思えた</u>し、自分にとって良い機会が与えられたのでとても良かった。</p>
<p><b>生徒B</b></p> <p>（事前）ただ体を動かすだけじゃ得られない知識もあると思うし、学ぶことによって体育への考え方が変わるかもしれないから。</p> <p>➡（事後）体育理論を学ぶ前は正直何をするのかわからなかったし、意味ないと思っていたけど、学んだことによって<u>スポーツに対する考え方が変わった</u>、スポーツにはこんないろいろなものに影響を与えることができるんだなと思いました。このように考え方が変わったので必要だと思いました。</p>
<p><b>生徒C</b></p> <p>（事前）知識がないよりはある方が良いと思う。</p> <p>➡（事後）最初「体育理論」と聞いて、正直やりたくないと思った。けれど授業を重ねるにつれ、<u>スポーツの意味が分かったような気がした</u>。体育の授業において体育理論は必要だと思った。</p>
<p><b>生徒D</b></p> <p>（事前）体育理論は受けたことがないから、どういうものかわからないが、1回ちゃんと受けてみたいと思った。</p> <p>➡（事後）なぜスポーツをするのか、<u>スポーツをすることによっての影響や歴史を学ぶことは大切</u>だと思った。自分も初めて知った部分が多かったし、これからためになることも多かったから必要だと思った。</p>
<p><b>生徒E</b></p> <p>（事前）体のしくみや性質を理解することは大事だと思うが、やはり体を動かすことが上手になる近道だと思う。</p> <p>➡（事後）実際に体を動かして学ぶのと、座学で学ぶ知識は全く違った。最初、体育理論は跳び箱の跳び方や、陸上で正しい走り方などを勉強するのだと思っていたが、<u>オリンピックの歴史やドーピング、スポーツが与える経済効果</u>などを学ぶと知って少し驚いた。それと同時に好奇心、興味が湧いてきた。もし、<u>体育理論を受けなければ知らなかった</u>ことがたくさんあったのでとても楽しかった。体育理論は<u>実技とまた違った良さ</u>があって良いと思った。</p>
<p><b>生徒F</b></p> <p>（事前）座学は身になるし、学習の向上を感じることができる。運動は得意ではないし、成長を感じることができない。</p> <p>➡（事後）「スポーツ」は“体を動かして評価されるもの”としか思っていなかったし、「体育」は“不公平な成績を付けられる教科”としか思っていなかったが、今回、<u>座学を通じてスポーツの“奥深さ”や“支える”などの新しい見方を見出すことができた</u>。</p>

表9の記述から「どちらかというと思う」から「そう思う」に回答が推移した理由として、体育理論の意義を具体的に認識できるようになったからと考えられる。

抜粋ではあるが、事前では、学習内容が具体的に分かってはいないが、「きっと必要であろう」という、言わば“期待”のような記述が多く見られる（生徒A～F）。しかし、事後は実際に体育理論の授業を受け、新たな知識を習得したり、スポーツの「見方・考

え方」の広がりを感じたりしていることが見取れる記述が多く見られる。また、**生徒F**のように運動が不得意な生徒も、スポーツを好意的に受け止めるような記述もあり、いわゆる“体育嫌い”の生徒にとって、体育を前向きにとらえることができる領域であるとも考えられる。

**表10**は、事前に「そう思わない群」から事後に「そう思う群」に回答が推移した生徒の自由記述からの抜粋である。

**表10「そう思わない群」から「そう思う群」に回答が推移した生徒の回答理由（抜粋）**

**1 ⇒ 4 と推移した生徒の自由記述**

<p><b>生徒G</b>          (事前) 中学校でやっていなかった。こういうことをやったことがないので、あまり必要に感じない。(パターン2)          ⇒ (事後) 座学で学んだことで、<u>スポーツの価値観を知ることができたから。もし、この授業を受けていなかったらスポーツの価値観が分からなかったかもしれない。</u>そう思うと必要だと思う。</p>
<p><b>生徒H</b>          (事前) まだどういう授業なのかわからないから。(パターン2)          ⇒ (事後) <u>メディアによってルールが変わってしまったりなど、知らないことがいっぱい知れたので、やったほうが良いと思う。</u></p>

**2 ⇒ 4 と推移した生徒の自由記述**

<p><b>生徒I</b>          (事前) 分からないことを聞いて学ぶことも大切だとは思いますが、実際に体を使って学ぶことのほうが大切だと思うからです。(パターン1)          ⇒ (事後) 必要だと思います。なぜなら、<u>スポーツに対しての価値や見方や考え方を学ぶことができるから</u>です。また、<u>自分が知らなかったことがたくさん学べ、それを実技の方でも活かせると思った</u>からです。また、座学で近くの人と積極的に話をすることで新たな疑問が生まれ、<u>よりスポーツに対して興味を抱くことができるから</u>です。</p>
<p><b>生徒J</b>          (事前) 今まで体育の授業は体を動かすだけだと思っていて、座学で学ぶというのは考えたことがないから。(パターン1)          ⇒ (事後) スポーツと普段の生活の結びつきのようなものがあって、大人になって<u>社会に出ても役に立つものがある</u>と思いました。<u>特にスポーツと経済や産業を結びつけて考えることも大人になったらあるかもしれないので、座学で体育を学ぶことは必要だ</u>と思いました。</p>
<p><b>生徒K</b>          (事前) まだ体育理論についてよく分かりません。なので実際に受けてみてから判断したいです。体を動かさずに授業を受けるのなら、保健に入れてもいいと思いました。(パターン1)          ⇒ (事後) 今回の体育理論では、<u>スポーツの価値観を知ることができた</u>。なので、<u>前とは違うスポーツの見方ができるようになり、スポーツに興味を持てた</u>からです。また、<u>スポーツをするときの考え方も変わり、スポーツをすることが以前よりも楽しくなった</u>からです。</p>
<p><b>生徒L</b>          (事前) 体育で座学は集中できないから。体育は体を動かすものだから。(パターン1)          ⇒ (事後) 体育に関連した、“<u>知っていて得する知識</u>”がいっぱいあったから。また、<u>今自分がやっているスポーツの歴史を知ったりできると、意欲が向上して体育をすることができる</u>から。</p>

また、自分の身近にあるオリンピックも、オリンピズムなどを意識して見ることができるから。今自分がやっているスポーツの楽しさなども分かることができるし、深く考えることができると思ったからです。

### 1⇒3と推移した生徒の自由記述

#### 生徒M

(事前) 体を動かして学んだほうが得るものが多いと思うし、スポーツをして仲を深めたり、協調性を養ったりする方が大事だと思ったから。(パターン1)

⇒(事後) 世界的な大会に興味を持って、さらにスポーツへの関心や、憧れなどが強くなったから。きちんとした知識を取り入れるために大事。

### 2⇒3と推移した生徒の自由記述

#### 生徒N

(事前) どういうことを学ぶのか分からないのと、その知識がどう活かせるかもよく分からないから。やっていて楽しい授業なのか。(パターン2)

⇒(事後) 将来、会社に入ってスポーツ関係の仕事をするようになったとき、スポーツに道を選ぶにあたって関連するような知識を知っておくことは活かせると思ったから。スポーツの方向につなげるにも、新しい発想が必要だと思うから、スポーツの多様性を知識に入れておくことはとても良いことだと思った。

#### 生徒O

(事前) 保健みたいだから、保健でやればいいと思う。(パターン2)

⇒(事後) 知識がより多く身に付き、楽しかったから。ICTを使って分かりやすかったから。

抜粋ではあるが、「そう思わない群」の生徒の事前の記述は、大きく2パターンに分けられる。1つは“体育は実技”としか認識できていないパターン1。2つ目は、体育理論とはそもそもどのような学習なのかが分かっていない“体育理論の未理解”のパターン2、である。

パターン1において、事前で“体育は実技”としか認識できていない生徒が事後では、知識を得ることでスポーツへのモチベーションがさらに高まっていると読み取れるような記述(生徒I、J、K、L、M)が見られるようになった。

パターン2において、事前で“体育理論の未理解”の生徒が事後では、実際に授業を受け、体育理論の楽しさや必要性を感じるような記述(生徒G、H、N、O)が見られるようになった。

どちらのパターンも、実際に体育理論の授業を通して、体育の「知識に関する領域」の重要性を実感したことで、事後には、必要性を感じるような回答が増え、「そう思わない群」がゼロとなったと考えられる。

ウ 「教えて考えさせる授業」による学習をどのようにとらえたか

図18は、次の4つの質問(事後アンケート)に対する4件法による回答割合である。

- (ア) 「先生からの説明はわかりやすかったですか」
- (イ) 「授業でのICT(画像、動画、プレゼンテーションソフト)の活用により、授業がわかりやすかったと思いますか」
- (ウ) 「ペア活動によって理解を深めることができましたか」
- (エ) 「学習ノートにより、毎授業の最後に振り返りをするのは、学習に役立ちましたか」

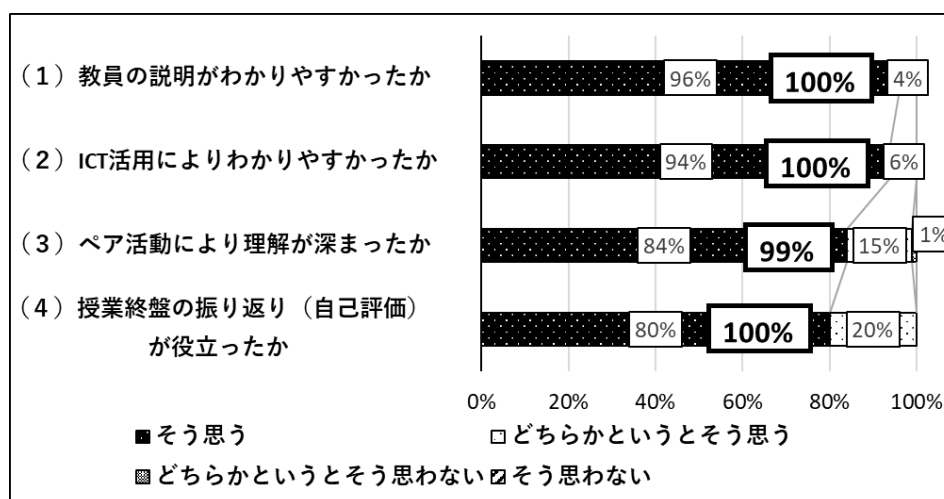


図18 各学習活動等に係る事後アンケートの回答割合

そう思う群は、(ア)、(イ)、(エ) で100%、(ウ) で99%と肯定的な回答結果となった。

(ア) の教員からの説明については、大部分が(イ)に係るICTを活用した説明であり、興味の湧くニュースや認知度の高いスポーツ選手を当該の画像や動画とともに取り上げ(p. 29参照)、視覚や聴覚に訴えたことが、(ア)と(イ)の肯定的な回答の要因であると考えられる。

(ウ) のペア活動(pp. 29-34参照)は、ブレインストーミング等を行ったが、「ペアの意見や他のペアの意見を聞くことができ考え方が広がった」、「ペア学習をすることで自分の意見以外の考え方が分かって、より関心が高まったと思います」など、事後アンケートに他者の考えが聞けて思考が広まったといった趣旨の記述が多数あり、ペア活動が機能したと考えられる。これは、前述の教員の説明がわかりやすく、生徒たちが情報を共有できていたことが、その背景にあったと考えられる。

そして、(エ)の振り返り活動(p. 25参照)では、その日の授業で学んだことを整理して書いたり、学んだことを活かして、改めて考えて文にしたりするなどの活動を行った。書くことが苦手な生徒もいたと思われるが、求めた量もそれほど多くなく、興味や関心を抱いた(p. 51参照)内容についての振り返りであったので、負担もなく書くことができたと考えられる。また、事後の感想に、教員からのコメントが毎回楽しみだったと記載している生徒もあり、生徒たちは、学習ノートによる振り返り活動を肯定的にとらえていたと考えられる。

以上のことから、生徒は「教えて考えさせる授業」による学習を肯定的にとらえていたと考えられる。

#### エ 授業における取組姿勢等

図19~22は、その日の授業に対する取組姿勢等について、4つの自己評価項目(学習ノート、p. 25参照)に対する4件法による回答割合の推移である。

- (ア)「自ら意欲的に楽しく授業にのぞめたか」
- (イ)「『もっと知りたい』など興味関心が湧いたか」
- (ウ) ペア活動の積極性「ペア活動を積極的に行おうとしたか」
- (エ)「本時のねらいが達成できたか」

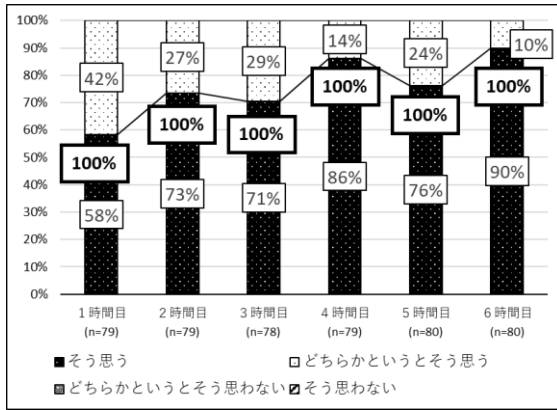


図19「意欲」の自己評価の推移

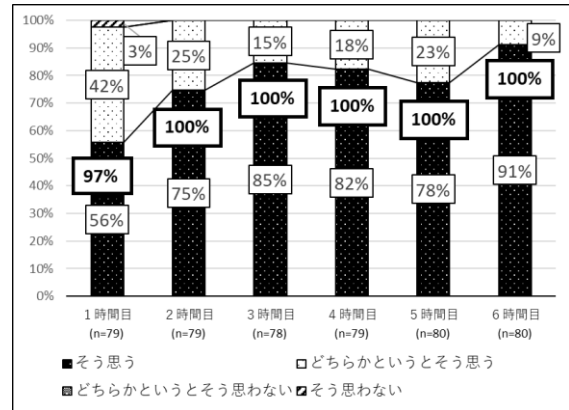


図20「興味関心」の自己評価の推移

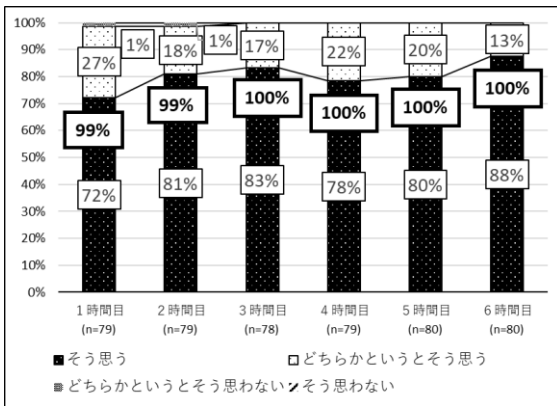


図21「ペア活動の積極性」の自己評価の推移

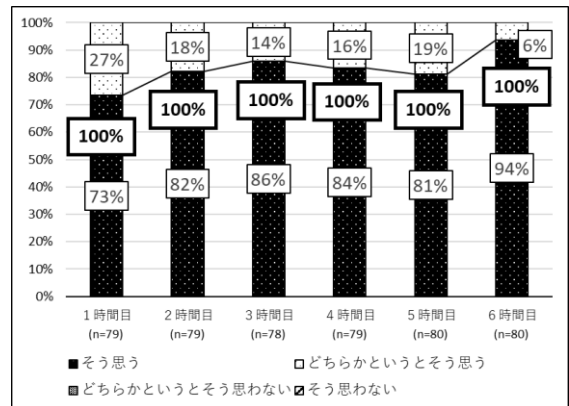


図22「ねらいへの達成感」の自己評価の推移

図19～22に示すとおり、1時間目から6時間目まで、すべての項目において「そう思う群」の割合が97～100%を占め、授業に取り組む姿勢は前向きであり、ねらいの達成度も高かった。これらの背景としては、今回の授業が、生徒にとって魅力的で楽しいものであったことが考えられる。

(ア)の意欲と(イ)の興味関心は、1時間目こそ、「そう思う」が50%台であったが、2時間目以降は70%以上となっている。原因としては、2時間目以降は、授業の見通しが持てたことなどが考えられる。

(ウ)のペア活動の積極性については、話し合い活動が苦手な生徒もいたと思われるが、1時間目から「そう思う」が70%台であり、単元を通じて、テーマに興味を持ちながら、積極的にペア活動が行われたと考えられる。

(エ)のねらいの達成については、毎回、学習のねらいを授業開始時に明確に示し(p. 26参照)、授業終盤に学習ノート(p. 25-26参照)で、そのねらいに対する振り返りを行ったことが高い達成感を得られた要因であると考えられる。具体的には、「授業で学んだこと」と「学んだことを基に考えたこと」が、振り返りの欄に書ければ、学習のねらいが達成されたことになる明快なシステムにしたことが、「そう思う」を増やしたと考えられる。

また、6時間目は、単元を通して学んだことを活かしたまとめの学習活動を行った。その結果、全項目において、「そう思う」の割合が最も高かった。

その要因として、2つ考えられる。1つ目は、1～5時間目の学習のポイントを象徴する名場面をまとめた回想ムービー(p. 33参照)の活用である。5時間分の学習を10分程度で視覚的に振り返ることができ、集中しながらこれまでの学習内容を整理できたと考えられる。2つ目は、これからのスポーツライフを、自分の生活に即して考える学習内容であったことで、内発的な動機付けが高まったことである。

オ 教材をどのようにとらえたか

(ア) 教材プリントをどのようにとらえたか

図23、24は、事後アンケートで、「授業で使用した教材プリント（個人用）はわかりやすかったですか」、「授業で使用した教材プリント（ペアワーク用）はわかりやすかったですか」という質問に対する4件法による回答してもらった結果である。

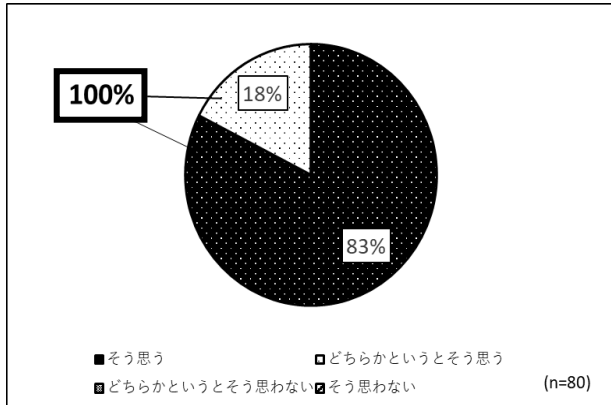


図23「教材プリント（個人用）はわかりやすかったですか」に対する回答

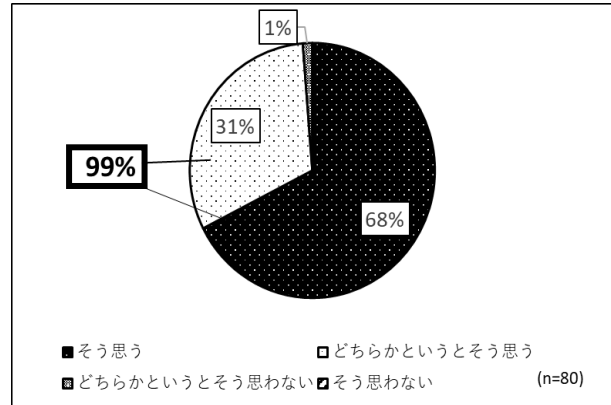


図24「教材プリント（ペア用）はわかりやすかったですか」に対する回答

両項目において、「そう思う群」が教材プリント（個人用）で100%、教材プリント（ペアワーク用）で99%を占めている。

要因としては、前述した、「重要な箇所に画像を入れたこと」や「ブレインストーミングを進めやすくしたこと」等の教材プリント作成時の工夫（pp. 27-34参照）がわかりやすさにつながったと考えられる。

(イ) 5つの単元の中で最も印象的だった内容はどれか

表11は、6時間目の授業内にて「これまで5時間の体育理論の学びの中で、最も印象的だった内容を選んでください」（多肢選択法で1つ選択）という学習活動での回答の集計結果である。

表11「今回の授業で最も印象的だった内容」についての集計結果

時間	学習内容	人数	割合
1	スポーツの歴史的発展と変容	2名	3%
2	スポーツの技術、戦術、ルールの変化	12名	15%
3	オリンピックムーブメント	13名	16%
4	オリンピックとドーピング	37名	47%
5	スポーツの経済効果とスポーツ産業	15名	19%

(n=79)

表11からわかるように、最も印象に残った内容は、4時間目の「オリンピックとドーピング」が半数近くを占める結果となった。

今回の教材は、スポーツの良い部分と懸念される部分の対立構造で授業を組み立てることを重要視した。（p. 19参照）中でも4時間目の内容が最も対立構造の要素が強かった。これは、4時間目の内容が3時間目の「オリンピックムーブメント」における「オリンピック」や、中学校までに教わってきたスポーツの高潔性のような「スポーツの光」の部分と

反する「ドーピング」といういわゆる「スポーツの影」の部分に触れており、その内容が生徒にとって衝撃的だったことが影響していると考えられる。また、その対立された内容を比較したり、どちらが正しいか判断をしたりする学習が、4時間目の印象度を強めたと考えられる。

一方、1時間目の「スポーツの歴史的発展と変容」は2名しか最も印象的と回答しなかった。これは学習内容の特性上、対立構造の要素が弱く、生徒が批判的思考を働かせづらかったため、思考力、判断力を働かせる場面が少なかったことが要因の1つであると考えられる。さらに、1時間目ということでオリエンテーションもあり、時間が短かった上に、1番最初に行ったので内容を忘れてしまったことも影響していると考えられる。

以上のことから、対立構造のような思考力、判断力を働かせやすい単元が、生徒の印象に残ることに影響を及ぼすと考えられる。

(ウ)「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材について、生徒がどのようにとらえたか

**表12**は、教材作成時に筆者が「する」「みる」「支える」「知る」の視点のうち、重点を置いた視点 (p. 18参照) と、毎授業後の振り返り項目 (学習ノート、p. 25参照) 「本時の授業は具体的に次のどの視点について学びましたか (「する」「みる」「支える」「知る」「どれも無い」の多肢選択法で、複数選択可)」に対する回答割合を示した表である。

**表12 「教材作成時の重点項目」と「生徒の回答の割合」を示した早見表**

時間	学習内容	「する」		「みる」		「支える」		「知る」	
		○	%	◎	%	◎	%	◎	%
1	スポーツの歴史的発展と変容 (n=79)	○	42%		42%		5%	◎	91%
2	スポーツの技術、戦術、ルールの変化 (n=79)		23%	○	58%		41%	◎	76%
3	オリンピックムーブメント (n=78)		63%	◎	73%	○	74%	◎	76%
4	オリンピックとドーピング (n=79)	○	41%		52%	◎	71%	◎	84%
5	スポーツの経済的効果とスポーツ産業 (n=80)		39%	○	75%	◎	66%	◎	78%
6	自分とスポーツとの関わり方 (n=80)		88%		89%		85%		91%

◎特に重点を置き学びを促す視点 ○重点を置き学びを促す視点 (n=80)

**表12**から分かるように、「知る」視点を回答した割合がすべての学習内容において最も高かった。これは、体育理論は、体育の「知識に関する領域」であり、6時間目を除き、この4つの視点のうち毎授業で「知る」視点を基礎としたことから、生徒が「知る」視点を回答することは、自然な結果だと考える。また、生徒の学習ノートや事後アンケートの記述に「もっと知りたい」、「具体的なことを知れて楽しかった」、「知れば知るほど興味が出てきた」等、知的欲求を満たすことが学習意欲の向上につながっていると読み取れる記載が多くあった。生徒は、毎時間新たな知識を得ていたと考えられ、毎時間、学んだ視点として「知る」を回答したと考えられる。

そして、ここで着目したいのは「支える」視点の項目である。1時間目では、教材作成上の重点ポイントではないが、「支える」視点を回答した生徒は5% (4名) と他の視点と比較し低い割合であった。これは、今までの経験や学習してきた中で、スポーツを「支える」視点というイメージが、生徒になかったからだと考えられる。しかし、2時間目からほぼ右肩上がりに割合を向上させていった。2時間目の内容も教材作成上の重点ポイントではなかったが、「支える」視点ととらえられる内容が多く登場する (スポーツと用具やメディアとのつながりなど) といった学習内容の特徴が要因だと考えられる。そのような部分で生徒は「支える」視点を自ら学び取り、回答したと考えられる。3時

間目では、「支える」視点を○（重点を置き学びを促す）、4、5時間目では、◎（特に重点を置き学びを促す）と位置付けたが、多くの生徒が学んだ視点として「支える」視点を回答している。

今まで生徒は、スポーツについて「する」や「みる」といった視点で考えてきたが、授業によりスポーツは多くの人、モノに“支えられて”成り立っているという「見方・考え方」を学び、またその「見方・考え方」を働かせ始めていることを示すデータであると考えられる。

以上のことから、各時間において、“筆者の教材作成にあたって重点を置いた視点”と“生徒の回答の割合”とが概ね合致しており、筆者の意図が生徒の回答に反映されたと考える。“重点を置いていない部分”の割合が高いことに関しては、前述しているように、生徒が自然と自ら学び取った視点であると考えられる。

### （１）「生徒が授業をどのようにとらえたか」のまとめ

- ・ 全員の生徒が、体育理論の授業を楽しいと感じた。
- ・ 全員の生徒が、体育理論の必要性を認識するようになった。
- ・ 「教えて考えさせる授業」による学習を、ほぼ全員の生徒が、肯定的にとらえていた。
- ・ ほぼ全員の生徒が、授業に対する取組姿勢は前向きであった。
- ・ 「する、みる、支える、知る」視点を学ぶ教材について、筆者の意図が生徒に反映された。



(2) 生徒の「スポーツの価値意識」が高まったか

表13は、木村らが、スポーツの価値意識の多面的な評価指標として開発した「スポーツ価値意識評価尺度(簡易版)」(7件法、p.8参照)による事前及び事後アンケートの(「強くそう思う」を7点、「まったくそう思わない」を1点として計算)回答結果(平均値)と、js-STARによる分散分析\*(1要因参加者内)の結果である。

また、表13のデータから「する」、「みる」、「支える」の大項目ごとに平均値を求め、同様に分散分析を行い、グラフ化したものが図25である。

表13「スポーツ価値意識評価尺度(簡易版)」についての回答の事前・事後の比較

				1年6.7組(n=79)						
				事前	事後	差	有意差			
する	個人的価値意識尺度	健康・体力づくり	1	体力を向上させることができる	6.61	6.69	0.08	ns		
			3	体型の維持・改善につながる	6.40	6.59	0.19	+		
			5	病気を予防することができる	6.11	6.24	0.13	ns		
		医療	8	病気の治療に役立つ	5.25	5.59	0.34	*		
			6	ストレスの発散ができる	5.81	6.10	0.29	+		
		心理的健康	11	不安やイライラを解消することに役立つ	5.56	5.93	0.36	**		
			4	目標を達成することに夢中になることが面白い	5.85	6.23	0.38	**		
		プレイ欲求充足	7	できなかったことができるようになることが面白い	6.06	6.39	0.33	**		
			9	社会的なマナーを身につけることができる	5.13	5.95	0.83	**		
		発達	12	協調性を養うことができる	5.89	6.30	0.41	**		
			2	人間関係を改善することができる	5.25	6.05	0.80	**		
		社交	10	新たな人との出会いの機会になる	5.89	6.40	0.51	**		
			社会・生活向上価値	7	地域住民や国民の生活に張りが出る	5.25	5.94	0.69	**	
		3		地域住民や国民における家族の絆を深めることができる	5.41	6.06	0.65	**		
		9		地域住民や国民の仲間を作る機会を創出する	5.88	6.25	0.38	*		
		経済的価値	2	地域や国における産業の発展に役立つ	5.08	6.24	1.16	**		
10	地域や国における新しい観光誘致に役立つ		5.14	6.21	1.08	**				
国際的価値	1	地域住民や国民における国際交流の機会を創出する	5.73	6.28	0.55	**				
	6	地域住民や国民の異文化理解につながる	5.48	6.39	0.91	**				
教育的価値	8	地域住民や国民の生涯学習につながる	5.16	5.88	0.71	**				
	5	地域や国におけるリーダーの育成に役立つ	5.20	5.89	0.69	**				
		4	地域住民や国民の豊かな心を養うことができる	5.41	6.14	0.73	**			
みる	個人的価値意識	直接観戦	本質的価値	代理達成	2	応援する選手やチームが勝つと達成感を得ることができる	6.16	6.53	0.36	**
			ドラマ	4	接戦が繰り広げられると、緊張感を味わうことができる	6.49	6.64	0.15	+	
			パフォーマンス	5	ハイレベルなプレーや演技をみるることができる	6.45	6.74	0.29	**	
		間接観戦	本質的価値	6	スポーツがもつ美しさ、優美さを感じる事ができる	5.83	6.41	0.59	**	
			社交	1	人と交流する機会になる	5.89	6.34	0.45	**	
			逃避	3	日々の決まった活動に大きな変化をもたらす	5.40	5.94	0.54	*	
	社会的価値意識	直接観戦	本質的価値	代理達成	2	応援する選手やチームが勝つと達成感を得ることができる	6.03	6.43	0.40	**
			ドラマ	4	接戦が繰り広げられると、緊張感を味わうことができる	6.15	6.33	0.18	ns	
			パフォーマンス	5	ハイレベルなプレーや演技をみる事ができる	6.34	6.56	0.23	*	
		間接観戦	本質的価値	6	スポーツがもつ美しさ、優美さを感じる事ができる	5.71	6.25	0.54	**	
			社交	1	人と交流する機会になる	4.66	5.26	0.60	**	
			逃避	3	日々の決まった活動に大きな変化をもたらす	5.04	5.71	0.68	**	
支える	スポーツの価値意識尺度	学習	1	地元地域や国に思い入れを感じることができる	5.78	6.28	0.50	**		
			2	地元地域や国の人々に親近感を持つことができる	5.60	6.28	0.68	**		
		自己改革	3	地元地域や国の人々と共通点があると感じることができる	5.50	6.19	0.69	**		
			1	地元地域や国に思い入れを感じることができる	5.40	5.90	0.50	**		
		社交	2	地元地域や国の人々に親近感を持つことができる	5.28	5.81	0.54	**		
			3	地元地域や国の人々と共通点があると感じることができる	5.25	5.91	0.66	**		
社会的義務	1	新しい技能を得ることができる	5.75	6.20	0.45	**				
	10	新しい知識を得ることができる	6.05	6.47	0.42	**				
キャリア	4	自分が成長し、向上できる	6.03	6.43	0.41	**				
	11	自分の生活を充実させることができる	5.70	6.19	0.49	**				
地域奉仕	15	楽しみを見出すことができる	6.01	6.56	0.54	**				
	5	多くの人と出会うことができる	6.28	6.63	0.36	**				
能力・経験活用	13	同じ志を持った人達と目的を達成して喜びを感じることができる	6.03	6.48	0.46	**				
	6	社会還元的な活動をすることができる	5.56	6.28	0.72	**				
	12	人からの親切にボランティアという形で恩返しできる	5.84	6.23	0.39	*				
	7	現在の仕事や将来の就職のために役立つ能力を得ることができる	5.49	6.10	0.61	**				
	14	現在や将来のために自分の能力を試す良い機会とすることができる	5.83	6.41	0.58	**				
	2	地域社会へ貢献することができる	5.99	6.57	0.58	**				
	8	地元のために役立つことができる	5.78	6.34	0.57	**				
	3	自分の能力(専門的能力や語学力など)を活用することができる	5.88	6.39	0.52	**				
	9	自分の持っている知識を活かすことができる	5.84	6.39	0.55	**				

\*分散分析とは、複数の群間で平均を比較する手法である。また、1%水準(\*\*)や5%水準(\*)で有意差があるということは、99%や95%の確率で群間に差があるということの意味する。また+は有意な傾向にあること、n. s. は有意な差が見られないことを意味する。

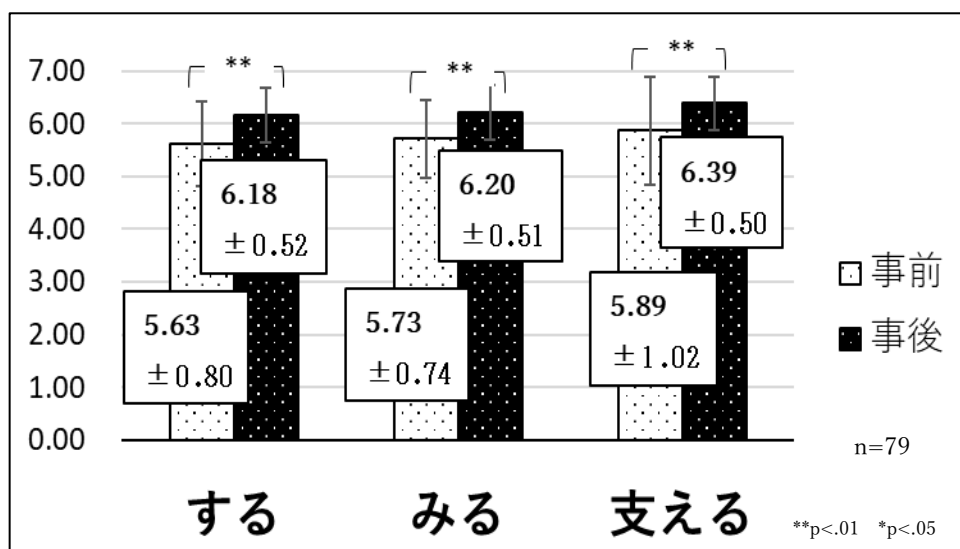


図25 「スポーツ価値意識評価尺度（簡易版）」の質問に対する  
 カテゴリーごとの回答の事前・事後の比較

図25から、「する」、「みる」、「支える」の3つの視点で、事前に比べ、事後の値が有意に高まっており、生徒の「スポーツの価値意識」は、授業前に比べ、授業後に高まったと考えられる。

また、詳細を示した表13においても、「\*\*（1%水準の有意差）」が44項目、「\*（5%水準の有意差）」が5項目、「+」が3項目、「n.s.」が3項目という結果で、多くの項目で有意な高まりが見られた。

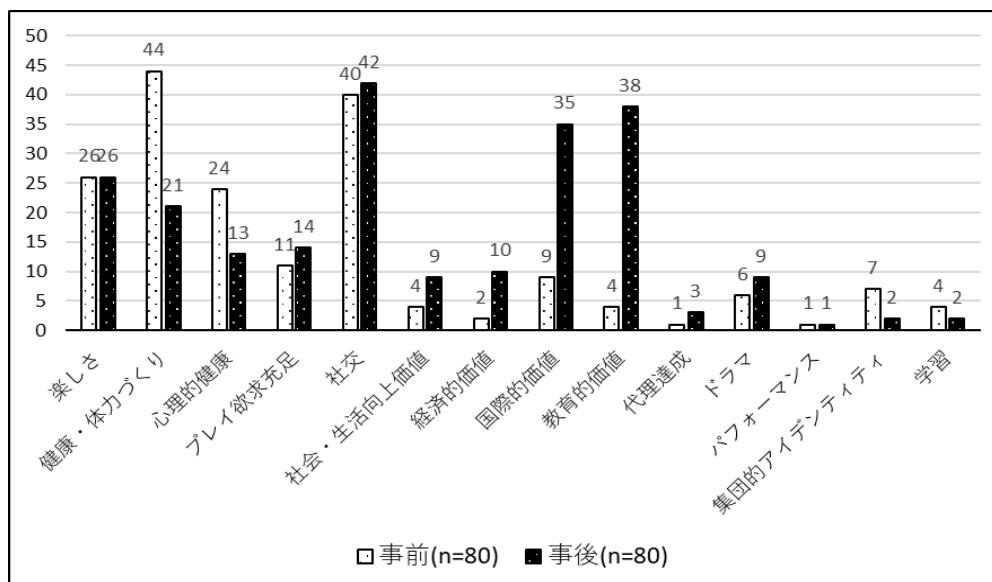
中でも、0.9以上と大きく向上している上位3つの項目（質問）は、「地域や国における産業の発展に役立つ（1.16up）」、「地域や国における新しい観光誘致に役立つ（1.08up）」、「地域住民や国民の異文化理解につながる（0.91up）」である。この上位3つの項目のうち、「地域や国における産業の発展に役立つ」、「地域や国における新しい観光誘致に役立つ」は5時間目「スポーツの経済効果とスポーツ産業」の中で、「地域住民や国民の異文化理解につながる」は1時間目「スポーツの歴史的発展と変容」、3時間目「オリンピックムーブメント」の中で主として取り扱っており、それが大きく向上した要因だと考えられる。

その他の項目の向上については、授業で扱ったものに近い項目もあったが、今回の単元に関しては扱わなかった項目（健康・体力づくりなど）の方がむしろ多かった。しかし、どの項目もほぼ一律に向上している。これは、項目を直接扱わなくとも、今回の体育理論の授業を通して、「スポーツそのものへの興味関心」が高まり、間接的に「スポーツ価値意識」の向上に影響を及ぼしたと考えられる。

以上のことから、生徒の「スポーツ価値意識」が高まったと考えられる。

図26は、事前・事後で「あなたにとって『スポーツの意義や価値』とは何ですか」に対する回答（自由記述）からキーワードを読み取り、「スポーツ価値意識評価尺度」を参考にカテゴライズしたものを集計し、比較したものである。

なお、生徒の自由記述の読み取りとカテゴライズは、筆者と他の2名の県立体育センター指導主事の計3名で行った。（表14）



※一人の記述から複数の項目を読み取れる場合もあるため、合計数とn数は必ずしも一致はしない

図26 「スポーツの意義や価値」に関する記述の事前・事後の比較

表14 「スポーツの意義や価値」に関する自由記述のカテゴリライズ表

カテゴリー名	キーワード例			
楽しさ	楽しい			
健康・体力づくり	自分の調子	体力をつける	体型維持	筋力を上げる
心理的健康	ストレス発散	リフレッシュ	自信	心の支え
プレイ欲求充足	勝敗	達成感	目標の達成	プレーしたい
社交	仲間	コミュニケーション	絆	交流
社会・生活向上価値	生活がよりよい	日常生活の充実	生きがい	生活の質
経済的価値	経済効果	観光誘致	産業	お金を生み出す
国際的価値	世界をつなげる	世界中の人々	国同士が仲良くなる	平和
教育的価値	スポーツマンシップ	フェアプレー	礼儀	努力
代理達成	見ているだけで感動	競い合いを応援	応援する選手の勝利	
ドラマ	わくわく	どきどき	見ている面白い	緊張感を味わえる
パフォーマンス	見ている人が元気に	プレーが輝く		
集団的アイデンティティ	五輪への想いの共有	団結	分かり合う	
学習	考えて動く	学び	技を磨く	学んで理解する

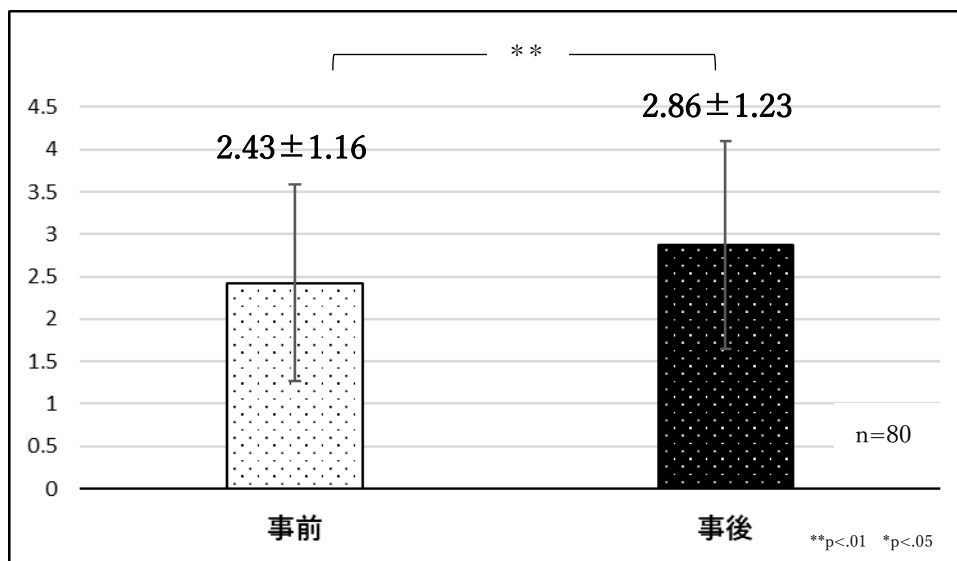
図26から、「国際的価値」、「教育的価値」が顕著に増加していることがわかる。「国際的価値」の向上は、授業内で「世界のスポーツの歴史」や「オリンピック・パラリンピック教育」に触れたことが要因であると考えられる。「教育的価値」の向上は、「スポーツを通じた学び」や「倫理観」に触れた記述が多く、4時間目に扱った「スポーツ倫理」の部分や、体育理論の学習のねらいが生徒に伝わったことが要因であると考えられる。

「健康・体力づくり」、「心理的健康」に関する回答の減少については、「健康・体力づくり」、「心理的健康」への意識が低下したのではなく、授業を通して、「国際的価値」、「教育的価値」のような新たな「スポーツの価値意識」が生まれ、そちらの回答を優先したことが要因だと考えられる。回答時間に限りがあったことや、事前アンケートで回答した内容よりも、新たに学んだ価値観を最優先に記述したと考えられる。

以上のことから、自由記述からの読み取りから、授業で直接扱った内容に近い、「国際的価値」、「教育的価値」といった「スポーツ価値意識」が高まったと考えられる。

そこで、今度は**表14**を基にした、生徒一人あたりの記述の種類の変化を分析することとした。

**図27**は、事前・事後で「あなたにとって『スポーツの意義や価値』とは何ですか」に対する回答（自由記述）から読み取り、カテゴリズできた生徒一人あたりの記述数の平均を事前と事後で比較した**表13**、**図25**と同様に、分散分析を行ったグラフである。



**図27 生徒一人あたりの「スポーツの意義や価値」に関する記述から読み取り、カテゴリズできた数の平均の事前・事後の比較**

**図27**から、事前に比べ、事後の値が有意に高まっており、生徒一人あたりの「スポーツ価値」と読み取れる記述の種類が増えたことがわかる。

このことから、「スポーツの価値意識」が“広がっている”と考えることができる。

**表15**は、生徒の「スポーツの意義や価値」に関する記述の事前・事後の抜粋である。なお、文中の下線部は、読み取り、カテゴリズを行った部分である。

**表15 生徒の「スポーツの意義や価値」に関する記述の事前・事後の抜粋**

<p>生徒P（見取った数2個⇒7個）</p> <p>（事前）体を動かすということを通して、<u>1今まで関わってこなかった人との関わりを持ち、積極的に交流ができることが</u>スポーツの意義だと思います。また、<u>2自分の体力向上、体型維持などの効果もあるいいもの</u>だと考えています。（1. 社交、2. 体力・健康づくり）</p> <p>⇒（事後）スポーツとは<u>1ストレス発散</u>や<u>2娯楽</u>、<u>3楽しみ</u>の一方で<u>4競技性がでてきて互いに高め合うことの重要性</u>やその<u>5高め合う中での学べる教育</u>ができる。そして何よりもスポーツはするだけでなく、みる、知る、支えるという面がありその中で<u>6色々な人と交流し、仲を深めたり、7国際交流などができる</u>という意義がある。（1. 心理的健康、2. 社会・生活向上価値、3. 楽しさ、4. プレイ欲求充足、5. 教育的価値、6. 社交、7. 国際的価値）</p>
<p>生徒Q（見取った数1個⇒3個）</p> <p>（事前）<u>1楽しくするもの</u>。（1. 楽しさ）</p> <p>⇒（事後）<u>1観ている人に良いと思われるもの</u>。<u>2楽しいもの</u>。<u>3ズルやドーピングを使わず、平等に人の力を使って競うもの</u>。（1. ドラマ、2. 楽しさ、3. 教育的価値）</p>

一部の生徒ではあるが、**生徒P**、**生徒Q**の自由記述からわかるように、事前に比べ、事後では、より多くの「スポーツの価値」に関する記述が見られ、「スポーツの価値意識」が広がったと考えられる。

また、**表16**に示すとおり、生徒80人の自由記述における記入文字の総数は事前では4,281字だったのが、事後では6,985字、また、KH Coder<sup>\*</sup>による総抽出語数においても、事前では、2,597語だったのが、事後では4,243語と大きく増加していた。このことから、スポーツの価値意識が高まるとともに、広がったと考えられる。

<sup>\*</sup>KH Coderとは、テキスト型データの計量的な内容分析(計量テキスト分析)もしくはテキストマイニングのためのソフトウェアである。どんな言葉が多く出現していたのかを頻度表から見ることができる。また、テキストマイニングとは、大量の文章データから有益な情報を取り出し、文章を単語に分割し、出現頻度や相関関係を分析し、有益な情報を抽出することである。

**表16 「スポーツの意義や価値」に関する記述の文字数・単語数の事前・事後の比較**

	事前	事後
記入文字の総数	4,281字	6,985字
KH Coder <sup>*</sup> による総抽出語数	2,597語	4,243語

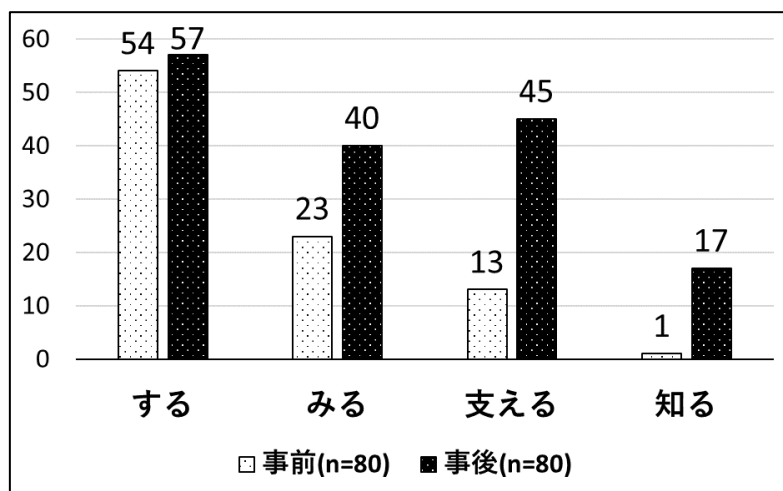
## (2) 『生徒の「スポーツの価値意識」が高まったか』のまとめ

- ・「スポーツ価値意識評価尺度」によると、「スポーツの価値意識」が高まったと考えられる。
- ・また、授業で直接扱った内容に近い「スポーツ価値意識評価尺度」の項目の値は、大きく向上した。授業で直接扱っていない項目に関しても、今回の授業の内容が間接的にスポーツへの価値意識を高めることに貢献したと考えられる。
- ・生徒の自由記述からは、事後に新たなスポーツの価値意識が生まれ、「スポーツの価値意識」に広がりが見られた。

### (3) 生徒の「スポーツとの多様な関わり方」に係る思考が広がったか

図28は、「あなたは将来、スポーツとどのように関わっていきたいと考えていますか」に対する回答（自由記述）から「する」、「みる」、「支える」、「知る」にカテゴリズできるキーワードを読み取って集計し、事前・事後で比較したものである。

なお、生徒の自由記述の読み取りとカテゴリズは、筆者と他の2名の指導主事の計3名でカテゴリズを行った。



※複数の項目読み取れる場合もあるため、合計数はn値と必ずとも一致はしない。

図28 「する」、「みる」、「支える」、「知る」のカテゴリズ集計結果

図28からわかるように「支える」視点に関する記述が顕著に増えている。これは、スポーツと「支える」視点とのつながりが、「トレーナーになりたい」や「サッカーのコーチをする」のように直接的に関わることだけだと認識していたのが、「商品開発をして支える」「数学者として科学的に支えたい」、「将来子どものしたいスポーツを支える」など、「支え方の視点」が広がったことが要因だと考えられる。これは、「オリンピックとドーピング」や「スポーツの経済効果とスポーツ産業」の学習内容において、「支える」視点に重点を置いて教材作成した成果が現れていると考えられる。「オリンピックとドーピング」において、「スポーツ倫理」という分野に触れ、日本人の「スポーツに対する高潔性」や「倫理観のある国民性」がアスリートを「支えている」という「見方・考え方」を学んだことや、「スポーツの経済効果とスポーツ産業」において、「経済や産業の面からアスリートを支える」という「見方・考え方」を学んだことが“間接的支援”の重要性を認識したと考えられる。

「みる」視点については、「プロ野球を観に行く」のようなスポーツの観戦の仕方や技術的な見方ではなく、スポーツを歴史や成り立ちの面など、「スポーツを文化的にみる」ことや、スポーツとメディアの関係や経済・産業とのつながりを学んだことで、「スポーツをビジネスの側面からみる」ことなど、今までとは異なる新しい「スポーツの見方」を学習したのではないかと考えられる。さらに、学習内容として扱った「オリンピック・パラリンピック」を「ぜひ観たい」、「応援したい」という記述が多くみられた。これもまた、「スポーツの文化に触れる」関わり方といえるのではないかと考えられる。今年、東京で開催されるオリンピック・パラリンピックを見るための教育の一端を担えたと感じている。

「知る」視点については、事前では1名のみの記述であったが、事後では17名に大きく増えた。体育理論は体育の「知識に関する領域」であり、今まで知らなかったことを「知る」ことができたということで向上したと考えられる。今回の授業で、生徒たちは、「する」、「みる」、「支える」の視点を持つための基礎としての「知る」視点を持つことができたのではないかと考えられる。

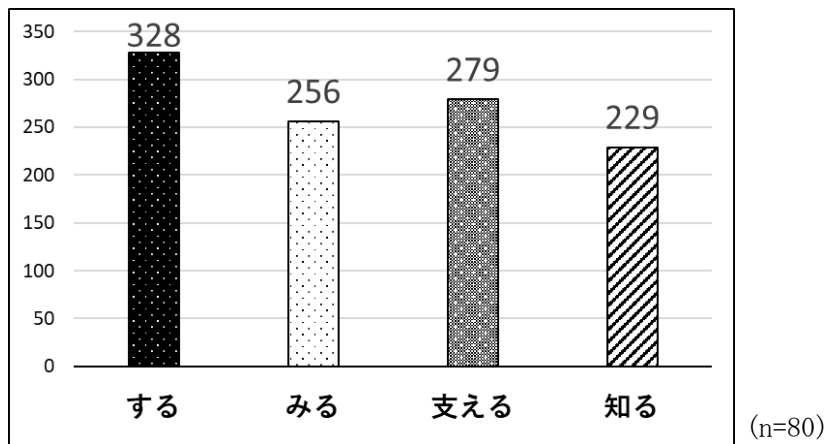


図29 簡易マンダラートにおける記述の「する」、「みる」、「支える」、「知る」ごとの集計結果

図29は、6時間目に5つの学習内容のまとめとして、「これからの自分とスポーツとの関わり方」について、簡易マンダラート（p. 34参照）で今までの学びをアウトプットするという学習活動を行い、その際、「する」、「みる」、「支える」、「知る」の 카테고리別に記述した個数を集計したものである。

図28と同様に、この集計においても、「する」項目の回答が最も多かった。スポーツを「する」ことが、生徒自身の生活と最も身近な関わり方であるからだと考えられる。内容としては、「今やっているスポーツを続ける」という競技を継続する回答よりも、「健康のためにランニングをする」、「子どもと公園で遊ぶ」など、健康や生涯スポーツにつながる観点の記載が多かった。アスリートとして競技を続けていくことも多くの高校生にとって魅力的ではあると思われるが、「健康」や「生涯スポーツ」の観点が多く回答されたことは、これまでの保健の授業や体育の授業の成果であるとも考えられる。

2番目に多かったのは、「支える」項目であった。前述（p. 59参照）したように、授業を通して、スポーツの「間接的支援」の重要性を認識したことが要因だと考えられる。内容としては、「競技ボランティアをする」、「実際に観戦に行き応援する」、「会社に入ってスポンサーとして支える」というような記述であった。

図29は、自由記述からカテゴライズした図28の事後のデータとおおよそ比例しており、本検証授業では、「スポーツとの多様な関わり方」に係る思考の広がりといった面で、「支える」、「知る」の視点を多くの生徒が新たに身に付けることができたと考えられる。

以上のことから、生徒が自身に応じた「スポーツとの多様な関わり方」の思考を広げることができたと考えられる。

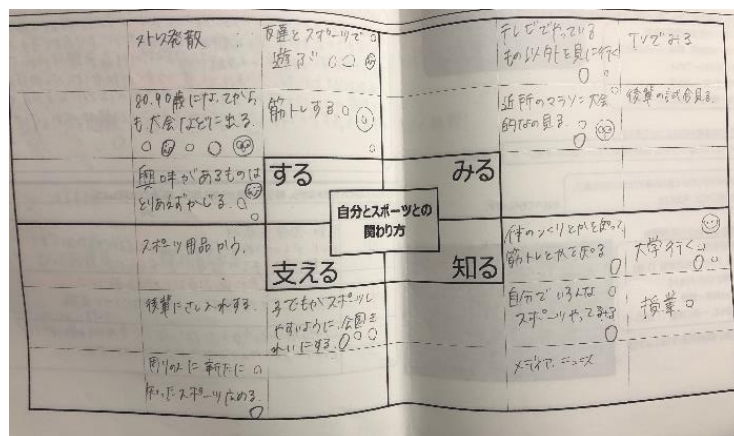


図30 簡易マンダラートの生徒の記述例

### (3) 『生徒が自身に応じた「スポーツとの多様な関わり方」の思考が広がったか』のまとめ

- ・事後アンケートに「する、みる、支える、知る」のうち、「みる」視点、「知る」視点、特に「支える」視点に関する記述が多く見取れ、「スポーツとの多様な関わり方」に係る思考が広がったと考えられる。

### (4) 仮説検証のまとめ

- ・全員の生徒が、体育理論の授業を楽しんでいるとともに、体育理論の授業の必要性を認識した。
- ・生徒は、「教えて考えさせる授業」による学習過程を概ね肯定的にとらえていた。
- ・授業に対する取組姿勢は、ほぼ全員の生徒が、毎時間、前向きであった。
- ・「する、みる、支える、知る」視点を学ぶ教材について、作成者の意図が生徒に反映された。
- ・生徒のスポーツの価値意識が高まり、広がった。
- ・スポーツとの多様な関わり方の思考が広がった。中でも「支える」視点を新たに身に付けた生徒が多かった。



## 第4章 研究のまとめ

### 1 研究の成果と課題

#### (1) 研究の成果

本研究では、スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げるため、「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を活用した体育理論の授業モデルを提案することを目的とし、高等学校第1学年の体育理論の単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」で実践した。その結果、「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を活用した体育理論の授業は、スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げるために有効な手立てであった。

理論研究及び仮説の検証結果等から、本研究の成果を次のとおり整理した。

- ア 豊かなスポーツライフにつながる「する、みる、支える、知る」の視点を身に付けた成果
- イ 体育を前向きにとらえるアプローチ
- ウ 生徒にとって魅力的な単元
- エ 本単元と「教えて考えさせる授業」との相性—知ることが基礎となる—
- オ クライマックスを演出
- カ 見通しと振り返り—学習ノートの有効活用—
- キ 「体育の見方・考え方」を働かせるために

- ア 豊かなスポーツライフにつながる「する、みる、支える、知る」の視点を身に付けた成果  
新解説において、体育の知識は、「意欲、思考力、運動の技能などの源」<sup>3)</sup>と示されている。生徒の事後の感想に「新しい知識が知れたとき、とても気持ちが良かった」、「もっと知りたい」といった趣旨の記述が多数あった。今回、実態調査の結果(pp.42-43 参照)から、体育理論に関する既有知識が少ない状態からのスタートであったが、本研究では、知らなかった知識を習得することで、知的欲求を満たし、学習意欲を高めることにつながることを示唆された。

本研究では、「スポーツの価値意識の高まり」と「スポーツとの多様な関わり方の思考の広がり」をねらい、「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を作成した。

それらの教材は、スポーツの価値意識が高まり、「みる」、「知る」、特に「支える」の視点の広がりにも有効であった。生徒はこれまで、スポーツは「する」ものであるという認識が強く、他の視点は、今まであまり意識したことがなかったと考えられる。今回の体育理論での学びを通して、「オリンピックを観たい、関わりたい」、「ビジネスの視点でスポーツに関わりたい」、「数学者として科学的に支えたい」等の記述からもわかるように、「みる、支える、知る」といった新たなスポーツとの関わり方が思考できるようになったと考えられる。中でも「支える」視点の広がりが顕著であった。これまでの生活の中では、周囲の大人たちに“支えられる”側であった生徒が、学びを通して、「支える」視点を身に付けたと考えられる。また、生徒の「今回の体育理論を通して初めて知ったことでスポーツへの見方・考え方が変わった」、「新しい価値観を開いてくれた」、「この授業を終えた後、全く違う考え方になっていた」といった記述からも、「する、見る、支える」といったスポーツとの多様な関わり方を「知る」ことで、スポーツの価値意識が高まったと考えられる。これは、生徒が、スポーツは「する」だけではなく、スポーツと経済や産業といった社会とのつながりやスポーツの文化的・

歴史的な側面を学んだことで、新たなスポーツの価値観を身に付けた結果だと考えられる。

以上のことから、「スポーツの価値意識の高まり」と「スポーツとの多様な関わり方の思考の広がり」は、保健体育科の目標である「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続する」ための重要なポイントだと考えられる。

#### イ 体育を前向きにとらえる領域

村瀬らは、体育理論を「運動が苦手な生徒達にとってスポーツに関わる場面にポジティブに接することのできる貴重な機会」<sup>8)</sup>と述べている。実際に、本研究でも、事後の感想で、「実技が苦手だったが、この授業を受けてスポーツをやりたくなった」との記述も見られ、体育理論がいわゆる“体育嫌い”の生徒に対し、体育を前向きにとらえることができる領域であると考えられる。さらに、「もっとスポーツを楽しめるようになった」、「この知識を活かしてスポーツと関わりたい」、「実技が苦手だったが、この授業を受けてスポーツをやりたくなった」とのコメントもあるように、体育理論で得た知識やモチベーションを実践に活かそうとする意識も見取ることができた。

#### ウ 生徒にとって魅力的な単元

村瀬らは、「特に、スポーツ文化の理解を実施する場合、子どもは『する』スポーツとはかけ離れた内容に見える。そのため教員が教材研究を十分に行っていない場合、子どもたちの興味関心は喚起されづらいであろう」<sup>8)</sup>と述べている。今回、入学年次（1年次）の単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」に対して、生徒がしっかりと興味関心を示している結果が得られた。つまり、この単元は、生徒の興味関心を喚起する素材が十分に存在すると考えられる。むしろ、筆者は、生徒にぜひ伝えたいスポーツにまつわるエピソード等の素材が多くあり、何を教材にするかを悩んだほどであった。村瀬らが、「教員が教材研究を十分に行っていない場合」<sup>8)</sup>と述べているが、教員がこの単元の教材研究を十分にできれば、入学年次（1年次）の単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」は生徒にとって魅力的な単元だと考える。本研究では、その教材研究を行う際のポイント（pp. 19-23）の一例を示すことができたと考える。

事後アンケートの感想を、KH Coder でテキストマイニング（p. 59 参照）を行ったところ、80名の文章から、「楽しい」、「楽しかった」、「楽しく」という単語が57個抽出された。授業の楽しさを問うた質問で、「そう思う群」が100%であった（p. 45 参照）こともあり、本単元が楽しい授業であったことに確信が持てた。

“楽しむ”ことが学びの大前提である。本研究で、生徒は、スポーツの価値意識が高まっていくことやスポーツとの多様な関わり方の思考が広がっていくことを“楽しんでいた”と考えられる。

#### エ 本単元と「教えて考えさせる授業」との相性—知ることが基礎となる—

本研究で取り扱った単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」は、「教えて考えさせる授業」による学習過程が適した領域であると考えられる。この単元で内容は、生徒にとって日常出会わない内容であり、ほとんど“知らない”状態からのスタートだと考えられる。中学校でも体育理論は設定されてはいるが、年間3単位時間と少なく、本研究の実態調査（p. 42 参照）からもわかるように記憶に残っていないことがわかった。つまり体育理論は、まず知識を「教える」ことから始めなければ、問題解決学習を行わず、「教えずに考えさせる授業」<sup>36)</sup>となってしまうことも考えられる。木原も、体育理論の主体的な学びをはき違え、生徒任せになることを懸念しており、「体育理論で学ぶ知識は、運動領域における知識や自身の生活経験の範疇を超えた概念的なものであり、生徒たちが勝手に自ら見出すこと

は困難」<sup>70)</sup>と述べている。よって、体育理論は、「教えて考えさせる授業」による学習が適した領域であると考ええる。また、授業をつくる側の筆者も、授業準備を進める上で、「教えて考えさせる授業」は見通しが立てやすく、単元計画・教材作成がしやすいと感じた。事後の感想に、「授業が受けやすかった」という趣旨の記述が多数あったことから、一定の法則性のある授業の進め方とペア学習を中心とした学習形態により、生徒にとって受けやすい授業になったと考えられる。

#### オ クライマックスを演出

1～5時間目でしっかりと「教え」、6時間目に、これまでの授業を象徴するスライドにバックミュージックをかけながら視聴させ（回想ムービー、p. 33 参照）、クライマックスを演出したことは、授業における取組姿勢等の検証結果（pp. 50-51 参照）から、単元を通して考えるまとめの時間には効果的であったと考えられる。また、6時間目で行った「自分とスポーツとの関わり方」で使用した簡易マンダラート等の教材（pp. 33-34 参照）は、1～5時間目で学んできた知識を自分の生活に落とし込んだり、スポーツとの多様な関わり方を具体的にイメージしたりすることができ、スポーツの価値意識をさらに高めることにつながったと考えられる。

#### カ 見通しと振り返りー学習ノートの有効活用ー

本研究においては、学習ノート（p. 25 参照）で本時の学習のねらいを明確にしてから授業を行い、授業終盤には学習ノートで本時の振り返りを行うこととした。また、筆者は生徒の振り返りに対してコメントを付けて学習ノートを返却した。そして、この一連の活動が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動を充実させ、生徒の学習意欲の向上に大きく貢献できたと考ええる。

なお、学習ノートは、「教えて考えさせる授業」の「自己評価」活動として位置付けて行い、事後アンケートでは生徒も肯定的なとらえ方をしていた（pp. 49-50 参照）。

#### キ 「体育の見方・考え方」を働かせるために

今回の学習指導要領改訂において、「深い学びの鍵」<sup>53)</sup>とされるのが「見方・考え方」であり、科目体育の目標にも「見方・考え方を働かせ」<sup>54)</sup>と記載されている。

新解説では、「体育の見方・考え方」について、次のように述べられている<sup>55)</sup>。

体育の見方・考え方については、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」

以上のことから、今回は、「する、みる、支える、知る」の視点を学習したことで、生徒は今後、「体育の見方・考え方」を今まで以上に働かせることが可能になったと考えられる。

**(2) 研究の成果を基にした授業モデルの提案**

以上の本研究の成果を基に、第1学年の「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」の体育理論の授業づくりのポイントについて、次のとおり提案する。

**表 17**は、今回の「教えて考えさせる授業」による授業を一部修正したモデルである。

- ア 学習指導要領解説を読み込み、指導内容を明確に把握する。
- イ アに対応した教材（教科書を含む）を準備する。その際、「する、みる、支える、知る」の視点も学べる教材を準備する。
- ウ 見通しを立て、振り返りが行える学習ノートを準備する。できれば、生徒の振り返りに対し、コメントを書いて返却する。
- エ 画像や動画など視覚に訴える教材を可能な限り準備する。
- オ 教えることと考えることを意図的に配置する。

**表 17 「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」の授業モデル**

時間	学習内容	主な学習活動								
1	オリエンテーション（見通しを立てる） スポーツの歴史的発展と変容 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td>※1</td> <td>○ ※2</td> <td></td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る	※1	○ ※2		◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる <b>理解確認のペア・ミーティング※3</b> ディベート風ブレインストーミング 学習ノート（振り返り）
する	みる	支える	知る							
※1	○ ※2		◎							
2	スポーツの技術、戦術、ルールの変化 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る		○		◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる <b>理解確認のペア・ミーティング※3</b> ディベート風ブレインストーミング 学習ノート（振り返り）
する	みる	支える	知る							
	○		◎							
3	オリンピックムーブメント <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td></td> <td>◎</td> <td>○</td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る		◎	○	◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる <b>理解確認のペア・ミーティング※3</b> フォトランゲージ 分類フレーム付きブレインストーミング 学習ノート（振り返り）
する	みる	支える	知る							
	◎	○	◎							
4	オリンピックとドーピング <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td>※1</td> <td></td> <td>◎</td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る	※1		◎	◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる <b>理解確認のペア・ミーティング※3</b> 分類フレーム付きブレインストーミング 学習ノート（振り返り）
する	みる	支える	知る							
※1		◎	◎							

5		スポーツの経済的効果とスポーツ産業 <table border="1" data-bbox="373 253 766 338"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○</td> <td>◎</td> <td>◎</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る		○	◎	◎	教える 講義（ICTの活用） 考えさせる <b>理解確認のペア・ミーティング※3</b> 分類フレーム付きブレインストーミング 学習ノート（振り返り）
する	みる	支える	知る								
	○	◎	◎								
6	考えさせる	自分とスポーツとの関わり方 <table border="1" data-bbox="373 504 766 633"> <tr> <td>する</td> <td>みる</td> <td>支える</td> <td>知る</td> </tr> <tr> <td colspan="4">生徒が今までの学びを活かし 思考し判断、表現する</td> </tr> </table>	する	みる	支える	知る	生徒が今までの学びを活かし 思考し判断、表現する				振り返り 講義（ICTの活用） 考えさせる お見合いルーレット 簡易マンダラート 学習ノート（振り返り）
する	みる	支える	知る								
生徒が今までの学びを活かし 思考し判断、表現する											

【学習内容に関する補足】◎特に重点を置き学びを促す視点 ○重点を置き学びを促す視点

- ※1 体育理論（1～5時間目）では、「する」視点は重点を置かず、座学でこそ成果の高まりが期待できる「みる、支える、知る」の3つの視点の学習を重視する。
- ※2 本研究における生徒の回答を参考に重点を置く視点を変更した。この学習内容においては、スポーツの文化的な内容が主であり、スポーツを文化的に「みる」ことに重点を置くこととした。
- ※3 本研究における検証授業では、「理解確認」に代わる活動として「ペア・ミーティング」を行ったが、効果を検証できるほど重点を置かずに行った。しかし、実際に検証授業を行う中で、短時間で生徒同士で理解確認ができるとも合理的な学習であった。  
よって、生徒が理解に苦しむであろうポイントをあらかじめ見通し、計画的にペア・ミーティングによる「理解確認」を実施することは、高い学習効果が期待できると考えられる。

### （3）今後の課題

研究を進めていく中で、次のような課題が見られた。

本検証授業で学んだ4つの視点、つまり「体育の見方・考え方」を他の運動領域でどのように働かせるかが、今後の課題であり、年間指導計画を作成する段階で、検討していく必要がある。

## 2 共通教材としての検討

筆者が本研究に至った背景は、体育理論の授業は現場に浸透しきれておらず、また、授業改善も進んでいないと考えられることがきっかけであった。(p.5 参照)

そして、村瀬ら、大越は、「教材の扱いづらさ」や「教員の教材研究の不足」を例として挙げ、また、体育理論のアクティブ・ラーニングのロールモデルを提示していくことが、体育科教育関係者に求められていると述べている<sup>8) 12)</sup>。(p.5 参照)

そこで、今回は本研究と並行して、第1学年の他の6クラスでも同じ教材を使用し、4名の教員が授業を行い、体育理論の共通教材の有効性を探った。

筆者が、他の4名に対して単元計画・教材の活用方法についてのレクチャーを直接行った。(p.34参照)

本研究と同様の事前・事後アンケートを実施したので、その結果の抜粋を次に示す。

### (1) 生徒が授業をどのようにとらえたか

#### ア 体育理論の授業は楽しかったか

図31は、事後アンケートの「体育理論の授業は楽しかったですか」という質問に4件法で回答してもらった結果である。

#### イ 体育理論の必要性の認識

図32は、事前アンケート（以下、事前）と事後アンケート（以下、事後）の「体育の授業において『座学で学ぶ知識（体育理論）』は必要だと思いますか」という質問に4件法で回答してもらった結果である。

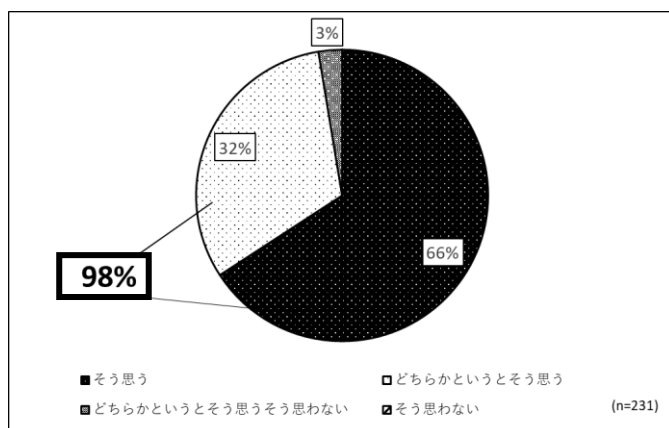


図31 「体育理論の授業は楽しかったか」に対する回答 (他の6クラス)

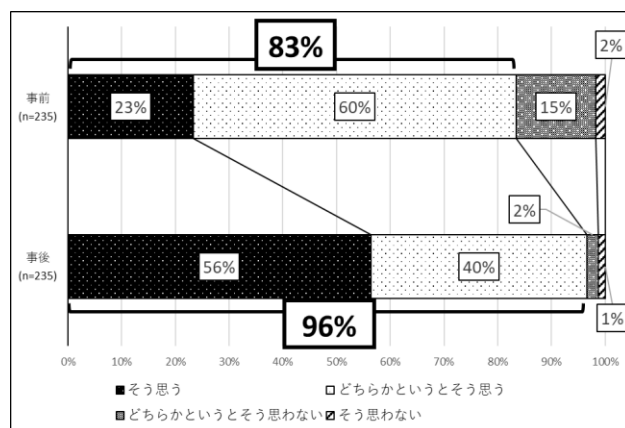


図32 「体育理論は必要だと思うか」事前・事後の比較 (他の6クラス)

図31を見ると、「そう思う群」が98%を占め、ほぼ全員が、今回の体育理論の授業を楽しむことができたと考えられる。

図32を見ると、「そう思う群」が、事前では83%であったものが、事後では96%となり、ほぼ全員の生徒が、今回の授業を通して、体育理論の必要性を認識できたと考えられる。

## (2) 生徒の「スポーツの価値意識」が高まったか

図33は、「スポーツ価値意識評価尺度（簡易版）」（7件法、p. 8参照）による事前と事後アンケートの結果（3つの視点毎の平均値及び対象の2クラス（p. 56の図25参照）と同様に行った分散分析の結果）である。

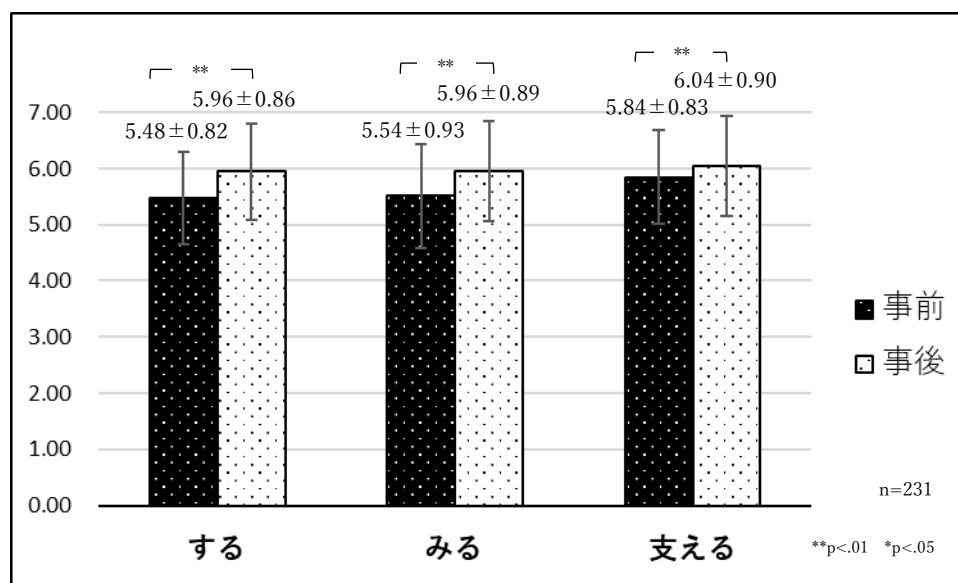


図33 「スポーツ価値意識評価尺度（簡易版）」の質問に対する  
カテゴリーごとの回答の事前・事後の比較

図33から分かるように、3つの視点とも、事前と比べ、事後の値が有意に高まっており、「スポーツの価値意識」は授業後に高まったと考えられる。

以上のように、共通教材を使用した6クラスにおいても、筆者の実践した授業と同様の効果があったと考えられる。

また、図31、32の結果も、第3章の筆者による授業の結果（図16p. 45、図17p. 46参照）と比較しても、「そう思う群」は、大きな差は見られなかった。

村瀬らの研究にもあるように、学校現場では、体育理論に対して「内容が扱いづらい」、「子どもの反応が良くない」、「教材が手元に無い」という声を多く聞く。今回、教材を共通教材として使用することで、一定の効果を示したことから、もし、内容の扱いや教材で困っている場合は、今回のような共通教材による体育理論の授業を検討してもよいのではないかと考える。

その際、教材作成時から関係教員が関与できると、教材解釈も深まり、今回以上の成果が期待できると考えられる。

### 3 今後の展望

#### (1) 体育理論と運動に関する領域とを関連付けるカリキュラム・マネジメントに係る実践研究への期待

新解説に、運動に関する領域において、具体的な知識と汎用的な知識との往還を図るなどして、知識を効果的に理解できるようにするとともに、体育理論との関連について、「体育理論、体づくり運動及び保健の学習成果を関連させ、それぞれの領域の学習に生かすこと」<sup>29)</sup>と示されている。また、佐藤は、「体育理論の学習と実技の学習をどのように関連付け、深い学びを導くのか」<sup>71)</sup>が大切であると述べている。

つまり、体育理論で学ぶ知識を生かし、運動に関する領域の授業を展開していくことが、保健体育科において重要なカリキュラム・マネジメントであると考えられる。

しかし、本研究においては、体育理論と運動に関する領域との関連まで追求する研究に至らなかった。特に、今回の研究対象である入学年次（1年次）に設定されている体育理論の学習内容は、スポーツの歴史や文化的な内容が中心であり、一般的に運動領域との関連付けが難しいことが想像できる。しかし、本研究を終えた生徒たちの事後の感想に、「スポーツの見方・考え方が変わった」、「今後、体育の種目の取り組み方が変わりそう」等、運動に関する領域への良い影響が期待できる趣旨の記載が多くあった。ぜひ、体育理論と運動に関する領域との効果的な関連付けを工夫したカリキュラム・マネジメントに関する研究が行われることを期待したい。

#### (2) 入学年次以降の年次における体育理論の教材研究の継続

本研究では、入学年次（1年次）の単元しか実践できなかった。入学年次の次の年次（2年次）では、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」、それ以降の年次（3年次以降）では、「豊かなスポーツライフの設計の仕方」が設定されている。単元の特性に応じて設定の時期、タイミング（期間をまとめた実施か分散させた実施か）など、検討すべき点はあるが、総じて「教えて考えさせる授業」による学習過程は、単元計画、指導案作成の観点からも見通しをもって計画を立てやすく、生徒達も授業を受けやすいと考えられる。また、特に「みる、支える、知る」の視点は、生徒にとって大変新鮮で興味関心の高い視点であったことがわかった。

ぜひ、この「教えて考えさせる授業」を学習過程の基盤に置き、「する、みる、支える、知る」視点を大切に、本研究ではできなかった体育理論の他の単元における授業の実践研究に期待しつつ、筆者も引き続き体育理論の教材研究を続けていきたいと考えている。

#### (3) 運動に関する領域で「体育の見方・考え方」を働かせるための検討の必要性

体育の様々な領域で、教員から「『体育の見方・考え方を働かせましょう』と言っても、生徒は体育の見方・考え方がわかっていないと働かせることはできない。」との声がよく聞かれる。今回の授業は、他の領域でも「体育の見方・考え方」を働かせるために貢献できたと考える。次の段階は、具体的に、他の領域のどのような場面で「体育の見方・考え方」を働かせるかの検討が必要である。

#### (4) 学校現場における有効な体育理論学習の広がりへの期待

今回、検証授業を行うにあたって、瀬谷高等学校の保健体育科教員4名には、多大な協力を得ることができ、本当に感謝している。この4名の教員は、本研究の趣旨を理解し、自ら進んで共通教材による授業実践をしたいと手を挙げてくれた意欲のある教員たちであった。実際に、今回のような成果が出たのは、共通教材の質以前にこの4名の教員の“保健体育科教育に対する意欲”あってこそその結果であると確信している。



さらに、今回実践した4名の教員は、「来年度、どのように体育理論の学習を行えばより効果的か」ということを話し合い、準備を始めている。本当に嬉しく、頼もしい反応であり、教育現場にあるべき教員の姿だと感動した。

ぜひ、今後もより良い保健体育科教育の実現に向けて、意欲ある教員たちによる有効な体育理論の教材研究、授業実践が広がっていくことを願っている。

## 最後に

私自身、近年、日々の多忙さを言い訳にして授業研究が疎かになっていたと感じる。ここまで学習指導要領を読み、解説でその1つ1つの意味を紐解き、さらにその根拠となる答申で理解を深めたことも初めてであった。「何をどのように教えるか」を熟考し、単元計画、指導案、教材に落とし込んでいく、まさに私自身が、「主体的で・対話的で深い学び」を行う日々であった。本来、保健体育科のプロとして知らなければならないことを、今まで不勉強なまま生徒の前に立ち続け、いかにプロ意識が欠けていたか日々感じながら研究を行っていた。

そして、本研究において、懸命に思考を凝らし、実践した検証授業であった。その検証授業を実施したクラスの生徒の事後の感想に次のような文章があった。

最後の振り返りが返ってくる度に達成感があり、とても楽しい時間を過ごせました。正直、体育でこんなに楽しい時間を過ごせたのは初めてです。とても感謝しています。

今回のことを活かして今後もやっていきたいなと思います。また、新たな楽しみ方ができるかもしれません。ありがとうございました。

今までのスポーツに対する価値観を新しく開いてくれた最高の授業でした。

本当にこの授業で自分の中の何かが変わった気がする。

私自身、保健体育科教諭として、授業を通してこれほど感動を感じる生徒の反応をもらったのは初めてであった。本当に嬉しかった。そして、授業の持つ教育的効果の重要性を改めて感じることができた。授業を大切にしよう。当たり前のことだが、身に染みて再確認した。

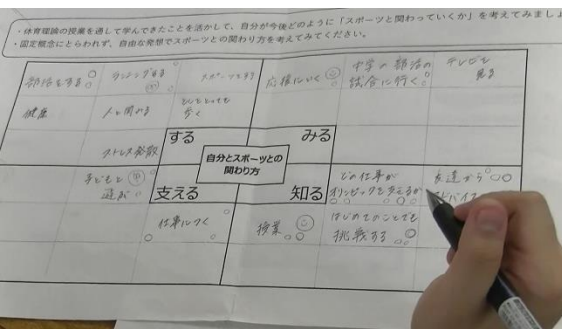
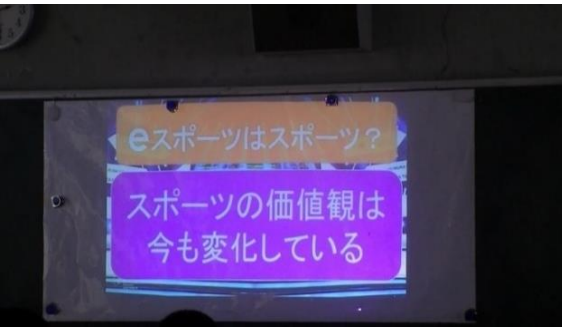
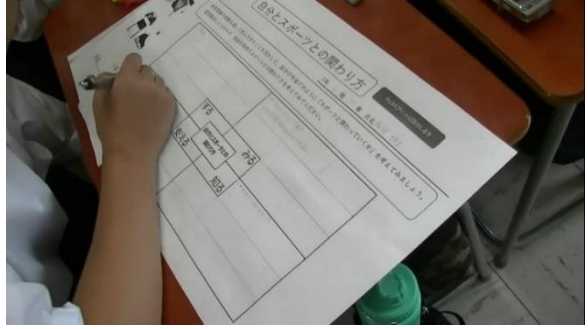
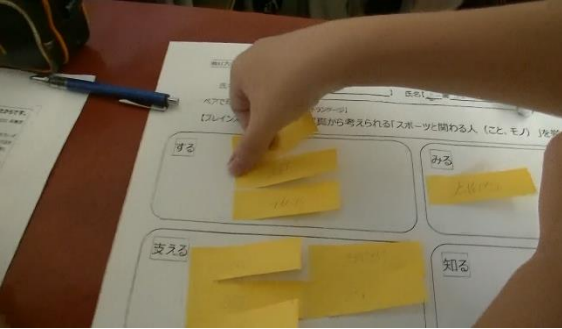
自分自身の「無知の知」を知ったこと、教育のプロとしての自覚を一新できたこと等々、この長期研究員としての1年間は、保健体育科教諭としての一生の財産である。

保健体育科教育が持っている素晴らしい教育効果を今後も追い求めていきたい。また、今回の経験をより多くの教員と共有したいと思っている。

## 謝辞

最後になりましたが、本研究を行うにあたり、ご多用の中、快く受け入れてくださった瀬谷高等学校の校長先生、副校長先生、教頭先生、クラス担任の先生方、共に授業実践してくれた4名を含む保健体育科の先生方、他教科にも関わらず検証授業や研究協議へ参加していただいた先生方、他校から参観していただいた先生方に感謝いたします。また、専門的な見地から様々な御指導、御助言をいただいた、日本体育大学教授の岡出美則氏、桐蔭横浜大学教授の佐藤豊氏、東海大学教授の大越正大氏、早稲田大学教授の木村和彦氏、神奈川県スポーツ局スポーツ課副主幹の野間基子氏、福山平成大学准教授の松田広氏、東京都立新宿高等学校教諭の田久保裕之氏、神奈川県教育委員会教育局指導部保健体育課の幸田隆課長及び亀谷学指導主事に感謝いたします。

そして何より検証授業に前向きに取り組んでくれた瀬谷高等学校の生徒たちと、協力してくださった保護者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。



## [引用・参考文献等]

---

- 1) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』2016年 p. 187
- 2) 前掲書1) p. 190
- 3) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 保健体育編体育編』東山書房、2018年 p.8
- 4) 佐藤豊・友添秀則編著『楽しい体育理論の授業をつくろう』大修館書店、2011年 p. 6
- 5) 笹生心太、中村平「高等学校における体育理論授業の実態に関する研究」東京女子体育大学女子体育研究所所報、2016年 p. 31
- 6) 前掲書5) p. 34
- 7) 村瀬浩二、流川鎌語、三世拓也「体育理論の実施状況と実施内容に関する考察」和歌山大学教育学部、2016年 p. 2
- 8) 前掲書7) p. 3
- 9) 黒澤寛己「学校体育における『体育理論』の基礎的研究-『体育理論』授業の充実・発展に向けて-」びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要、2017年 p. 92
- 10) 前掲書9) p. 93
- 11) 松田広「高等学校『体育理論』領域における授業作成の試みに関する研究-単元『ドーピングとスポーツ倫理』の授業評価尺度の開発を通して-」福山平成大学福祉健康科学研究(13)、2018年 p.107
- 12) 大越正大『楽しくわかる「体育理論」の実現に向けて』体育科教育、大修館書店、2016年10月 pp.24-25
- 13) 市川伸一『「教えて考えさせる授業」を創る』図書文化、2008年 p. 3
- 14) 前掲書13) p. 5
- 15) 前掲書13) まえがき
- 16) 市川伸一『授業からの学校改革「教えて考えさせる授業」による主体的・対話的で深い習得』図書文化、2017年 p. 11
- 17) 前掲書14) p. 10
- 18) 前掲書14) pp. 29-181
- 19) 前掲書3) p. 186
- 20) 文部科学省「スポーツ基本法」2011年
- 21) 神奈川県「神奈川県スポーツ推進計画」2017年
- 22) 野間基子『高等学校における「体育理論」に関する研究-内容と構造に着目して-』早稲田大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻スポーツ文化研究領域修士論文、2011年 p. 21
- 23) 岡出美則『学習指導要領における体育理論の変遷』体育科教育、大修館書店、2016年10月 p. 19
- 24) 文部科学省『平成20年告示中学校学習指導要領』2008年
- 25) 文部科学省『平成21年告示高等学校学習指導要領』2009年 p. 75
- 26) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東山書房、2008年 pp.8-9
- 27) 前掲書22) p. 1
- 28) 文部科学省『平成30年告示高等学校学習指導要領』2018年 pp. 134-136
- 29) 前掲書3) p. 176
- 30) 前掲書4) p. 2
- 31) 前掲書4) p. 3
- 32) 大越正大「多様なスポーツの楽しみ方-する、支える、知る-」佐藤豊編著『平成30年度版学習指導要領改訂のポイント 高等学校保健体育・体育』明治図書、2019年 p. 35
- 33) 前掲書7) p. 5
- 34) 前掲書1) p. 186
- 35) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改

- 善ついで（答申）』2008年 p. 20
- 36) 前掲書13) p. 10
  - 37) 前掲書13) pp. 10-11
  - 38) 前掲書13) pp. 13-14
  - 39) 前掲書16) p. 11
  - 40) 前掲書13) p. 28
  - 41) 前掲書13) p. 29
  - 42) 前掲書13) p. 21
  - 43) 前掲書13) p. 26
  - 44) 前掲書13) pp. 90-110
  - 45) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成21年告示)解説保健体育編体育編』東山書房、2009年 pp.91-96
  - 46) 文部科学省「高等学校学習指導要領の改訂に伴う移行措置並びに移行期間中における学習指導等について（通知）」2018年
  - 47) 前掲書4) p. 24
  - 48) 日本アンチ・ドーピング機構ホームページより<https://www.school.playtruejapan.org/>「『スポーツの価値』を基盤とした教育-スクールプロジェクト-」2020年1月30日
  - 49) 文部科学省「スポーツ基本計画」2017年3月 pp. 1-4
  - 50) 公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第3報-」2016年 p. 3
  - 51) 前掲書50) pp. 66-67
  - 52) 前掲書3) p. 9
  - 53) 前掲書28) p. 131
  - 54) 前掲書3) p. 4
  - 55) 前掲書3) p. 22
  - 56) 高橋修一「学校体育における『みる・支える・知る』スポーツとは」体育科教育、大修館書店、2019年7月 p. 18
  - 57) 国立教育政策研究所教育課程研究センター「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(高等学校保健体育)～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～」2012年 pp.49-50
  - 58) 前掲書4) p. 131
  - 59) 前掲書4) p. 20
  - 60) 友添秀則「体育H体育理論」佐藤豊編著『平成30年度版学習指導要領改訂のポイント 高等学校保健体育・体育』明治図書、2019年 p. 55
  - 61) スポーツ庁「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料」2017年
  - 62) 神奈川県教育委員会「かながわオリンピック・パラリンピック教育学習教材」2017年
  - 63) 東京都教育委員会「オリンピック・パラリンピック学習読本高等学校編」2016年
  - 64) 木村吉次編著「体育・スポーツ史概論」市村出版、2001年
  - 65) 新井博・榊原浩晃編著「スポーツの歴史と文化 スポーツ史を学ぶ」道和書院、2012年
  - 66) 井上俊・菊幸一編著「よくわかるスポーツ文化論」ミネルヴァ書房、2012年
  - 67) 笹川スポーツ財団ホームページより<https://www.ssf.or.jp/history/tabid/811/Default.aspx>スポーツ歴史の検証 2020年1月30日
  - 68) 公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構ホームページより<https://www.playtruejapan.org/>2020年1月30日
  - 69) 前掲書28) p. 28
  - 70) 木原慎介『体育理論における主体的な学びとは』体育科教育、大修館書店、2019年12月 p. 53
  - 71) 前掲書32) 佐藤豊「カリキュラム・マネジメントと学習評価」佐藤豊編著『平成30年度版学習指導要領改訂のポイント 高等学校保健体育・体育』明治図書、2019年 p. 3